

## 사단법인 사할린주 한인 이중징용광부 유가족회

### 声明書

1941 ~ 45年太平洋戦争(大東亞戦争)以前或いは戦中に、当時日本の植民地であった朝鮮半島の南部地域からサハリン島(旧樺太)の諸炭鉱に多くの朝鮮人靑壯年が強制連行され、労働力を搾取された事は、世界万民周知の事実であります。だが、彼等朝鮮人鉱夫の中、一部は1944年8月下旬から9月初旬に亘って再徴用連行に依り日本内地の大工業地帯である九州や東京近辺の茨城県の諸炭鉱に配置され、重労働に従事させられた人達が実はいたのです。当時、日本政府は該鉱夫達に「銃後の戦士」なる美名を冠し、励ましていました。サハリンに居残った家族や妻子達に彼等を恰も出征兵士を戦線に見送る如き心持ちで、万歳を唱えながら夫や父兄を遠い日本の南地方に見送る様、煽動しました。我々は、国の為に家族、妻、幼い子達をサハリンに残して、遠い日本の南の炭鉱へ出発する夫や父兄を喜んで見送りました。

尊敬する一億二千万の日本国民に問いたいのです。太平洋戦争の最後の砲声がなり止んで、既に56年にもなる少なからざる歳月が流れ、人類は新21世紀を迎えましたが、日本政府の戦争遂行目的の為に1944年9月に銃後の産業戦士として激励されながら樺太から日本内地へ徴用、連行されて行った我々の夫や父兄は現在、何処に居るのですか、彼等の生死、運命はどうなったのか、未だに確認されていません。日本政府は終戦後56年も経過しましたが、恋しい夫や愛する父兄を未だに家族の元へ戻していないのです。それにも拘らず、彼等鉱夫徴用者の家族、妻子、遺家族に対しては一言の慰謝辞も表明されずに、戦後半世紀が過ぎた今でも、当時の真相を隠蔽しようと努める為か、それとも別な意図があつての故か、終戦56年が流れ去った今でも継続、沈黙を守っているのが不思議に思われ、多くの疑問が生じます。私達は以上の事実を貴方達に伝え、この問題の解決に助力して戴きたいのです。

我々、樺太二重徴用鉱夫達の子孫や遺家族は、色々様々な蔑視や迫害を受けながら、貧窮な生活に喘ぎつつ、生き延びて来ました。我々には過去の困難に満ちた人生を忘れ様としても忘れられません。夫や父兄を永遠に日本政府に依って奪われた若い女性は貴重な青春を犠牲にし、夫無しの生活を余儀無くされ、子供達は父無しの息子や娘に育ったのです。我々は孤児の運命に落ち、一生を貧しい生活に呻吟するのを余儀無くされたのです。数多い母達は死去し、目下、生存者は僅か、指で数える程しか残っておりません。当時、1944年代に10~14才の少年、少女であった人達が、今では60~70才の高齢に達しました。我々の余生は幾許も残っていません。尚、その子供達の中でも、早やこの世の人でなくなった人々が多いのです。

以上に述べた事実が現況のサハリン二重徴用鉱夫被害者の問題なのです。日本政府が万金を出すとしても、56年間の物心両面の被害補償にはならないと思います。尚、我々が欲する所は、補償金では無く、我々が歩いて来た様な悲惨な人生を後世、誰かに反復させたく無い願望にあります。上述の様な人生行路を歩む事は永遠に消滅、防止しなければならないと思います。それ故二重徴用鉱夫連行の真相を明らかに公開して、被害者各自に正当公明なる被害補償を行う様、一億二千万の日本国民が我々の立場に同情、共鳴し、我々の側に立つて日本政府に対する我々の訴えに助力、声援を戴きたいのです。

尚、二重徴用鉱夫の子孫達は下記の如く日本政府並びに関連鉱業企業体に問いたいのです：

1. 日本政府は、1945年8月15日太平洋戦争が終焉した後、56年も経ちましたが何故徴用鉱夫を家族の元へ戻し、帰家させて下されなかったのですか？若し、お忘れしたとしたら、残念ですが、今でも遅くはありませんから、遺家族に対してでも支援をして下さるのが道義ではありませんか？

2. 日本政府は終戦後、57年も過ぎたにも拘らず、該徴用鉱夫の運命や生死、消息を確認し、公開しない理由を説明し、その調査を行わないのは何故ですか？
3. 妻子は夫や父兄を永遠に日本政府に依って奪われ、亦徴用鉱夫は妻子を失って、尚、一生涯苦痛に満ちた生活を余儀無くされ、子供達は貴重な青少年期を犠牲にしましたこの代価は誰が責任を負って、支払うのでしょうか？
4. 妻子や家族の消息も知らずにこの世を去った二重徴用鉱夫、亦夫や父兄の生死も知らず、音信も無くこの世を去った妻子に対する償いは誰が責任を持つのですか？
5. 尚、父兄を日本政府に奪われた子供達は、幼少の頃より労働現場で働くのを余儀無くされた為、定規教育を受ける事が出来ず、現在半文盲者の立場にあります。この空白を誰が埋め合わせ、責任を取らなくてはならないのでしょうか？
6. 日本政府や鉱山企業体は1939~45年間に亘る、各徴用鉱夫に対する未払いの貸金、戦時貯金、戦時愛国貯金、国債券、様々な納税額が幾ら程だったのか計算して見た事がありましたでしょうか？誰がそれを精算するのでしょうか？
7. 夫を日本政府に奪われた妻達は、生活難に陥り、子供達を、動物が自分の子を捨てるが如く、涙を流しながら他人に貰子として与えた例も数多くありました。その償いを誰がし、その責任を誰が取らなければならないのでしょうか？

以上に指摘した物質的、精神的被害に対する補償は日本政府及び関連鉱山企業体が全ての責任を負って、速やかに事実調査を厳密に実現した後、公明正當に被害者各自に早期に損害賠償を行う事を我々は要求します。尚、遺家族の高齢化が速く、皆60~80代に至っています。永住帰国希望者には韓国に個人住宅と生活支援を含む、家族全員帰国条件を設ける事等、多くの問題が生じます。

在ロシア・サハリン州韓人二重徴用鉱夫遺家族会は、下記の如き要求書を日本国会、政府、外務省、日本赤十字社、関連鉱山企業体に提出する次第です。

在サハリン州(旧南樺太)  
韓人二重徴用鉱夫遺家族会

2001年

YUZHNO-SAKHALINSK

## 二重強制徴用連行者達の子孫の運命

日本政府は1939～45年の戦争遂行の為に、当時日本の植民地であった朝鮮半島の南部地方から南カラフト（南樺太）の炭鉱へ数千人の朝鮮労働者を強制連行し、強制労働に従事させました。彼等数千人の中1944年8～9月には日本国内の茨城県、九州等の諸炭鉱に新たに再強制徴用連行された3000人の朝鮮人炭鉱夫は終戦を日本国内で迎えました。亦、サハリンに残された家族や子供達は、頼りの無い日々を送り、父や兄のもどるのを一日千秋の思いで待兼ねていました。この時の詳しい内容は、周知の如くカラフトの石炭は主に船舶輸送で日本国内に搬入されていました。殊に石炭が良質で熱量が高いとの評価を受けていた、現ウグレゴールスク（旧恵須取）地方の石炭が輸送され、日本国内の軍需工場の燃料として利用されていました。日本軍の制海権が米英軍に奪われた1944年8～9月以降には、海路ではカラフトの石炭を輸送出来なくなったのです。これに依り日本政府は、恵須取方面の炭鉱を一時休止して、鉱夫等を国内炭鉱に徴用連行したのです。当時豊畑炭鉱だけでも150名の朝鮮人鉱夫達が連行され、茨城県の山一、関本炭鉱に配置されました。カラフトに残された妻子は、夫なし、父のいない淋しい生活をしなければなりません。日本国は、当時この徴用鉱夫を銃後の産業戦士と言い、激励していました。だから家族達は喜んで、この宣伝に応じました。だが夫を無くし、父を奪われた妻や幼い子供等は涙を流しながら、苦しく悲しい日々を送るのを余儀なくされました。戦争が終わった1945年の8月以後、日本政府は40万近くの日本人を引き揚げ日本本土に連れ帰りましたが、3000人以上の二重徴用鉱夫達を家族の元に戻さなかったのです。これが原因になり今日現在迄も夫を失った妻、父を奪われた子供達はサハリンの土地で彼等の夫や父を待ち兼ねているのが実態なのです。銃後の兵士と呼ばれた鉱夫達は殆ど他界しました。けれども、現在、彼等の子孫は生き残り、日本政府に戦後補償を求めています。当時の少年や少女が60～70才高齢に達するに至りました。

日本国は我々被害者に何十万円の金銭で償いすると言っても、人生を踏み躪られた人々はこれを許す事が出来ないのです。日本国並びに日本国民の皆様には以上の歴史的事件に直接責任が有ると私達は断言します。21世紀の門前に至っている今日にもこれに対して日本国は沈黙を続けています。だが、我々は、上記問題解決の為に日本国と戦いを続け、あらゆる困難が前途に横たわっていても、それを克服し、最終的結果に結び付ける覚悟があります。我々は、国際人権委員会迄にも該問題解決を訴える覚悟である事を全日本国並びに1億2000万人に達する日本国民に訴え、援助の声援を戴きたいのです。

以上

2000年12月16日

二重強制徴用連行被害者一同

連絡先：電話 72-56-34  
Tel/Fax:(4242)72-56-34  
Fax:7-50985-6-20-42  
HP:47-22-98

## 在ロシア・サハリン州韓人二重徴用鉱夫被害者遺家族会の日本政府及び関連鉱山企業体に対する被害補償基本要請

2001年2月14日、ユジノサハリンスク市。

太平洋戦争末期、1944年旧樺太恵須取町（現ウグレゴールスク市）以北の諸炭鉱から3200人に亘る韓人鉱夫が日本国内の九州及び茨城県各炭鉱に徴用、連行、配属されました。当時家族、妻子は皆サハリンに残されました。終戦を彼等鉱夫は日本国内で迎えました。それに依って家族は離れ離れの、所謂、離散家族になりました。戦後57年が経過した現在、上述鉱夫の運命や消息をサハリンに残された妻子は全く知らずに一生を暮らしています。

本会は、この問題を日本国会、政府、上記鉱山企業に訴え、速やかに調査を行い、被害者や失没、行方不明を確認し、損害賠償を求めるものです。（それに伴う全ての費用は日本側関係者が負担すべき事）

1. 韓人二重徴用鉱夫被害者遺家族の中、1945年8月15日以前の出生者全員を被害対象者と認定し、補償する事。（政府及び関係企業体負担）
2. 韓国への永住帰国を希望する遺家族には、韓国に有個人所有権住宅を提供し、帰国後の生活安定を保つ為に、毎月、各自に生計費の支給と終身医療奉仕を保障する事。（日本側負担）
3. 帰国後死亡者には生前の遺言に依る韓国に埋葬地を選択する権利を韓国政府に要求する事。（望郷の東山を含む）
4. 帰国者には、全財産と労働年金の全額を韓国に持ち帰る事が出来る様にロシア政府に要求する事。（年金の追加金をも含む）
5. 二重徴用鉱夫遺家族の中、失没者、行方不明者、死亡者の霊魂を慰める為に徴用連行鉱夫が一番多かった現シャフチョルスク町に慰霊碑を建立する事。尚、九州や茨城県の徴用先に遺家族達の見学旅行を組織、実現させ、真相を公開し、民間友好、交流の架橋を設ける事。
6. 遺家族の生活援助基金の創立を必要とする。（全てが老化している事を念頭に置き）
7. 今後、ロシア・サハリン州に残留、永住を希望する者には、一時見舞金や支援金を各自に支給する事。（老化が急速に進んでおる事を考慮し）

以上の要請は、2001年2月14日韓人二重徴用鉱夫被害者遺家族会創立大会で提議、採択されしものなり。

創立会参加者一同（288名）

2001年2月14日

ロシア連邦サハリン州ユジノサハリンスク市にて

韓人二重徴用鉱夫遺家族会



## 유즈노 사할린스크시 일본 총영사관 앞에서 사용한 시위의 구호들:

강제 징용 56년의 설움, 역사를 만방에 알리기 위한 내용이었다.  
고국은 영주귀국을 보장하며, 일본정부는 사할린 광부 이증징용자들에게  
전후 보상을 해결할 것을 요구하였다.

### 기본구호:

1. 이증징용 광부들의 생사를 확인하라.
2. 남편들을 돌려 보내라.
3. 아버지, 형님들을 찾아내라.
4. 일본은 이증징용 광부들 및 유가족들에게 보상하라.
5. 이증징용 광부 자손들의 생활과 영주귀국을 해결하라.
6. 이증징용 광부들의 자손, 유가족에 대한 문제를 조속히 해결하라.
7. 이증징용 광부들의 자손, 유가족은 또 다시 이산가족이 되기 싫다.

사할린 한국~조선인 강제 연행사에서 처음으로 일본 영사관 앞에서 있었던 집회에서  
일본정부에 대한 요청구호들이다.



2001년 3월 9일  
이증징용광부 유가족회  
회장서 정길  
사무장 정 태식



戰時下 樺太炭鉱夫 徴用運行  
1944年 8・9月 輸送

輸送炭鉱(会社)人数	地区
上塔路 鶴田炭 180	嘉徳九州
白鳥炭 樺太炭 315	平山九州
鶴津 鶴津炭 50	上田常磐
三福 佐竹一郎 20	
名好 南樺太炭 215	目尾石川鐵
豊田 豊田炭 70	関本炭
豊南 東豊炭 130	山一炭
北小沢 南樺太炭 410	高島三豊鐵
西柳井 上樺太炭 370	山形三豊鐵
安別 安別炭 130	三浦日鐵
塔路 南樺太炭 520	崎子三豊鐵
太平 樺太炭 130	大島炭
太平 390	高松鐵
合計	3000

1944年 10月31日 日通	人数	地区
2.11 安別炭	149	豊南
2.14 小田	-	豊南
2.14 関本	92	豊田
2.14 山一	73	-
2.14 鶴津	27	鶴津
2.15 山口	22	-
2.20 小田	-	125 豊南

南樺太朝鮮人炭鉱夫の本土 徴用運行接続  
1944年 9月28日 日通

日通	船名	人数	地区
8月25日	夏庭 太平	136	大島九州
8月25日	夏庭 塔路	500	高島九州
8月25日	夏庭 北小沢	174	高島九州
8月27日	夏庭 太平	398	高島九州
8月27日	夏庭 上塔路	145	嘉徳九州
8月27日	夏庭 西柳井	248	山形九州
9月2日	夏庭 西柳井	130	山形九州
9月2日	夏庭 安別	114	豊田九州
9月2日	夏庭 白鳥炭	204	平山九州
9月2日	夏庭 名好	148	目尾九州
9月2日	夏庭 上好路	67	平山九州
9月2日	夏庭 上塔路	87	豊田九州
9月6日	夏庭 北小沢	196	高島九州
9月8日	夏庭 塔路	1	崎子九州
9月8日	夏庭 塔路	66	高島九州
9月11日	白龍 豊田	148	小田常磐
9月11日	白龍 豊田	72	関本常磐
9月11日	白龍 豊田	73	山一常磐
9月11日	白龍 鶴津	27	鶴津常磐
9月11日	白龍 三福	22	上田常磐
9月11日	白龍 太平	67	大島常磐
9月11日	白龍 上塔路	49	高松常磐
9月22日	白龍 塔路	100	上山田

圖解作者:  
金相周 樺太炭鉱夫分布図 1944年 8月11日

## -일본기자의 편지-

拜啓

皆さま、変わりなくお元気でしょうか。

一昨年9月および昨年9月の二度にわたってサハリンを訪ねたおり、たいへんお世話をいただき、まことにありがとうございました。心より感謝いたしております。重ねがさねのことでまことに心苦しい限りですが、本年8月23日より29日までふたたびサハリンを訪ね調査したい意向があり、いまだ一度貴殿のご協力をいただけないでしょうか。切にお願い申し上げます。

今回とくに目的とするのは、サハリン西海岸中部のウグレゴルスク（日本時代の恵須取）より北方の地域、旧樺太時代でも比較的早い時期に開かれ第二次世界大戦が終わる前に閉山となったような中小炭鉱が数多くあった地域の韓国・朝鮮人情の調査です。

一昨年の1991年9月にサハリンを訪ねたおり、私は、妻の神澤今日子ともども、この地域のテリノフスク（日本時代の北小沢）まで訪ねたことがあります。このときは州韓人老人会とウグレゴルスクの家族会、老人会、高麗人協会にご協力いただき、予定していた以上の目的を果たすことができました。したがって、この地域の土地の事情は、北小沢より北の西柵丹などをのぞけば、ほぼわかっており、現地の見学をする必要はないのです。

問題は、戦前から戦後現在にいたるこの地域の各炭鉱町の韓国・朝鮮人の歴史を知っている人の直接の証言をとっていないことです。

91年にこの地域を訪ねたさい、ウグレゴルスクの老人会会長ほかの皆さんから全体的なおおよその話はうかがいました。さすがに現地の事情はお詳しく、見ることも聞くことも戦後の日本人が忘れ去ったかあるいは口をつぐんでいるためにわからなくなってしまったことばかりでした。それらの歴史的事実をより詳しく正確に、証言として記録しておく必要があるのです。

具体的には、つぎのことがらを知っている人の証言がほしいのです。

① 第二次世界大戦が終戦となる前に、各炭鉱から朝鮮人および日本人炭鉱夫が内地その他に転換され、あとに朝鮮人家族が取り残された事情をご存じで、戦後現在まで現地ないしはウグレゴルスク周辺に居住されている方。

例えば、「西柵丹では、昭和20年（1945年）春頃に約200人の朝鮮人炭鉱夫が転換でもっていかれ、約100人の家族があとに取り残され、現在そこには50人ぐらいの韓国・朝鮮人住民がいる」（これは例えであって、数字等は架空のものです）というような事情をご記憶の方、ないしはこ

れまでに調べたことのある方。

② 91年にウグレゴルスクを訪ねたさい、終戦まぎわに上恵須取で日本の兵隊か民間人かによる虐殺事件があったという話を聞きました。この上恵須取にかぎらず、ウグレゴルスク周辺で終戦まぎわないし終戦直後に同様の虐殺事件があったという話をご存じの方、ないしは聞いたことのある方。

なぜ、この地域の韓国・朝鮮人（韓人）の事情がいま日本で問題になっているかといいますと、サハリンの韓人一世の韓国への永住帰国にたいする支援をふくめ、サハリンの韓人への日本の支援のしかたを考えると、サハリンにいるどんな立場の韓人を支援すればよいのか、日本時代の強制連行・強制労働の直接の被害者である一世世代男性に対してのみ支援すればよいのか、それとも二世世代の人たちをもふくめて支援の仕方を考えるべきなのか、というような問題と密接に関連しているからです。

くわしい理由はここでは省略させていただきますが、一世世代男性のみならず、その配偶者（つまり奥様たち）や戦前生まれ（一九四五年以前）の二世世代の人たちをふくめた支援を考えるには、かつて樺太時代におこなわれた樺太への家族呼び寄せや現地徴用、炭鉱夫の内地転換、そしてそのために起こったサハリンに妻子が取り残されて家族が生き別れとなった家族離散などの諸事実を明示し日本政府に伝える必要があります。

そうするには、恵須取地域の戦前戦中の事情が示されるのがもっとも適切です。今回この地域の調査にねらいをおくのはそのためです。

以上、よろしくお返しいたす。

1993年 6月 24日

佐岡 良明

サハリン州韓人老人協会

会長 朴美英 様

1993. 9月 9日にお世話になりました。

恵須取 朴美英 様

北小沢 鄭英地 様

以上、ご返事はよろしくお返しいたす。

▶ 1944년 징용 내용 조사를 해야 된다는 일본기자들의 편지도 이미 오래전에 있었으나 사할린 사회단체인 노인회, 한인회는 적극 나서지 않았다고 볼 수 있다. 원인은 무엇일까요!!!

在サハリン州 (旧南樺太)

韓国・朝鮮人二重徴用鉦夫

被害者遺家族会

## 被害陳述書

2002年

YUZHNO-SAKHALINSK

韓人二重徴用鉦夫遺家族会



## 이중징용광부유가족회 대표단 방일과 이중징용광부 유가족회

이미 기술한 바와 같이 사할린주 이중징용광부유가족회 서진길 회장·정태식위원 그리고 안명복 안산시"고향마을"입주자가 지난 9~13일간 방일하였다. 방문차에 대표단은 외무성, 적십자사, "미쯔이 주식회사", "미쯔비시 주식회사"에 이중징용광부유가족들의 요구서를 전달했다. 유가족들은 부친들의 이중징용에 대한 고문서, 한인탄부들이 노동한 탄광들의 명칭, 지불되지 않은 노임의 총액등을 공개하고 이중징용자들의 후손들(1945년 8월 15일까지 출생자)에게 손해배상하고 다수 한인들이 이중징용된 샤희초르스크시에 위령비를 건립하고 부친들이 이중징용되어 고된 노동을 한 일본 지역들에 후손들을 견학시키고 극빈가정 노인·장애인들에게 지원할 것 등을 일본정부에 요구했다.

일본 외무성, 적십자사, 관련회사들은 사할린 대표단을 공식적으로 접견하고 사할린 이중강제징용자 후손들의 요구 및 그 요구의 근거를 명심히 듣고 난 후 검토할 것임과 아울러 차후에 대답을 준다고 하였다.

사할린 이중징용광부 유가족회는 지난 18일 새로이 등록되고 유즈노사할린스크시 지방 한인 사회단체 "이중징용"으로 개칭되고 서진길씨가 회장으로 선발됐다.

서회장의 말에 의하면 본회의 중요한 문제들 중 하나는 빈곤한 생활을 하는 이중징용자 후손들의 명부를 만들고 그들을 돌봐주는 그것이다. 그들의 명부가 이미 작성됐는데 우글레고르스크·샤희초르스크시에서 근 80명 극빈자들이 등록됐다. 이 명부도 일본에 보냈다.

그리고 지난 20일(금) 유가족회 대표는 유즈노사할린스크 주재 일본총영사관에도 요구서와 극빈가정 및 장애인들의 명부를 전달했다.

-새고려신문에 게재. 유가족회가 제공

## 가라후도 전환광부 (이중징용광부들의 진상)

\* "하야시 메이다이" 책에서 발췌하였음  
사무장 정태식

### (1) 제2의 징용

"가달가나루"도 "사이판"도가 "아메리카"군의 손에 들어가고 일본은 제공권은 물론이고 제해권까지 잃게 된 실정이었다. 1944년에는 "가라후도"에서 일본의 내지로 보내는 석탄선의 회항이 곤란하게 되어 석탄을 파내도 보낼 수 없는 상태가 되었다. 스키모리 미나미진나이 오다스가 폐광을 하기에 이르렀다. 동남아시아 방면으로의 수송을 위한 선함부족과 일본해의 아메리카 해군잠수함의 출몰로 "가라후도"에서의 석탄수송은 절망적이었다. 1944년 8월 11일 각의에서 "가라후도"의 대부분과 "홋카이도"의 구시로 탄전의 휴광이 결정됐다. 후지하라긴지로 군수대신은 "가라후도"서해안의 탄광은 도내용(道内用)의 아홉탄광을 빼놓고 일시 폐쇄, 그 노동력과 시설 자재를 군수산업지대에서 가장 가까운 후쿠시마겐의 죠반 "후쿠오까겐"의 지구호, "나가사끼겐"의 사끼도 다카시마, 하시마, "홋카이도"의 유우바리 탄광등으로 집중적으로 배전하기로 결정했다. 이런 배전을 "가라후도전환광부"라고 불렀다.

당시 "가라후도"의 가동탄광은 26광 보함으로는 "니시사쿠탄", "토-로", "타이헤이" "허꾸쵸오자와" "가라후도", "가미토-로", "안베쓰", "도요하다" 등의 서해안의 탄광이 주였다.

너무나 급작스런 국가의 석탄정책전환으로 특히 서해안 탄광은 대혼란을 불러일으켰다.

광부들은 몸 주변 물건만 가지고 출발하게 되어 남겨진 가족의 불안이 말이 아니었다. 광부 7,354명 운반부 1,950명 간부 347명이 배전됐다. 중요한 전환처는 "미쯔이" "닛데쓰"계 탄광에서는 "지구로" "시멘" "미이" "유우바리"로 "미쯔비시"계 탄광은 나가사끼겐의 "사끼도" "다카시마" "하시마"로 가기로 했다.

민족의 대이동을 방불케한 광부수송을 위해 연락선과 화물선들의 특별배선으로 "왓가나이" "오다루" "하꼬다데" "아오모리"로 향했다. 산에는 항내 보안관계자와 야적된 석탄의 자연발화방지를 위해 경외부(坑外夫)가 남겨져 있을 뿐이었다.

또 한가지 중요한 것은 "가라후도" 전환광부가 내지의 석탄산에만 배전된 것은 아니다. 군부의 요청으로 "지시마"열도의 비행장건설에 많은 조선인이 보내졌다. 그들은 비행장 공사가 끝나면 다시 "가라후도"의 동해안의 "나이부지" "나와가미" 탄광 국경의 진지구축공사로 돌렸고 그 정확한 인원수는 알 길이 없다.

내지 탄광과 "지시마"열도를 합해서 2만인 이상이 배전되었다고 한다. 실제로 어떤 방법으로 광부의 인수가 행해졌는지 "후쿠오까겐" "엔가공 미즈마끼 마찌"의 일탄 "다까마쓰" 탄광의 예를 소개한다.

이 탄광에서는 1944년 당시 제1항 제2항 제3항을 합해서 약 3,500명의 조선인 광부가 일했었다. 군수성과 석탄통제회에서 4백명의 전환광부의 할당이 제시됐다. 일본광업 "도쿄" 본사의 노무계장 이도오에이이찌(84세)와 일탄 엔가광업소 노무계장 호즈미다카시게(79세) 두 사람이 책임자로 9월 10일 "가라후도"의 "다이헤이"탄광까지 인수하러 갔다. 그 외 감시인으로 후지도유끼오와 무라이시오사무 또 한 사람 조선 순사출신의 노무계와 동행했다.

"쇼야"해협에 적 잠수함 출몰의 정보가 들어와 "왓가나이"에서 이틀간 유숙하고 3일째 되는 아침 출항했다. "오오도마리"에 도착해서 다음날 열차로 8시간 걸려서 "시즈가"에 도착했다. "시즈가"에서 1박하고 다음날 아침 목탄버스로 "가라후도" 중앙산맥을 넘어 "에스도루"에 도착해서 "다이헤이" 관광 클럽에서 잤다. "다이헤이" 탄광은 오-지계 탄광으로 에스도루에서 경변철도로 30분 거리였다. 군수성에서 파견된 야요 해군대좌로부터 400인의 조선인광부 명부를 받았다.

"이또오에이이찌"는 일본광업에서 떠날 때 사장으로부터 노무자뿐 아니라 자재도 같이 불하받아 오라는 명령을 받았다. "야요 대좌님 탄광은 노동력 뿐 아니라 자재부족으로 곤란합니다. 기계가 늙어서 고장이 나도 교환할 예비품이 없습니다. 사람도 필요하지만 자재도 같이 의논드릴 수 없을까요?"

"뭐라고? 난 군수성이 하는 일에 간섭할 작정이냐 탄광은 너희만 있는 게 아냐. 그런 망발을 지껄일려면 일본 광업의 400명 할당도 취소하겠다. 다른 탄광에서 한 사람이라도 좋으니 달라고 머리를 숙이고 온다. 거기에서 자재까지 달라는 것은 무슨 배짱이냐?"

무서운 자세로 "이또오에이이찌"에게 소리쳤다. "이또오"는 "야요"대좌에게 사과하고 자재건도 취소했다.

"야요" 대좌는 군수성의 기술 장교로서 당시 그 권한으로 봐서 할당취소도 간단한 일이었다.

"다이헤이" 탄광의 협회회관으로 가니 이미 400명이 소집돼 있었다.

"당신들은 여기서 오래 수고했지만 전국 형편상 큐슈에 있는 일탄 다까마쓰탄광에서 일하게 됐다. 가라후도 와는 달라서 굉장히 따뜻한 곳이다. 나라를 위해 석탄증산에 힘써주기 바란다." "이또오"가 인사하니 "다이헤이" 탄광의 노무계의 조선인이 통역을 했다. 400명을 10인 단위로 반을 짜서 건네 받은 명부와 본인을 조회했다.

노무자를 받는 측의 "호즈미다카시게"는 노무계를 만나서 배전으로 인해 가족을 남겨두고 가는 광부들이 어떻게 동요하고 있는지 상세히 물었다. 2년 만기가 된 조선인 광부는 조선에서 우선적으로 가족을 불러들여 탄광동네서 살고 있다는 설명이었다. 큐슈에 가는 광부는 가족을 두고 단신 가야만 한다. 받는 측은 광부의 배전만 신경을 쓴 가족을 불러들인다는 것은 현실적으로 어려웠다.

"다이헤이"탄광을 출발하는 날 소장에게 불려갔다. "호즈미"의 숙부가 전에 다이헤이 탄광의 광장을 지낸 일이 있었다.

"호즈미군 이것 자네에게만 하는 얘긴데 전원이 일탄에 무사히 도착하느냐 아니냐는 여기에서 따라가는 노무계의 다까야마군에게 달려있다. 그는 반도인이지만 아주 착실한 사나이로 그 사람만 꼭잡고 있으면 도중에서 도망치는 일은 없을 꺼다."

노무계의 "다까야마"가 대장이 되어 인솔해서 "에스도루"항에 집합했다. 조선인광부는 보따리 하나 정도만 들고 마치 출정병사를 환송하듯 많은 가족이 부두에서 만세를 불렀다.

"이또오에이이찌"는 일본광업을 대표해서 그 자리에 모인 광부의 가족들 앞에서 가까운 장래에 가족을 꼭 불러드리겠다는 인사를 했다. 결국 그것은 거짓 약속이 되어 그들은 이산가족이 되고 말았지만.

"에스도루항"에서 "아오모리항"에 도착하는데 걸린 시간이 화물선으로 24시간 "아오다데" 연락선 부두에서 그대로 열차에 태워졌다.

특별수송 열차는 중간역에서의 정차가 길었고 그 사이를 이용해서 국방 부인회



일탄 다까마쓰탄광에서 광부수취로 갔던 호즈미다카시게

회의 어깨띠를 두른 흰 앞치마를 입은 부인들이 주먹밥과 차를 접대했다.

"도쿄"에 도착해서 "아까바네"를 경유하여 "시나가와"의 "유우도메" 화물 정거장으로 들어갔다.

창의 개폐는 자유였지만 승강구에 내보내지 않으려고 양쪽 출입구를 지키고 감시했다.

바로 그때 시즈오까겐의 오오이가와의 철교를 지날 때 그것을 신호로 해서 "다까야마"를 중심으로 간부들이 한군데로 모여 밀담을 시작했다.

"후지도"와 조선 순사출신의 노무계는 조선어를 알고 있어서 가만히 귀를 기울여 주의깊게 얘기를 들었다. 그들은 두 사람이 조선어를 할 수 있는 사실을 몰라 별로 경계도 하지 않고 탈주 계획을 의논하고 있었다.

"호즈미"에게 "후지도"가 얼굴색이 변해서 뛰어왔다.

"호즈미씨 다까야마들이 탈주하는 얘기를 하고 있는데요."

"그거 큰일나지 않았나. 여기까지 끌고와서 집단탈주라도 하면 책임문제가 크다. 좀더 신경을 썼어야 했을 걸. 조금 덤지만 창문을 닫아라. 대체 뭐라고들 하는거야?"

"네, 내가 들은바론 탄광은 위험하고 이대로라면 언제 조선으로 돌아갈지도 모른다. 가라후도의 가족에게 돌아가야겠다고 하더군요 일탄에 도착할때까지 열차가 공습을 받을수도 있으니까 나고야 근처에서 일제히 도망가자는 계획이었습니다."

"그런가. 빨리가서 방지하도록."

"호즈미"가 조선순사를 지냈던 노무계에게 무엇인가 귓속말을 했다. 그 노무계는 급하게 "다까야마" 대장

에게로 갔다.

"다까야마 너희들은 거기서 무슨 작당을 하고 있나? 얘기한 것을 우리는 다 알고 있다. 도주 계획이라면 집어치워! 아니면 아예 너희들 다 이대로 헌병대에 넘겨도 좋다! 너희들 배전은 단순한 이동이 아니다. 징용령이라는 걸 잊지 마라!"

그 노무계는 돌연 조선어로 외쳤다. 탈주계획이 탄로되어 "다까야마 대장"은 새파랗게 질려서 사과했다. 가고시마 본선의 "오리오"역에 하차하자 탄광 노무관계자가 약 50명 출영을 나와 주위를 둘러쌌다. 전환광부들은 일단 다까야마 탄광의 각 훈련소로 나뉘어졌고 제2항의 고가훈련소에는 60인이 입소됐다. 그들이 수용되는 합숙소는 "큐슈"에서는 조선인숙소 혹은 훈련소라고 불렀다. 조선인숙소와 요장 훈련소의 경우는 사감이라고 하고 일의 내용은 같았다.

"고가" 훈련소는 포로수용소 근처에 있었다. 사감인 "이또오슈우조오"(78세)는 "다까야마" 대장과 "가네야마다이메이" 대장 두 사람을 노무계 조수로 채용했다. 60인 중 반이 가정이 있는 사람들이고 반은 독신자였다. 30대 40대가 거의였고 50대도 대여섯 사람 있었다.

사감인 "이또오슈우조오"는 그들과 만나서 1940년대 제주도에서 "가라후도"로 강제연행된 후 한번도 귀국한 일이 없다고 불만을 마구 터뜨렸다.

처자를 "가라후도"에 두고 온 광부는 빨리 가족을 불러드리게 하는 수속을 취해달라는 요구였다. 4년간 귀국 못한 제주도가 고향인 사람은 고향에 소식을 전하게 하고 도항비(渡航費)는 탄광측에서 부담한다고 약속한 후 가족을 불러들여 탄주에 살게 했다.

"제주도 사람들은 반항적이라고 할까. 요구하는데도 이론정연하고 조금도 흐트러짐이 없었어요. 제일 곤란한 것은 식량문제여서 내근하는 노무계는 농촌을 찾아 헤메는 난리를 쳤습니다. 먹을 것이 없으면 나쁜 짓을 하니깐 될 수 있는 대로 훈련소에는 두지 않으려고 입경시켰습니다.

제주도에서 가족을 불러드리니 이번에는 가라후도에 가족을 두고 온사람들이 소동을 부리면서 약속이 틀리지 않냐고 해서 그를 위로하느라고 진땀을 뻘었습니다. 목숨이 줄어드는 듯 했고 사감이 된지 얼마 안되어 10킬로나 체중이 줄어 뼈뺀 말라 버렸어요."

"큐슈"로 오는 교통비는 임금 중에서 떼어 고스란히 자기부담이 되었다. 강제 거금, 전시 국채, 식사대, 이불값을 제하면 잔금은 아주 적었어도 그것을 "가라후도"에 송금시켜준다는 것으로 그들을 겨우 납득시켰다. 조선인 중에서도 제주도 사람들은 차별대우를 받았습시다. 그들과 같이 식사를 안한다든가 같이 입경을 하지 않겠다고 해서 그 차별은 굉장했습니다. 도중에 조선에서 강제연행했던 자와 공동생활을 했는데 아무래도 싫다고 하면서 듣지 않았습시다.

"이또오"는 "가라후도"에 남겨 놓은 가족을 불러들이자고 요구했으나 노무과에서 거부당했다. 그러나 제주도에서의 가족이입은 실현되었다. 그것은 어디까지나 경비가 드는 것으로 탄광측에서 보면 쓸데 없는 짓을 하는 직원이라고 해서 얼마있다 경내계로 배치됐다.

"후쿠오까겐" 요시호궁에 있던 "메이지" 광업소 히라야마탄광의 "변재보고서"를 보면 "가라후도"의 "하꾸쵸오자와" 탄광에서의 배전광부가 낙산사고로 1주일에 세사람이 계속해서 사고사한 기록이 발견됐다. 이 탄부의 아들 오세욱은 현재도 "토-로"에서 살고 있다.

한편 남편이 배전된 후의 가족은 어떤 생활을 하고 있었을까? 간부를 위시해서 광부의 대부분이 배전된 후 탄광에는 보안계와 노무계 일부만 남아 있었다.

"후지하라킨지로오"가 "무진장의 저탄장"이라고 호언했던 "다이헤이"탄광의 노천 굴착의 언저리는 굉장히 넓었다. 그리고 해안에 산적된 저탄장에서 자연 발화한 검은 구름이 하늘을 덮었다. 남은 가족은 조선인 뿐 아니라 일본인도 많이 있었다. 그 관리를 위한 노무계가 절대 부족이었다.

"이주학"(이분도 실제 인물이며 하바롭스크시세와 장기간 모스크바 조선말 방송국에 근무하였으며 지난해 별세하였다. 그는 이산가족 회장직을 맡아 보았다)은 동경외어영어나 재학중에 징병검사를 받고 일시 덴나이의 가족품에 돌아 왔었다. 그때 다이헤이 탄광의 "고바야시"노무과장이 찾아와서 노무과에 조선어를 하는 사람이 없으니 와달라고 부탁을 했다. 탄광측으론 탄주에 남겨진 조선인 가족의 노무관리에 어려움이 많았었다. 탄주의 수리, 대목의 알선, 식량배급, 병자치료 등이 그 어려움이다.

젊은 "이주학"이 무엇보다 골치 아팠던 일은 탄주내의 남녀관계였다. 남편이 없는데 임신하여 그 소문이

사방 퍼지기도 했다. 풍기문란이 "다이헤이" 지역을 흔들기 시작해 탄광으로선 방치할 수 없는 처지에 이르렀다. 자주 노무담당자회의를 열어 대책을 강구했다.

동회 혹은 이웃을 통해서 "이주학"에게 정보가 들어왔으나 남녀사이란 모르는 것이어서 확증이 없는 한 노무계도 간섭할 수가 없었다. "주인이 규슈 탄광에 가서 석탄증산에 힘쓰는데 이상한 소문을 퍼뜨리면 어떻게 하나 자중하지 않으면 곤란하다. 먼저 남편이 돌아올지도 모르지 않나."

그는 그 정도의 주의 밖에는 할 수가 없었다. 낙태기술도 피임구도 없던 때였으므로 사생아가 몇사람이나 태어났다. "다이헤이" 탄광에 있을 수가 없어 어느 틈엔가 먼곳으로 도피행을 한 자도 있었다.

노무과에서는 대책을 강구하고 산업회관에서 오락영화회를 개최했다. 그것도 일시적인 위안은 됐지만 효과는 없이 남녀문제는 묵인할 형편이 아니었다.

"무네다니"해협이 봉쇄되고 내지와 차단이 된다고 해도 "가라후도"의 쌀보유량은 2년은 충분할 것이라고 전해졌다.

그러나 소금, 설탕, 간장등이 품질상태였다. 트럭으로 바다물을 길어서 큰 가마솥에 넣고 석탄을 때서 소금을 만들어 그걸 각 가정에 배급했다.

배전된 남편에게서 송금이 없으면 생활이 안되어 급료의 일부를 보내주도록 배전된 탄광과 교섭을 했다. 일본정부의 석탄정책에 의해 발생한 빈곤으로 남은 가족은 할 수 없이 전혀 다른 인생의 길을 걷지 않으면 안되었다.



고기 훈련소의 사감이었던 이도우슈우조

## (2)두아내

1989년 6월 한국 대구에 있는 중소이산가족회(이두훈 회장)를 방문한 기다규슈시 오구라기다구의 가도오게 이지에게서 가라후도전환광부로 미쯔이, 야마노광업소, 우루오 탄광에 갔었던 김의진(71세)을 알게 되었다. 남편이 "가라후도"에 강제연행되어서 한국에 남겨진 아내들과는 전혀 다른 경우다. "가라후도"에서 "츠크호"로 재징용을 당한 얘기는 나로서는 처음 듣는 것이어서 매우 놀랐다.

김의진이 전라북도 정읍군 태인면에 살고 있다고 해서 10월에 내가 찾아갔다. 그의 고향은 경북이지만 전쟁 후 귀국해서 숙부를 의지하여 전북으로 옮겼었다.

태인면에서 약 2헥타의 밭을 가지고 정미소도 가지고 있었다. 집에 가고 싶다고 했더니 아내와 애들이 있어서 사할린 얘기는 하고 싶지 않다는 것이다.

농가라고 생각되는 곳에서 식사를 했으나 그곳은 부락 유일의 식당이었다. 식탁 위에는 10종류 정도의 접시가 널려 있었으나 가까이에 오양간이 있는지 밥위에 까만 파리떼가 달라붙었다.

소주 "진로"를 따르면서 김의진은 지금까지의 고생을 내게 얘기하기 시작했다.

전후 "미쯔이" "야마노" 광업소에서 귀국해 "가라후도"에서의 처자의 귀국을 기다리고 있었다. 연락은 취해졌으나 조선동란으로 중단 그 이후 서로의 생사를 모르는 채 김의진은 한국에서 재혼했다.

남아가 넷, 여아가 둘 자식복도 있고 안정된 생활을 하고 있다. 그 소리를 듣고 처음으로 집으로 데려가지 않는 이유를 알게 됐다.

얼굴에 깊게 패인 많은 주름살이 김의진의 인생의 축도를 보는 듯 했다. 일본어 발음이 약간 사투리같은 데도 있었지만 "후카이도"의 "오다루"와 "가라후도"의 소학교를 다닌 만큼 "요시다쇼오임"의 얘기에 열을 올리기도 했다. "지금까지 오랫동안 아내와 자식을 꿩개치고 마주볼 염치도 없습니다. 사할린에서 왔으면 하고 집도 한채 마련했습니다."

"아내와 연락이 되어 아들은 하바롭스크에서 의류 장사를 하고 있는 모양이더군요. 여기도 가정이 있어 그 가운데 끼어 머리가 아파요. 이것은 내가 만들어 한 짓이 아니잖소. 일본정부의 책임이죠." 그의 입에서 감



사할린의 처자(좌)와 김의진(우)

전후 딱 한번 사할린의 처에게서 편지가 온 일이 있었다. 그 편지에는 "다른 남편은 밀항을 해서 가족을 데려가는데 당신은 왜 못오느냐 그건 너무 박정하다고 생각한다. 세 아이를 데리고 지금부터 어떻게 살아야 할런지 길가에서 헤매는 수 밖에는 없다"는 내용이었다.

김의진은 전후 "가라후도"에서 가족을 데려오려고 생각하지 않은 것은 아니었다. 밀항해서 "가라후도"로 가든가 아니면 조선으로 귀국할까 망설였다. 가족은 꼭 돌아올 것이라고 믿었기 때문에 경상북도 고향에서 기다리기로 했다.

해방 후 "미쯔이"광업소의 노무계는 조선인의 보복이 두려워서 도망쳐버려 귀국여비와 저금지불이 행해진 것은 한달 후였다. 겨우 450원의 돈은 "훗카이도"까지 가서 "가라후도"로 밀항하기에는 너무나 적은 돈이었다. 동료 몇사람은 탄광간부에게 "가라후도"로 보내달라고 공박했다. 탄광측은 소련군이 귀국선의 운항을 정지시켰기 때문에 "가라후도"까지 갈 수 없다는 설명을 듣고 데리고 올 생각을 체념할 수 밖에 없었다는 얘기였다.

김의진의 부친은 그가 낚자마자 곧 "훗카이도"로 배일을 떠났다. 부친의 뒤를 따라 모자는 "훗카이도"의 "오다루"로 건너가서 거기서 "가라후도"의 나요시 탄광으로 옮겼다.

16세가 되어 "다이헤이" 탄광의 기술 기계부에 들어갔다. "나요시" 탄광에서 일하다 친구와 같이 "니시야고단"의 탄광으로 옮기게 되었다.

1944년 9월 일부 광부는 동해안의 "나이부찌" 탄광에 배정이 결정됐으나 김의진은 "후꾸오까"의 "미쯔이" 탄광에 징용되었다. 그것은 너무나 급작스럽게 이루어져서 장래일을 생각할 여유가 없었다. "규슈"탄광에서 석탄을 캐다가 곧 북큐슈의 공업지대로 보낸다는 설명이외는 없었다.

"전쟁에 이기면 곧 가족들을 보내고 아내도 그 말을 믿고 내지로 갈 수 있다고 생각하고 있었으니까요. 내가 먼저 가는 것에 조금도 걱정을 안했습니다."

"미쯔이" "야마노" 광업소 "우로오" 탄광에는 독신의 조선인요가 있어서 "가라후도"에서 가족이 오면 탄주에서 살 수 있다고 약속했다.

양친은 "나요시" 탄광에 살고 있어서 그것이 최후의 이별이 되었다. "에스도루"에 모인 1,000인의 광부는 연락선으로 "와가나이"로 가서 3백명은 "유우바리" 탄광으로 가고 "김의진"은 10 일후에 "츠크도요"에 닿았다.

"니시야고단"에 비해서 "츠크호-"는 식량사정이 나빠 오는 첫날 벌써 집단으로 항의하는 소동이 벌어졌다. 게다가 가족을 불러들이지 않으면 일을 안 하겠다고 강력하게 요구했다. 탄광측은 급히 수속을 밟아 십수 가족만 연내에 "츠크호-"에 오게 됐다. "김의진"은 가족이 와도 식량이 곤란하여 양친이 있는 "가라후도"에 놔두기로 마음먹었다.

입항 전에는 군함 행진곡을 틀어주며 항장(航長)은 항상 일본군 승리만 선전했다. 휴일에는 아침부터 진주만 공격과 "싱가폴" 함락의 뉴스 영화만 되풀이해서 보여줬다.

작스럽게 츠크호 사투리가 나와서 깜짝 놀랐다. 19세 때 유남수(69세)씨와 결혼해서 다음해 장남 공호(51세)가 태어나고 계속해서 2녀의 부친이 됐다. 가족 4인을 "니시야쿠단"탄광에 두고 "미쯔이" "야마노" 광업소 "우루오" 탄광에 배전되었다.

"애들의 얼굴도 지금 만나면 모를 겁니다. 헤어져서 40년이상이 됐으니까요. 애들도 내얼굴은 모를 겁니다. 슬픈일이죠."

김의진은 두 아내와 가족일이 굉장히 마음에 걸리는 듯 했다. 아버지 책임을 못한 "사할린" 자녀에 대한 괴로움도 있다. 아버지가 자식을 생각하는 절실함. 자식이 아버지를 생각하는 절실함은 세계 어디서나 공통된 감정이리라. 김의진의 가슴속은 "사할린"에 두고온 처자가 한국에 오는 것으로 해서 많은 동요가 일고 있었다.

김의진은 끝까지 일본 승리를 믿었기에 전쟁에 이기면 가족을 불러 주겠지하면서 조금도 의심하지 않았다. 8. 15 해방되던 날 라디오에서 천황의 방송을 듣고 분해서 눈물을 흘렸다.

한달 후 귀국 선편이 수배되어 처음으로 해방의 기쁨을 실감했다. 허나 "가라후도"에 남아있는 가족은 어떻게 되는 건가. 김의진은 마지막까지 귀국을 주저했다. 겨우겨우 결심하고 조선 고향에 가서 기다리기로 했다. 김의진은 결심하고 귀국할 때 "가라후도"의 아내에게 편지를 썼다. 지금부터 2년간 연락이 없을 경우에는 애들을 잘 기르고 좋은 사람이 있으며 결혼하기 바란다는 내용의 편지였다.

나는 김의진을 만나고 사할린에 가까운 시일안에 가겠으니 "하바로프스크"에 있는 아내와 아들을 만나고 오겠다고 약속했다. "사할린"에 출발할 직전 모자가 "유즈노사할린스크"에 이사한 것을 알게됐다.

1990년 1월, "유즈노사할린스크" 교외의 집으로 그 모자를 찾았다.

나는 전라남도에서 "김의진"과 만났을때 촬영한 사진을 십수장 "유남수"에게 건넸다.

"이분이 당신 남편입니다. 바로 얼마전에 만나고 왔습니다."

그랬더니 유남수는 이 사람이 아니라고 하며 사진을 팽개쳐 버렸다. 머리는 백발이요, 얼굴의 주름은 깊히 패였고 20대에 헤어졌던 남편의 모습과는 거리가 멀었기 때문이다. 두사람 사이에는 40여년의 세월이 흘렀었다. 잠깐 보고선 모르는게 당연하다.

나는 김의진의 사진을 손에 들고 아들 김공호의 얼굴옆에 나란히 놓았다. "이것보세요 부자지간이니까 이렇게 속 빼 닮았지 않아요." 라고 했다.

그래도 한참은 믿을 수 없다는 듯이 머리를 가우뚱하고 있었다.

나는 이 날처럼 한국과 사할린의 먼 거리와 역사의 공간을 느낀 일이 없었던 것 같다. 서로가 늙어서 그 변한 모습이 남편을 남편으로 받아들이지 못하는 현실에 거의 비통한 심정이었다.

"남편과 같이 '큐슈'의 탄광으로 갔던 사람이 밀항해서 가족을 데리러 왔었습니다. 남편의 전언은 될 수 있는대로 빨리 귀국해라. 자기는 고향에서 기다리고 있겠다고요. '큐슈'로 갈 때는 곧 오겠다고 했으니까 가족은 다 믿었죠. 실마하니 40여년이나 떨어져 살 줄은 아마 하나님도 몰랐을 겁니다.

이것도 저것도 다 너무 늦었어. 애들 키우느라 얼마나 고생을 했는지 그 얘기라도 남편에게 들려주지 않으면 참아낼 수 없을 듯 합니다."

말을 마치고 그녀는 훌쩍 느끼며 울기 시작했다.

한국의 남편에게 다른 아내가 있는 것을 알고 있는 유남수지만 그녀도 25년전에 재혼한 남편인 한경오가 있었다.

당시 다섯살이었던 김공호는 아버지의 모습은 전혀 기억에 없다고 말했다.

"어렸을 때는 아버지를 원망도 했었죠 이젠 지난 과거 얘기는 하고 싶지 않습니다. 아버지가 일부러 한 것이 아니고 전쟁 때문에 친자가 헤어져서 살았으니 이젠 아버지의 책임일 수 없죠. 지금은 아버지를 용서하고 싶은 마음뿐입니다." 김공호의 감정이나 얘기하는 모양이 아버지를 속 빼닮았다. 그는 하바로프스크에서 개인농업을 했으나 현재는 유지노사할린스크에서 건축일을 하고 있다. 한국에 나가서 부친과 같이 살고 싶은 희망도 가지고 있으나 소련에서 교육을 받은 그는 러시아어 이외에는 말을 모른다. 한국으로 영주 귀국해도 언어의 장애가 큰 문제일 것이라고 했었다.

### (3)아버지와 아들

중소이산가족회에서 김의진 장남의 일시 귀국의 건을 얘기하고 있으니 부자가 가라후도 전환광부가 되어 "츠크호-"의 "미쯔이 다가와" 광업소로 배전된 사람이었다고 들었다.

미쯔이 다가와광업소는 "달이 떴다 달이 떠. 미쯔이 탄광위에 떴다……."라는 탄광노래로 유명한 곳이고 내 집에서 8키로의 지점에 있다.

그 사람은 대구시의 정성태(64세)로 한국육군의 헌병이었다고 하면서 검은 얼굴에 균형잡힌 힘찬 체격의 소유자였다. 부친은 경상북도 의성군 안평면에서 농사를 하고 있었다. 1939년 2월 모집에 응해서 "가라후도"로 가고 싶다고 편지로 알렸다. 16세가 된 "정성태"도 부친과 같이 일하겠다는 청이었다. 논밭은 조부





애들과 같이 (사할린에 가기전) 부친(상)과 정성태

에게 맡기고 "가라후도"에서 모집 차 온 노무계를 따라 가기로 했다.

1942년 2월 조선을 출발해 23일 걸려서 눈보라가 치는 "니시샤고단"에 도착했다. "니시샤고단"의 조선인 숙소에는 300명이 있고 살림을 하는 세대가 50가구 일하고 있었다.

부친은 탄광채탄은 위험하니 다른 일을 하라고 반대했다. 몸이 다른 사람보다 배나 컸던 정성태는 항외의 대장장이 일을 맡아 하기로 했다.

드릴의 끝부분의 수정 혹은 썩이나 삼을 수리하는 일이고 급료는 70원이었다. 12시간 노동하고 돌아오면 매일밤 8시부터 10시까지 "사도오"라는 예비역 군인에게 군사훈련을 받았다. 탄광 운동장에 집합하여 죽창을 가지고 "미영격멸 장개석 죽여라!" 하며 큰 소리로 짚인형을 찌르는 훈련등이 있

다.

국경의 50도선이 가까운 "니시샤고단"은 겨울이면 영하 50도 이하로 떨어져서 매일같이 무서운 눈보라가 몰아쳤다.

방향 감각을 잃지 않도록 눈길을 열어 로프를 걸어 놓고 그것에 의지해서 통근하곤 했다.

식구가 출발할 때 모친은 출산 직후여서 산후조리에 나빠 아직도 자리에 누워 있는 형편이었다.

1944년 9월 10일 동이 트기전 "니시샤고단"을 트럭으로 출발해서 다섯시간 후에 "에스도루"항에 도착했다. 항구에서 하루종일 배를 기다리는 가족들 100명이 화물선으로 "하꼬다데"에 도착했다. 부친은 입항해서 채탄하고 정성태는 탄차를 올리고 내리는 기계 감는 일에 종사하게 됐다.

부친과 근무시간이 달랐지만 같은 숙소에 있다는 것이 마음 든든했다고 한다. 열여섯살이라고는 하지만 몸은 크나 아직 어려서 가족이 그리운 나이다. 그러던 중 직장이 제3항의 "히라하라"항으로 돌려졌다. 당연히 숙소도 제3항 "히라하라요"로 바뀌지 않으면 안되었다.

"아버지와 같이 있게 해줘. 제1항에 보내줘"

울며 노무계에 부탁했다.

"남자새끼가 울긴 년 몇살이나?"

"열여섯 살입니다."

"너 정말 열여섯이나? 체격 한번 좋구나. 그래 할 수 없지."

그 노무계는 불평하면서도 정성태 얘기를 들어줬다.

8.15직전 세살 아래인 남자동생에게서 편지가 왔다. 두사람이 "큐슈"에 출발한 후 조선으로 귀국을 희망한 열 가족만 급작스럽게 "니시샤고단"으로 출발했다는 사연이었다. 그 가족들은 패전 이틀 후 "미쯔이" "다가와" 광업소에 도착했다.

동생 편지는 어머니와 애들만 있어서 불안하고 하니 "큐슈"의 탄광에 가고 싶다는 얘기였다. 부친이 노무과에 가서 교섭하니 전황이 악화되어 무리한 일이니 좀 더 기다리라고 "가라후도"로 답장을 쓰라고 하였다. 탄광이 군수공장으로 지정된 후 헌병과 특고가 노무관리까지 간섭을 하면서 숙소에서 쉬고 있는 사람을 끌고 나가곤 했다. 노무사무실 앞에서 계엄을 떨지말라며 때리고 차고 하는 폭행을 가했다.

"폐렴이나 감기 따위는 병도 아니다. 뼈가 부러져서 한쪽팔이 없어졌든가 해야 병자다"라면서 강제로 입항시켰다. 대출일이라고 하는 24시간 노동이 계속되든지 사고가 나든지 하면 꼭 몇 사람씩은 도주했다. 교통의 요소마다 감시인이 서있고 경찰이 망을 보고 있어 그 곳의 지리에 어두운 조선인은 으레 잡혀 오기 일쑤였다. 모든 사람 앞에서 보라는 듯이 고문이 행해지고 정성태는 눈앞에서 두사람이 두들겨 맞아 죽는 꼴을 봤다. 그는 그 학살의 처참함에 압도되어 지금까지 고문하는 모습이 눈속에 각인되어 떠나지를 않는다.

8.15 당일의 기억은 없지만 3일 후에 부친들은 노무계 주선으로 "가라후도"행 표를 손에 넣었다.

"아버진 엄마와 동생들을 데리러 갈테니 넌 먼저 조선에 돌아가서 할아버지 일이나 돕고 있어라. 만일 건강하게 잘있으면 곧 가족을 데리고 갈꺼다" 부친은 십수명의 동료와 같이 "가라후도"로 출발했다. 그 이후 과연 "가라후도"에 무사히 도착했는지 어떤지는 정성태는 알길이 없었다. 10월 3일 노무계의 연락으로 야마구지켄 센자기에 불법 배가 장만됐으니 가라고 했다. 1인당 150원을 지불했다.

나뭇잎같이 흔들리는 70톤의 배에 43인이 타고 조선해협을 가로질러 16시간이 걸려서야 경상남도 삼천포에 도착했다.

조부모들은 혼자 귀국한 손자를 보고 뿔 듯이 기뻐했다.

조선동란으로 고향은 전쟁터로 변했고 정성태는 군에 지원해 헌병이 됐다.

"사할린"에서 연락이 온 것은 1975년 부친과 헤어져 30년만이었다. 일본의 가라후도귀환촉진회 회장 박노학에게 편지로 정성태라는 형이 있으니 찾아달라고 쓰여 있었다. 형제들이 살아 있다는 놀라움과 자기를 찾고 있다는 사실에 감격해 편지를 꼭 잡고 한없이 눈물을 흘렸다. 일본을 경유해서 "사할린"으로 답장을 보냈더니 다시 동생에게서 편지가 와 부친 소식이 쓰여 있었다. "미쯔이" "다가와" 광업소를 출발해서 "아오모리"까지 와서 거기서 밀항선을 탔으나 태풍으로 실패하고 말았다. 막노동을 해서 돈을 만들어 그것을 밀천으로 도박을 해서 한 밀천 만들어 붉은 콩 서되와 물을 가지고 다시 밀항선을 탔다. "다가와"를 출발해서 두달과 26일 걸려서야 겨우 "니시샤고단"의 가족과 재회했다는 것이다.

편지에는 "형이 모르는 동생이 셋이나 있소"라고 적혀 있었다. 그건 부친이 "사할린"으로 돌아가서 난 형제들 얘기였다. 부친이 1966년에 "니시샤고단"에서 세상을 떠났다는 소식도 곁들어 있었다.



# 나의 어머니

사할린이중징용광부유가족회원 김순기씨의 회상기

## (1) 이별, 화태



"나는, 이제는 두번다시 너희들을 못 만난다!" 하시면서 길 옆 가로수 포플라 고목 밑 맨땅에 두 다리 펴시고 앉아 땅바닥을 치면서 통곡하시던 할아버지도 정든 고향도 다 뒤에 두고 어머니의 손을 잡고 1년전에 화태(사할린)로 떠나가신 부친을 찾아 길을 떠나는 나는 기뻐서 어쩔 줄 몰랐다.

부산 부두에는 숨같은 흰눈이 내리면서, 무엇에든지 닿으면 녹아버리는 철이었다. 고향인 강원도에는 감나무에 홍시(무르익은 감)가 달리고 집집마다 꽃감을 팔리는 철이었다. 배를 타고 기차를 타고 지나가던 어떤 철도역 스피커(확성기)에서 "도끼요-, 도끼요-"하며 반복하는 말은 전혀 듣지 못했던 말이라, 신기하여 내가 따라 반복하면서 흥내는 것을 보고 어머니는 "아이들이란, 참 빠르구나, 어느새 다른말을 배웠구나!"하며 심한 뱃멀미와 차멀미 때문에 병자 모양이 되어 누워서

머리도 들지 못하시면서도 혼자 말로 감탄하셨다. 며칠이 경과하였던지 도착한 화태(가라후도)의 스토루항구. 대형선박은 먼 바다에 정박시켜놓고 벽도 지붕도 없는 거룻배(돛을 달지 않은 작은 배)에 갈아 태워 항구에 상륙시켰을때 매섭게 불어오는 바닷바람에 사정없이 휘날리는 한복차림이었던 우리 모녀에게는 처음 당하는 추위였다. 울어대는 어린 나를 자기의 치마폭속에다 감싸주면서 달래주시던 어머니도 추위에 못 견디어 떨고 계셨다.

사정없이 눈보라 치던 그날은 1941년 12월 31일이였다. 그 다음날은 1942년 신년을 맞으면서 풍설의 눈길을 "객차차"(말파리에 끌려가는 썰매, 큰 풍안에는 손님이 떨지 않도록 따뜻한 구운돌도 넣고 이불을 덮어 주었음)를 타고 방울소리 울리며 달려가다가, 험한 눈길에 마차가 뒤집어지면서 풍안에서 잠든 손님들은 눈길에 폭 쏟아질때도 있었지만 그런것도 이제 조금만 더 가면 아버지를 만난다는 기쁜 마음으로 깔깔대며 웃었던 일이 지금은 생각하면 그 어떤 꿈속에서 있었던 느낌이 든다.

## (2) 부모

당시 저의 부친은 기다꼬자와(첼놉스크 부락)탄광채탄부였다. 아버지와 함께 좁은 방에서 3명의 광부가 숙박하고 있었다.

해동(봄철이 되어 얼었던 것이 녹아서 풀림)하면서 4월에 현지 소학교에 입학은 했으나 조선에서 오자마자 일어난 전혀 통달되지 않아 아무런 재미도 없고 학교도 실증이 났다. 여름에 우리 가족은 이주하여 「나요시 마스타 탄광」(현재 레소고르스크)에서 거주하게 되어 학교도 전교했다.

입학하고 보니 이 학교에는 나와 같이 일어가 서툰 발음도 역시 우스운 학생들이 많았고 친구도 많아지면서 공부에도 취미가 들면서 교사들에게서 귀염을 받게 됐다.

또 새해를 맞은 1943년 봄에는 우리 가족에 사랑스러운 나의 동생 명자가 태어나는 경사가 났다.

그 시기는 "무엇이든지 나라를 위하여 경제하고 아끼자!"라는 배급제도라서 「표쪽지」 없이는 무엇하나 구매하지 못하는 시절이었다. 무엇보다도 식량난이 첫 문제였던 때라 아버지는 아무도 모르게 산중 깊이 생땅을 일구어 감자를 심으셨다. 그 때는 어린 나를 꼭 데리고 가셨는데 서로 말소리도 듣지 않도록 조용히 해서 다만 산새들이 지저귀는 소리만 들렸다.

매일 아침 5시면 출근하시는 아버지는 어지러운 작업복을 갈아 입고 등에 맨 망태속에는 작업도구와 점심 도시락을 넣고 어깨에는 무거운 쇠곡괱이를 매셨다.(식구는 잡곡밥이지만, 아버지의 도시락만 쌀밥).

저녁에 집으로 돌아오시는 아버지의 모습은 언제나 다름없이 굴뚝에서 나온 사람모양! 몰라보게 새까만 얼굴! 웃으면 이만 하얗게 보이는 아버지는 방에 들어오시지 않고 나에게 그날의 족지(영수증)만 (하루 3엔 60센)넘겨주면서 갈아 입을 옷보따리를 받아 들고 공동목욕탕으로 가셨다. 이것이 아버지의 하루 일과였다. 명절이나 휴가날이면 담배도 술도 못 하시던 저의 부친은 언제나 저의 손을 잡고 당시 탄광부락 감당에서 보여주는 영화에 데려갔다. 이러한 저의 부친을 이웃사람들은 「신보-가네야마」(참을성 많은) 이라고 별명하였다. 이토록 부친이 노력하신 금전을 합부로 소비하기 아깝다면서 어머니는 두통으로 인하여 고생하시면서도 삼바느질도 많이 하시면서 가계를 도우셨다.

## (3) 징용

이렇게 단란하게 가족이 힘을 모아 작으나마 행복하였던 가정은 오래 유지되지 못하였다.

1944년 8월말 어느날 여전히 목욕탕에서 돌아오신 부친은 저녁식사 하시러 집으로 들어오시지 않고 부락 감당으로 집합회에 가셨다. 언제나 부친을 따라 다니는 나는 호기심에 따라갔다. 큰 감당에는 많은 광부들이 무엇인지 웅성거리면서 군데군데 모여서 불안한 표정이었고 연단위에는 긴 칼(군도)을 찬 경찰관과 군복(국방색)에다 역시 긴 칼을 찬 높은 사람들이 앉아 있었다. 회의가 끝나고 사람들은 다 불안한 표정으로 헤어졌다.

집에 돌아오신 부친은 저녁 식탁을 앞에 놓고 "구주로 징용가야 한다"고 설명하셨다. 다음날부터 어머니는 밥을 말리고 콩을 볶아서 주머니에 싸고 옷가지도 싸면서 때때로 혼자서 울으셨다. 부친의 눈에 뵈때마다 "무엇을 그렇게 심란하게 여기나? 너무 많이 싸지 마라! 두달만 있다가 돌아온다는데..." 하시면서 어머니를 달래는 그때의 부친의 말을 나도 그렇게 믿었다.

밤에 옆집아저씨(젊은 청년이 한바집 콩밥만 먹는게 불쌍하다고 저의 부친이 중신하여 장가보낸 사람)가 찾아와서 "형님, 우리 어디 도망가서 잠시 피신합시다. 징용만 면하면 되지 않아요!"하고 말했다. "무엇이라고! 이 사람, 정신빠졌다! 실없는 소리 하지도 말게, 자네눈에는 안보이나? 밤낮으로 마을에는 경비가 있어. 저것봐라, 창으로 들여다 보는 것이 자네눈에는 안보이나?" 하시면서 "불잡히면 감옥이다. 다고베야는 못면한다"라고 소곤소곤 나무라시는 소리를 나는 잠이 든 채 하면서 두사람의 주고받는 소리를 들었다.

나요시(레소고르스크)광산 마을에는 채굴된 석탄을 바다로 운반하기 위해 마을에서 시내까지 4km되는 철길이 강과 나란히 길게 뻗어져 있었다. 이 강을 사이에 끼고 양편에는 마스타 탄광, 도요하다 탄광이 있었다. 석탄운반 열차는 매일 있었지만 객차라 하면서 토요일, 일요일에는 그 열차 끝에다 상자모양 엮어 만들어진 차량이 2개쯤 달려지면 아이들과 여자들은 그것을 타고 시내로 외출하였다.

## (4) 남자없는 탄광마을

그나마 객차라고 타고 내리는 "철도역"은 마을의 신사(진짜)앞 마당이었다. "너희들의 아버지, 오빠들은 나라를 위한 훌륭한 사람들이며 후방산업전사로 임시 가족과 작별하고 떠나는 만큼 너희들은 그 가족으로서 자신을 호뭇하게 자랑스럽게 여기며 어머니의 말을 잘 들으면서 어린 동생들도 잘 지켜보아야 된다."고 학교에서 선생님들은 우리를 교훈하였다.

우리 아버지, 오빠들을 연행하던 날에는 「진짜」앞마당이 큰 명절과 다름 없었다. 일본인, 조선인 할 것 없이 일시에 떠나는 이 행렬을 전송하려 전체 탄광마을 가족들이 한자리에 모여서 너무나도 복잡하였다. 나도 등에 업은 어린 동생 명자에게 「히노마루」국기를 손에 쥐이고 다른 사람들과 같이 「덴노헤이가 반자이!」(천황폐하 만세!)라고 삼창을 부르면서 전송하였던 그날 부친과의 이별이 이 세상에서의 영원한 이별이 될줄은 꿈에도 생각지 못하였다. 이 탄광마을은 여러 구역별로 바라크식으로 지은 집들이 사람들 다니는 길만 남겨놓고 군데군데 모여있었다. 우리 살던 구역은 제4구역 8호사였다. 한 구역에 8가옥이 있으며, 1가옥에는 다섯가정이 살도록 되어 있다. 우리집 가옥에는 일본인 가정 셋집, 조선인 가정 두집이었다. 그 날부터 이부락의 가옥마다에는 아버지, 오빠들이 없어지고 늙은 노인들과 여자들, 아이들뿐이었으며, 그 다음날부터는 가족들을 먹여살리는 것이 가정주부의 어깨에 달려 있었다.

그해 설명절에는 떠나간 아버지, 오빠들에게 위문 소포를 보내기로 결정한 어머니들은 각 가정마다 구차하지만 구역별로 모여서 사진도 찍고 또 될 수 있는대로 식량을 부송하기로 힘을 모아 준비하였다. 해가 바뀌어도 아버지들은 돌아오지 않았다. 누구 집에도 아버지나 오빠가 돌아왔다는 소식은 없었다.그러나 늦은 봄에 불시에 옆집 아저씨(저의 부친이 중매하여 장가보낸 사람)가 돌아왔다. 그는 오자마자 식솔



을 데리고 부락에서 약 2시간을 말파리로 가야 하는 깊은 산중으로 이주하여 농사꾼으로 되었다.

### (5) 피난



코르사코브 조선학교 7년제 졸업생들(1950) - 두번째줄에서 왼쪽으로부터 학생들 중 5번째가 김순기씨

그때부터 학생들에게는 학교도 재미없게 되면서 결석하는 학생들이 날로 늘어났다. 나도 때로는 동생을 등에 업고, 혹은 손을 잡고 학교를 다니었다. 학교에서는 수업시간을 많이 줄이면서 학생들에게는 공부시간 대신 “못을 주워라!” “빈강통 주워라!” “산채를 얻어라!” 하는 시간이 더 많아졌다. 녹슨 쇠못, 강통 조각은 전선에 보낼 무기제조에 보탬이요, 산채는 겨울철에 학교에서 끓여주는 된장국거리였다. 거기에서 때로는 방

공연습이 있었다. 날이 갈수록 방공연습은 점점 더 늘면서 한 여름철에 들어서서는 하루종일 또는 방공호 안에서 날을 새우게 되었다. 그 시기 어머니는 일이라면 남자 일 여자 일 구별없이 닦치는 대로 하셨다. 선탄장에서는 석탄을 집으로 가져오고 농가에 부업으로 가면 돌아오실 때는 채소나마 먹을 것을 집으로 가져오셨다. 이렇게 노력하시면서 「어쨌든 남편이 돌아올때까지는... 이제 얼마 안 있으면 돌아온다!」 이 한가지 신념으로 어머니는 우리 두 형제에게 배고픈 슬픔을 맛보이지 않았다.

8월에 접어들면서 시내에 사는 사람들이 우리가 살고 있는 탄부마을을 지나서 깊은 산으로 피난하는 것을 보고 탄광마을에서도 차츰 피난이 시작되었다. 그러나 다만 노인들과 아이들만 가게되고 어머니들은 부락에 나아서 폭탄이나 소이탄의 폭격으로 인하여 화재가 있게 되면 소화작업에 총동원되어야 하므로 못가게 하였다. 남자들이 없는 탄광부락에는 어머니들의 힘이 남성을 대신한 큰 힘이였다.

소문을 듣고 산골 농촌으로 이시간 옆집 아저씨가 말파리를 몰고 우리 식구들을 데려가려고 찾아왔다. 어머니와 헤어져서 동생만 데리고는 절대로 안가겠다고 내가 너무나도 소리소리 울어대고 고집을 피우니 반장인 혼다(한가옥 다섯가정 중에는 한사람이 반장이었음, 물론 일본사람) 아주머니가「가네야마상은 할 수 없이 아이들과 같이 떠나요」 하면서 허락하였다. 몇 시간이나 걸려서 도착한 아저씨 집은 그때 처음 보았다. 이 농가집에서는 어느새 여러집이 모여사는 공동생활이 시작되었다. 어느날 아침 새벽 어른들을 무엇인지 수군거리면서 밤새 잠을 이루지 못했다는 말들을 하는 것이었다. 그날 점심때가 되어서 「일본은 전쟁에서 항복하였다!」 하였다.

### (6) 패전

그토록 일심단결 일본의 승리만 믿고 있었던 국민들 앞에는 지금 패전한 일본이 있었다. 사람들은 「러시아인은 잔인한 야만들과 같으니까 조심하여야 된다!」라는 무서운 소문에 겁이 나 떨었다. 탄광마을에는 붉은 군대가 들어와서 열여놓은 창고문 앞에는 사람들의 사태가 밀려들었다! 「얼마든지 힘대로 자유로이 가져가라!」는 말이였다. 그 당시 누구의 의견인지 알아볼 여지도 없었다. 어머니도 나를 데리고 가보았다. 창고안에는 빈자리 없이 비좁게 쌀가마니들이 꽂 차있었고 또 다른 잡곡섬들이 천장에 닿도록 쌓여있었다. 이렇게 많은데 우리 아버지, 오빠들은 콩밥, 수수밥에 얼마나 배를 굶주리면서 어두운 땅밀 채탄작업에 시달렸던가!! 어머니도 쌀을 한포 등에 지고 코가 땅에 닿도록 걸으시면서 얼마나 우시는지! 나는 보았다.

억울한 눈물이었는지? 기쁜 눈물이었는지? 우리 세 식솔은 여전히 살던 부락, 살던 집으로 돌아왔다. 늦은 가을을 맞이하게 되면서 어머니는 밝은 낮에는 하루도 집에 계시지 않았다. 나는 동생과 단물이 집을 보고 있으면서 학교도 재미가 없어서 결석할 때가 많아졌다. 그날도 동생과 둘이 집을 보면서 저녁식사 준비를 하고 있는데 「언니야, 어떤 할머니 왔다!」라고 부르는 동생말을 듣고 현관에 나온 나는 자기의 눈을 의심하였다. 나이가와(찌흐메네워)에 살고 계신 외할머니(어머니 친정어머니)가 아닌가. 너무나도 여위고 못 알아볼 지경으로 변하신 외할머니는 들어오시자마자 명자를 덥석 안으시면서 땅을 치고 목놓아 울으셨다. 이날부터 두 모녀가 눈물로 밤을 새워가면서 하시는 이야기는 끝날 새 없었다. 일본이 패전했다는 말이 퍼지자마자 「로스께(러시아인이라는 말)에게는 하나도 주지 말자!」하면서 경관들과 청년단원들, 군복차림한 자들이 다 같이 「불태워라! 없애라!」하면서 불을 질러 나이가와 탄광마을은 불속에 휩싸이게 되었다는 것이다. 저녁 밥상을 앞에 놓고 있던 중 불시에 밖으로 쫓아나온 주민들은 더운 여름철이라 벗고 있던 상태에 밖으로 뛰어나왔다가 불이 타고 있는 집으로 무엇인가 귀한 물건을 가지러 돌아서는 뒤를 경찰들과 군복차림의 자들이 군도로 사정없이 내려쳤다는 사실이었다. 이런 혼란 상태에서 사람들은 화재 동해안에서 남으로 오도마리(코르사코브)으로 내리밀렸다. 이 탄광마을과 제일 가까운 “레오니도워”에서는 당시 「조선인 사냥」이라 해서 촌 경찰서에서 조선인만 가두어 놓고 불을 질러 사살하였다는 사실, 불타버린 가재와 집들, 이러한 상황을 보고 들으면서 식솔들을 찾겠다고 길가에 널려 있는 시체들을 얼마나 많이 뒤져 보셨는지 외할머니의 눈매는 따뜻하고 부드러웠던 이전의 할머니 눈매가 아니었다! 무섭게 겁에 질린 사납게만 여겨지는 외할머니의 외모였다.

11월도 다 지나게 된 어느날, 식솔을 다 잃어버리고 해매시던 외조부님이 혼자서 찾아오셨다. 이렇게 다섯 식솔이 된 전후 이 가정은 나의 어머니의 두 어깨에 무거운 짐이 되었다. 물론 연로하신 할아버지와 할머니도 무슨일이든지 할 수 있는 건 열심히 도우시면서 살아나가야만 했다.

그 후 광산이 폐쇄되면서 점차적으로 일본 사람들은 어디론가 이주하기 시작하였고 우리들도 마음이 뜨면서 어디론가 가고 싶었다. 상론한 결과 시내로 이주하였다. 시내에서 살면서 어느날 학교에 가니 선생이 「너희들은 내일부터 조선학교에서 공부하게 되었다」면서 여러명의 학생들을 출석부에서 가려가면서 불렀다. 나는 그 때 처음으로 「아! 이제 보니 저애가 조선사람이었구나!」하며 실태를 알게 된 아이들도 몇몇이나 되었다. 지금까지 나는 그 애들을 일본사람인줄로만 알았었다.(집에서나, 밖에서나 식솔 모두가 일본사람태도였기에)

내일부터 다니게 된 학교는 나요시강 건너편 「도요하다」탄광부락에 있었다.

다음날부터 새학교 생활은 「오늘부터 일본말은 절대 금지다! 사용하면 사정없이 벌을 면치못하느니라」는 선생님의 엄중한 훈계로 시작되어 불시에 아이들은 범어리가 될 지경이었다. 숨어서 소곤거리는 일본말이 선생님께 들리면 자기가 앓는 나무결상을 두팔로 들고 교실 한구석에 서야 되는 처벌을 받았다. 보기도 볼수 없는 그 애들은 어제까지 일본어밖에 몰랐던 아이들이었다. 이런 상태를 매일 볼때마다 나는 마음속으로 나의 어머니, 조부모님들께 얼마나 감사했는지 모른다. 나의 어머니의 가정에서 첫째 예의범절은 「가정내에서 식솔들끼리 있을 때는 절대로 일본말은 사용금지!」였으므로 어머니 자신은 물론 일어를 아주 몰랐고 배우려고 노력도 하시지 않았기에 구역 주민회의 같은 좌석에도 아직 어린 내가 다녔다.(일본학교때는 교사가 가정방문오면 어디로 피신도 못하고 선생님과 어머니 사이에 앉아서 통역을 해야만 되었었다.)

나는 이렇게 다니게 된 조선학교에서는 다만 한글 문법만 배우면 되었다. 점차적으로 많은 일본인들이 철거하는 것을 보고 어머니는 「일본사람들이 철거하는 걸 보니 장차는 우리 조선사람들도 고향으로 보내 줄 거다. 아버지는 먼저 데려갔는데 설마 그 가족들을 버려두겠나?」 하시면서 「가게 되면 남들보다 먼저 가지. 뱃머리 가까운 항구도시로 이주하자」 하면서 사변 많은 나요시(래소고르스크)를 떠나버린 해가 1947년 여름방학이 시작되던 때였다. 그때 나는 겨우 열두살도 아직 안 된 팔막하게 두가닥으로 뿔아 늘인 머리의 연약한 소녀였다.

### (7) 병마

우리가족이 모처럼 큰 희망을 걸고 이주해온 항구도시 코르사코브시는 그해따라 무서운 전염병 “장티푸스(브류스노이 찌프)”가 시내를 휩쓸고 있었다.

전쟁전후의 위생불결과 영양불량으로 특히 어린이들에게 먼저 전염되었고 무서운 병마는 궁핍한 가정을 사정없이 덮쳤다. 이주해 온 학교에 가서 등록하고 집에 돌아온 나는 어느 새 깊은 잠에 들고 말았다! 깨어

나보니 40일동안을 혼수상태에 있었다는 것이다. 너무 높은 열로 깨어나지 못하는 나의 머리맡에서 어머니는 밤낮을 헤아리지 않고 간호하시느라 당신도 실성상태였다 한다. 「이 애를 잃어버리면 나는 남편에게 돌아가지 못한다! 조상들 앞에 벌 낫이 못된다!」 하시면서 눈물로 나날을 지내셨다 한다. 이미 시장에서 구하는 약값과 의료비에 집안에서 팔아 돈되는 것은 다 팔아버렸다. 당시 코르사코브시내 어떤 가정들에서는 하루에 두명의 어린이를 죽음의 병마에게 빼앗기는 일이 있었다는 상처의 해였다.

깊은 잠에서 깨어나 정신을 차리고 보니 앞머리가 약간 반 고수머리에 39세의 날씬한 미녀인 나의 어머니는 어느새 반백발에 여윈 모습으로 변해있었다.

그 당시의 코르사코브항구도시는 철거하는 일본사람, 제 나름대로 「다음에는 우리 조선사람도 고향으로 보내리라」고 희망하는 조선사람들이 사할린 도처에서 모여들어 수없이 많은 독신자들이 내일일까? 모레일까? 손꼽아 기다리면서 임시적으로 거처를 마련하여 놓고 되는대로 모여 살았다. (일본 구주로 징용당한 광부들은 사할린의 서북쪽 일부 탄광, <12개소 탄광> 채탄부들이었음), 사할린의 동서남북 임산업, 다른 광산에서 일하던 많은 독신자들이 이 항구도시에 제각기 집도 없이 군데군데 모여 살았다. 밤이면 그 아저씨들이 우리집에도 많이 모이게 되면 저의 외조부는 옛이야기 즉 주로 고구려 역사와 조선왕조에 대한 이야기를 젊은이들에게 하였다. 「한때 요동칠십리는 우리 조선땅이었다」는 등등... 신기한 옛이야기였다.

우리집에 와서 실지로 보는 사람중에 궁핍하게 살고 있는 이 가정에 젊은 남자의 힘이 필요함을 눈치차리고 미망인이 아닌 미망인인 아름다운 나의 어머니에게 청혼을 희망하는 자들이 있음을 눈치차린 나는 현관에 젊은 남자들의 신발이 눈에 띄이면 발로 차버리거나 사납게 폭행까지 하며 성질을 부리는 거칠고 미운 소년가가 되어 갔다.

「우리 아버지는 살아 있는데 사람들이 우리를 업신여긴다!」는 마음 하나뿐이었던 나는 때로는 소리치면서 어른 앞에서 반항하는 보기에도 미운 여자아이였다. (병에서 완쾌되자 머리칼은 다 빠져서...) 기다리고 기다리던 귀국은 그림자도 없고 희망도 점점 멀어져가면서 연로하신 외조부모님은 자기들의 딸에 대한 재혼을 남몰래 생각하셨다. 그러나 문제는 이 손녀딸이었다. 너무나도 난폭하게 구는 성품을 어떻게 달래볼 도리가 없었다는 것을 후에야 알게 되었다.

이런 나의 문제를 해결하기 위해 어른들끼리 말을 맞춘 어느날 중매자인 아주머니가 우리집에 와서 「성님, 아주 훌륭한 청년이유, 지금시절 보기에도 드문 사람이유... 놓치면 다시는 그런 사람 못찾수...」 등등, 나의 조부모님과 어머니 앞에서 말을 늘어놓는 것이었다.

그때 나는 아직 6학년 학생이었다.(학교는 7년제) 방 한구석에서 숙제하느라 앉아 있으면 어른들의 이야기는 듣기 싫어도 들었다. 구수하게 좋은 말만 하는 아주머니에게 나는 외쳤다. 「그렇게 아깝고 훌륭한 사람, 아주머니 집 사위삼지 왜 나보고 시집가래요! 나는 아직 학생이잖아요! 아버지 없다고 사람 업신여기지 말아요!」 그집에는 나와 동갑인 딸이 있었다.

여느때는 그다지 엄하게 대하지 않던 외조부는 노염이 머리끝에 이르렀다. 「에이끼, 괴악한년! 버르장머리 없이 어디 어른들앞에다 대고 말대꾸질하는거야! 썩 물러서지 못하냐!」 하시었다. 나는 밀려나오고 말았다. 이렇게 7학년까지는 졸업하게 되었다. 해방후 남부 사할린에는 조선인 국민학교는 설립되었으나 교사가 부족되었다. 여름방학이 되면 1개월반동안을 교원강습회가 있어 강습실력시험에 합격된 졸업증서만 갖게 되면 초등과 소학반을 가르칠 수 있는 소위 "교사"라는 직업을 갖게 되어 있었다.

「아버지와 만나기 전에는 아버지 없이는 절대로 누가 시집가나 두고보자!」하고 미리부터 공심을 안고 있던 나는 「무엇이 어쨌든 그 교원강습을 꼭 졸업해 보일거라!」고 결심은 하였으나 그 해 따라 강습회가 코르사코브시에서 약 80킬로미터 떨어진 돌린스크시에서 진행되고 있었다. 거기까지 기차로 다닐 차비가 없었다. 누구에게 의논하여도 들어주지 않았다. (시집보낼 예산이었던 어른들이...)

여비는 약 130~150루블리가 필요하였다. (어머니의 월급은 600루블리)방법을 생각한 결과 외가의 먼 친척 되는 분이 이발사를 하고 있는데 찾아가서 「날 취직시켜 주세요!」하고 때를 써서 임시 취직하게 되었다. 기술도 경험도 없는 코흘리개 학생은 누구에게도 필요하지 않았지만 나에게서는 지금 곧 금전이 필요했다. 반개월치 150루블리를 받아 온 나에게서는 그 외에는 더도 필요치 않았다. 돌린스크로! 기차에 뛰어올랐다.

## (8) 공부 · 결혼

돌린스크 강습은 벌써 수업중이었다! 차비 마련하느라고 늦게 온 것이다. 「늦어서 받아들이지 못하겠다」는 교장에게 「시험에는 꼭 합격하겠습니다. 선생님, 받아주세요!」 너무 애걸하니 마지못해 받아주었다. 돌린스크에는 그해 제3차 졸업생인 (1950년) 동창생들이 많이 첫날부터 강습을 받고 있었다. (다 양친부모 있는 아이들이었다. 그 때도 아버지 없는 외로움에 마음은 몹시 괴로웠다!) 남은 일자라도 공부하여 졸업장을 받아온 순간 반갑고 행복한 사람은 세상에 나 하나뿐이었다. 「이제는 됐다. 시집 안가고도 견딘다.」의기 양양해 돌아온 집에서는 「9월에 결혼예식을 올린다.」는 준비가 나를 기다리고 있었다.

「할아버지! 나도 이제는 일할 수 있어요. 어머니와 둘이서 일하면 우리 다섯식구는 먹고 살아나갈 수 있습니다! 이제 조금만 더 참고 견디면 아버지도 만날 수 있지 않아요!」하고 애걸하면서 할아버지앞에 펼쳐보인 한장은 그 졸업장은 나의 평생 두번 다시 찾아볼 수 없게 되고 말았다!

그때부터 나의 「스트라이크」가 시작되었다. 단식하면서 밤낮 헤아리지 않고 아우성치며 울어대면서 누가 어떤 말로 달래도 듣지 않으니 성품이 엄격하신 할아버지는 「부모를 몰라보는 무례한 년, 무엇이든 자기 마음대로 하는 불효자에게 무슨 성공이 있겠다고, 닥치지 못할까. 듣기 싫다.」는 뇌성벼락 고함소리, 신세 타령하시면서 땅을 치고 우는 어머니, 잠도 모르고 단식하고 울어대는 손녀, 그 사이에서 모두를 달래느라 울면서 어성대시는 할머니에게 자기의 분에 못견디어 무엇이든지 집어던지면서 노부부끼리의 싸움이 시작되었다.

며칠이 지나도 집안 형편은 조금도 다름없이 매일 반복되었다. 집안 식솔 누구를 보아도 그때의 내눈에는 제일 불쌍하고 가엽게 보이는 사람은 저의 어머니 한분이었다. 그런 마음이 들자 「에라, 다 견어치우자! 내 하나만 시집가면 우리 집안 평화롭게 누구도 마음 아픈 변 당하지 않을 것을!」하고 약 1주일 하던 「스토」도 견어치우고 어른들에게 효도하기로 결심하였다.

「할머니, 내 시집갈래요.」 「다시는 눈물보이지 않을거야!」결단을 내린 나는 15세의 새색시가 되어 9월 25일에는 결혼예식 올리고 4형제 엄씨가정 막내 동생인 엄진영(1928년생)의 처가 되었다.

그렇게 폭동을 일으켜놓고 얼마나 반항하던 애가 딱 그치고 결혼을 승낙하니 어른들은 조금 의심감도 들어했다. 「애야, 너 시집가면 시댁의 어른들 말 잘 듣고 어쨌든 남편이 하라는 대로 순종해야 된다!... 잘 귀여겨 들어라!」 등등 이제는 어쨌든 시집가서 모든것에 순종하라는 부탁이었다.

엄씨가문의 형제가족은 역시 고향으로 보내줄때면 모두가 같이 떠나야 된다면서 그때까지 약 20여명의 식솔이 한집에서 살았다. 거기에 내가 막내 며느리로서 4번째가 들어왔다.

내가 출가한 다음해 1951년, 언제든지 어머니의 재혼을 반대하던 나에게서는 아무 통지도 없이 어머니는 조부모님 소원대로 재혼하였다. 1952년도 봄에 할머니가 찾아오셔서 눈물로 소식을 전하셨다. 그해 가을부터 사할린주에 처음으로 조선인 사범학교가 설립되었다. 또 이해 가을에는 시형제들이 그토록 기다리던 우리들의 장남 "주완"이가 태어나서 백일이 지나고 분가되었다. 친정과는 멀리 떨어진 레오니도워였다.

재혼하신 저의 어머니는 다시금 무정한 운명에 시달리게 되었다. 남편으로 맞아들인 이는 1944년도 강제징용으로 화태로 연행당한, 고향이 경상남도인 분이였다. 정직한, 술도 모르시는 착실한 자라고 믿었던 그가 "천식"이라는 당시 고칠 수 없는 병자였다. 늙어가는 노인들을 모시고 병자까지 보양해야 되는 남에게 말 못하는 마음 고생이 눈에 띄었다.

## (9) 후회

동생 명자는 아직 학교에도 다니지 않는 어린애면서도 의무를 아버지라고 따르지 않았다. 「어떤 아저씨」로 대하는 그녀와 의무사이가 날로 점점 냉정하게 되어가는 것을 보고 어머니의 가슴은 아플 정도로 후회가 되었다.

동생 명자는 중학교(이때는 10년제 의무교육제도)를 졸업한 후 "나는 아버지를 찾아가 보겠다. 혹시나 북조선에 계시는지도 몰라!" 라고 말하기 시작했다. 고향 강원도 강릉은 3·8선이남이였기에 1950. 6. 25전쟁때 남북국경지대였던 까닭에 어쩌면 북에 계시는지도 모른다. 50년말에 당시 사할린주에는 나호드카주재 북조선영사관이 매달같이 사할린 청년들을 부르고 있었던 때였다.

어머니도 "혹시나?" 하는 마음도 없지 않았으므로 기어코 반대는 하지 않았다. 그러나 할머니는 절대로 반대하시면서 「네가 그 애를 보내면 어쩔라냐? 그나마 두고봐라 그애 보내고 나면 너는 화병날거다.」 「판

사람들도 많이 가는데 그애라고 왜 못가요?» 그러나 할머니는 끝까지 반대하셨다. 1961년도에 우리 부부는 10년동안 살았던 레오니도위에서 2남 1녀의 아이들을 데리고 유즈노사할린스크로 이주하였다. 그동안 북조선 영주에 대해 말이 많았던 동생은 드디어 1963년 봄에 국경을 넘어갔다. 같은 때에 우리 집 식구는 1명이 늘어났다. 삼남 주철이가 태어났다. 그후부터 어머니의 모습은 나날이 변모되어 갔다. 머리칼은 새하얗게 백발이 되었으며 쇠약하여가는 몸은 보기에다 가엾을 정도였다. 제화공장에서 직공으로 근무하던 내가 일주일내 토, 일요일을 친정에서 보낼때가 있으면 어머니는 만날때 마나 큐슈섬으로 징용간 남편말만 하게 되어 옆에 있는 남편(즉 나의 의부)의 눈치가 보여서 은근히 막으면 어머니는 그때마다 아랑곳없이 말씀을 계속하시곤 하였다. 이렇게 「너무나도 짝았던 행복」이 운명의 길에서, 전쟁이란 역사속에서 엇갈리게 되었음에도 지난날을 회상하실때는 아름다운 미소를 띄우시던 어머니의 진짜 모습을 나는 보았다. 심리적 고통과 육체의 쇠약, 심장병에다 뇌출혈증으로 고생하실때도 옆에 내가 있으면 무엇보다 약이 되었다. 「그렇게 공부하겠다는 걸 막고 너를 시집보낸 내가 죄받았다!」 이런 말씀을 어머니는 자주 반복하셨다.

### (10) 사망

40km떨어진 어간에서 살면서도 「어머니가 위급하시다」는 소식을 듣고 (당시에는 서로 전화도 없었음) 쫓아 온때는 이미 늦어서 어머니의 망종을 보지 못하고 어느편가 할아버지가 말씀하시던 “불효녀”가 되고 말았다. 평온하게 꼭 다물은 입과 눈은 그 얼마나 남편을 보고 싶었고 만나면 그 얼마나 하릴 말이 태산같았을까! 가슴의 아픔이 얼마나 되면 인간을 사망의 길로 몰아갔을까! 이 세상의 원한과 고통을 가슴깊이 안고 영원한 잠길로 떠나셨다! 때는 1968년 8월 29일 59세의 짧은 생애를 이국관리 타국땅에서 슬픔으로 마치신 징용피해자들중의 한 여성이 바로 저의 어머니이다.

### (11) 결심

지금와서 회상하면 철없이 어머니를 애태웠던 내가 아무런 성공도 없이 다만 살아나가는데만 달음박질 하였으며 가라후도-소베트(사할린-개방러시아), 조국(영주귀국)… 파란많은 운명의 섬, 사할린 섬안에서 열심히 살자고 뛰다보니 60년이란 세월을 달음질하면서 세기를 넘어 디디게 된 연금자이고 한명의 증조모가 되었습니다.

지우려도 지울 수 없는 추억을 후손들에게 이야기하며 자신을 위로해가면서 이 땅에서 남은 여생을 나의 자녀들과 같이 살려고 서로 노력하면서 살기로 결심하였습니다. 지난 날 우리 어머니들의 생애가 다시는 반복되지 않는 시대, 서로가 사랑하며 살아가는 인류의 세계만 있기를 빌면서.... 어느편가 어려울때 우리들에게 교훈하던 「일본은 정의에 아름다운 나라」가 신세기에는 과거의 잘못을 서로가 오해없게 깨끗이 청산하기를 진심으로 빌면서 불행한 시대의 희생이 되어 슬픔의 생애를 안은 채 이 세상을 하직하신 분들에게 바치는 글로서 제가 어느 때의 이중징용피해자의 한명인 저의 어머니에 대해 유가족회원의 한 사람으로서 쓴 이 글을 온 세상 사람들이 읽어주시면 더 없이 감사하겠습니다. 이 글로써 신세기법을 기억, 책임, 정의의 법정애 소송합니다.

#### ◆첨부

- 미국에서부터 있었던 새 국제법률 「기억, 책임, 정의」라고 칭하는 회는 「전쟁피해자 보상문제에 관함」
- 서부독일은 이 법이 1950년도에 제정되어 전쟁피해자라면 군인, 민간, 국적, 거주지등에 차별없이 보상하였으며
  - 전쟁후 45년이 지난 1990년 10월에 미국은 미국에 생존하는 일본인들(그들은 징용도 아니고 자원적으로 이주한 사람들이었다) 약 6만명에게 「금액과 말로써 잃어버린 세월을 찾고 아픈 기억을 달랠 수는 없습니다. 손해배상과 진심으로 사죄의 말씀 드리는 법률의 제정으로 미국인은 말의 진실한 의미로 자유와 평등, 정의라는 이상에 대한 전통적인 책임을 새로이 하였습니다.(중략)」라는 대통령이 수표한 글과 함께 1명당 2만달러씩 각자에게 배상하였다.(현 대통령부친-전 부시 대통령때)
  - 캐나다도 1만5000명의 일본인에게 역시 같은 금액으로 배상 (전쟁시기 강제수용소에 처했던 일본인들에게) 이상은 이중 징용유가족들에게는 흔한 내력입니다. 유가족들중에는 오늘날까지도 부친이나 형님, 오빠가 행방불명인 자도 있으며 어떤 자는 자기의 생명조차 모르며, 형제도 잃고 비참한 생애를 살아온 자도 있습니다.

## 일본정부는 책임을 져야 한다.

임태환(남) 1934년생

임능소는 나의 선친입니다. 저는 임태환(67세) 이중징용탄부 피해자의 자손입니다. 저는 어린시절인 7세를 들어섰을 때 저의 어머니를 저와 어린 동생들 2명을 데리고 1940년에 아버님을 찾아 樺太 名好郡(화태 명호군) 名好町(명호정) 토요하타탄광(풍전탄광)이라고 하는 곳에 왔습니다. 그때는 한참 중일 戰爭中(전쟁 중)이었죠. 그러자 1944년 9월 초순에 영화관앞에 グラウゾウドゾヨ란 큰 운동장이 있었습니다.

그 운동장에 많은 사람들이 이리저리 다니면서 작별의 말을 하고 있었죠. 그 때 아버님 말씀이 후방산업부대로 갈 것이니 어머니의 말씀을 잘 듣고 어린 동생들을 잘 돌봐주어야한다. 몇 달만 있으면 돌아올테니 라고 말씀하셨습니다. 그러자 작별시간이 되었습니다. 그 때 불렀던 이별의 노래, 然らば名好レよまた來るまでレはレばレ別れの涙玄湓す名好だけさえ笑つて送れ 그 때 불렀던 이별가 소리가 아직도 나의 가슴속에 묻어있습니다. 그러다 1945년 8월에 태평양전쟁이 끝났습니다. 일본인이거나 조선인이거나 다들 같이 함께 말하는 것이, “히기아게 히기아게스루” 귀국한 단 말이었죠. 모든 사람들이 말하는 것이 배를 타고 간다면 몇일이나 걸리겠는지 식용품을 준비해야 한다고 해서 어머니는 삶은 감자와 러시아빵을 말려 근 한달치 먹을 준비를 하여 보따리에 툭툭 싸 놓고 귀국하기를 기다렸습니다. 그러다 귀국하는 날이 닥쳐왔습니다. 많은 사람들



이 준비해 놓았던 보따리를 가지고 나섰습니다. 저도 보따리를 짊어 메고 어머니와 동생들을 데리고 나섰지만 헛걸음했죠. 그 때 일본정부는 일본인만 귀국시키고 조선인들은 발길로 차 내버린 것입니다.. 그때는 우리도 일본인으로 되어 있었는데 어찌서 우리를 버리고 갔는가? 그리고 이중징용에 걸려(후방산업전사)라고 가신 아버님도 얼마나 가슴 태우면서 우리를 기다렸을까요? 한국에 살고있는 사촌동생의 말에 의하면 일본에서 기다리고 기다리셨으나 가족이 폭탄에 맞아 죽은줄 아시고 한국고향에 돌아와서 애타게 기다리셨다가 세상을 버렸다는 것입니다. 저는 이것을 잊지 못하겠습니다. 그리고 고생 많이 하신 저의 어머니가 우리를 굶기지않고 키워줘서 천번만 번 고개를 숙입니다. 어머니는 어느날 북쪽에서 남쪽으로 날아가는 기러기 때를 보시더니 눈물을 흘리면서 “야, 저봐라 기러기도 남쪽나라 고향을 찾아가는데, 우리는 언제나 한국고향을 찾아갈 수 있을까?” 그렇게 애를 태우면서 기다리고 기다리신 어머니는 그리운 남쪽나라 내 고향에 못가시고 1985년에 세상을 떠 버렸습니다. 저는 양친부모 잃은 생각, 이때까지 고생길을 밟고 온 생각을 하면 일본정부를 용서하지 못하겠습니다. 그때 어린 소년이었던 저도 머리가 백발이 되어 인생 70고개에 들어선 늙은 노인이 되었습니다. 일본정부가 죄가 많습니다. 없어진 부모를 살려내 놓든지 배상을 하던지 일본정부가 책임을 져야합니다.

## 일본은 용서치 못할 죄 지고 있다.

김금주(여)

저는 1918년 12월 16일 충청남도에서 태어난 김금주이고 저의 남편은 1915년 2월 6일에 출생한 이은일씨입니다. 1941년 봄에 저는 이은일씨(일본이름은 하루키 마추카게)가 화태에서 일하는 친나이(현 크라스노고르스크)탄산을 한살반되는 어린애를 안고 찾아왔습니다. 남편은 약 1년전 1940년도에 한국(충청남도)에서 사할린(당시 화태)로 모집되어 왔습니다. 제가 외동딸로 한국에는 친정부모님이 계셨고, 시부모님과 3명의 형제들과 2명의 누님들이 남아 있었습니다. 1942년 정월에 사할린에서 둘째아이(아들 이수진, 일본이름 히데오)가 태어났습니다. 1942년 5월에 탄산에서 생산량이 얼마정도 줄자 저희 가족과 또 5가족을 "친나이" 탄산에서 약 250킬로미터 떨어진 "키타코자와"(현 첼리놉스키 부락) 탄산으로 옮겼습니다. 그후 1944년에는 저희 남편 하루키 마추카게는 일본 류슈 "하시마"탄산으로 이중 강제징용되었습니다. 그 당시 저희에게는 2명의 어린아이가 있었고 저는 7개월된 셋째를 임신중이었으며, 1944년 가을 아빠없이 딸 나리코를 낳았습니다. 그런데 1945년 봄 어린아이들 모두가 홍역으로 먹을 것조차 없던 상황에서 약한번 써보지 못하고 한돌도 되지 않은 나리코는 아빠를 한번 보지도 못한채 숨지고 말았습니다. 남편은 일본 탄광에서 채탄공으로 일했습니다. 1945년 종전을 몇일 앞두고 같은 일을 하던 사람과 남편은 탄산에서 일하다가 10여 미터 높이에서 떨어졌는데 다른 사람은 그리 심하게 다치지지는 않았고 남편은 척추와 늑골(갈비뼈)에 심한 외상을 입어, 탄산 지하실에 마련된 의료실에 입원시켰습니다. 모두가 저희 남편이 회복되지 않을 거라 여겼는데, 외상이 심하지 않았던 다른 사람은 사망하고 다행히도 남편은 살아남게 되었습니다. 1945년 8월에 전쟁이 끝난걸 알게된 남편은 병세가 회복되기도 전에 병원에서 도망쳐 지팡이를 짚고 도쿄에 피난 가족이 온다는 소문을 듣고 그곳에 왔습니다. 어떻게 하든지 가족을 찾으려고 했으나 찾지 못한 남편은 홋카이도섬 항구를 거쳐 사할린으로 들어오려고 결심했습니다. 모진 시도 끝에 마지막 얼마 남지 않은 적은 돈으로 조그만 배의 주인에게 사정하여 사할린까지 실어달라고 부탁하였고 배주인은 몰래 그를 싣고 오토마리(현 코르사코프시)의 연안에 아무기척 없이 내려놓았습니다. 마침 이때 사할린에는 소비에트 군대가 들어와 있었습니다. 코르사코프에서 먹을것, 돈한푼 없이 기진맥진한 남편은 키타코자와(현 우글레르스크 구역 첼리놉스키 부락)까지 약 500여 킬로미터되는 거리를 걸어서 기어코 집에 당도했습니다. 1945년 말에는 어린아이들을 먹여살리기 극히 어려운 시기였습니다. 그 당시는 저금통장에 있던 저금을 내어주지 않았기 때문에 우리는 그 통장을 일본 귀환을 준비하고 있던

일본인들에게 감자 반포대와 바꾸어야 했습니다. 이제 반세기의 세월이 지났으나 아직까지도 그 당시의 비참한 기억들이 사라지지 않고 있습니다. 1944년 8월에 남편이 일본으로 이중징용되었을때 사람들에게 하루 250그램씩 사료용 대두와, 한달치의 쌀을 배급으로 나누어 주었는데 쌀은 하루에 한줌밖에는 이용하지 못할 양이었습니다. 어느날 3돌이 채 되지않은 아들이 매일 먹는 썩과 썩은 콩죽 대신 밥을 달라고 울면서 너무도 졸라대서 아이를 상에서 떨어뜨렸는데 아이가 넘어지자 더 심하게 울기 시작했습니다. 울다가 그치겠지라고 생각했는데 계속 울기에 일으켜 세우니까 다다미가 피투성이가 되어있었습니다. 아마 넘어질때 코를 심하게 다쳤던 모양입니다. 저의 속이 찢어질듯 아파서 어떻게 할지 몰랐습니다. 정신을 차린후 저는 세상의 모든 일을 원망하면서 아이를 안고 울음을 터트렸습니다. 사할린에 소련군대들이 들어올때 저는 한 아이는 업고 2명을 데리고 비행기 공습을 피하기위해 숲속에 숨을 수 밖에 없었습니다. 방공호에는 자리가 없다는 구실로 저같이 아이가 많은 가족(그 당시 3가족이 부락에 있었음)들을 들여주지않았기 때문입니다. 전쟁이 끝나자 조국과 가족들간에 연락이 끊어졌습니다. 한국에 남은 친척들과 연락을 취하려고 수차례 시도해보았으나 아무런 결과를 보지못했습니다. 저의 남편은 일본 탄산에서 입은 외상으로 힘겨운 일을 하지 못해 벌이도 당연히 줄어들었습니다. 한국 친척들에게서 아무런 소식을 받지 못한채 일시 먼저 남편이(1977년) 세상을 떠났습니다. 이육과 한국으로의 문이 열리게되자 친척들에게서 받은 소식으로 시어머니는 아들을 기다리다가 보지도 못한채 1981년 92세를 일기로 돌아가셨다는 소식을 듣게되었습니다. 아들보다 세상을 더 사시다가 가셨는데 아들을 보지못했으니 얼마나 원통한 일입니까. 저 역시도 80세의 나이에 저의 부모님이 먼저 돌아가셨으나 묘지가 어디에있는지 모르고 있습니다. 부모님의 제사도 지내지 못하고 있으면서 자식의 도리를 다하지 못하고 있는셈입니다. 누가 저질러 놓은 일의 결과입니까? 한국에 있는 가족들과 갈라놓고 사할린에 강제로 끌고와서 이곳 탄광과 다른 일본 기업들에서 고된 노동을 시키면서 저희들에게 모진 고통을 준 일본은 용서받지 못할 죄를 짓고 있습니다. 일본은 당연히 우리에게 도덕적 물질적 손해를 책임지어야 하고 세계 선진국들이 하는 바와 마찬가지로 우리에게 당연히 보상을 지불해야 하며, 그것을 못할 경우에는 저와 동반 자녀들(그 가족을 포함하여) 고국에 거처를 마련해주고 생활비와 의료혜택을 무료로 보장해주고, 자녀들에게 일자리를 제공해주는 영구귀국을 강력히 요구하는 바입니다.

김금주 2001년 8월 9일  
어머니의 말씀을 대필한 아들 이 수진

## 유즈노사할린스크시에서 거주하고 생활하는 비 공민중 여점순이 보내는 청원서

여점순(여) 1917년생

나는 1917년 11월 23일 충청남도 논산군 성동면 월성리라는 곳에서 출생한 여점순입니다. 1935년에 논산시의 이봉석이라는 분과(일본이름 히로시, 1889년생) 결혼하였습니다. 1937년에 첫아들 이근화(현재 전근화)가 태어났습니다. 1941년에 남편과 아들을 데리고(일본정부의 명령으로) 나요시 도요하타 탄광에 징집되어 왔습니다. 남편은 탄광에서 일하였습니다. 1944년에 일본정부의 명령으로 남편은 또다시 일본으로 강제징집되어 이바라기란 탄광으로 배치되었습니다. 우리 세식구들은 나요시에 남겨두고 2년후 남편은 돌아온다는 것을 약속하고 떠나갔습니다. 그러나 2~3년이 지나도 돌아오지 않았습니다. 저는 아이들을 살리기 위하여 탄광에서 남은 다른 여자들과 같이 일하였습니다. 1945년 8월15일 소련 군대가 화태를 점령하고 탄광도 소련 사람들이 노동을 하니 갈곳이 없었습니다. 그러나 우리 동네 여러사람들과 도와가면서 살아왔습니다. 그러나 남편은 돌아오지 않았습니다. 1947년에 한 남자분이 우리 가정을 도와주었습니다. 큰 아들은 4년제를 졸업하고 기숙학교에서 공부하였고, 16살에 직장에 취직하여 근 45년간이나 노동을 하였습니다. 지금은 연금 생활을 하고 있습니다. 둘째 아들은 1960년에 북조선으로 공부하러 갔고 현재 2년동안 아무런 소식도 없는 상태입니다. 1990~91년도에 한국과 러시아가 외교관계가 된후 처음으로 대한적십자의 덕택으로 1992년 조선 고향땅 논산시를 방문하여 친척들을 찾았습니다. 그러나 저의 친정 마을에는 생존한 친척분이 한분도 계시지 않았고 남편의 산소도 없었습니다. 다만 시집의 생존해 계신 친척분들에게 알아본 바 전쟁이 끝난 후 일본정부는 일본 탄광에서 일하던 사람들을 남조선 고향으로 보내면서 화태에 있는 식솔들을 기다리면 된다고 하였다는 것입니다. 그래서 남편은 고향에서 가족들을 기다리고 있었다고 합니다.

그러던 중 1950년 남북 국내 전쟁에서 북조선에서 남조선으로 내려왔을때 남편과 시동생을 어느곳으로 데려가 학살하였다는 것입니다. 그래서 조카들의 말로는 근 40년이 지난 지금도 어디에 묻혀있는지 알지못한다는 것입니다. 1999년 500세대 아파트를 안산시에 건설하여 제일 먼저 노친(노인부부)들 가정을 영주 귀국 하였지만 저의 경우는 혼자 생활하기때문에 2칸짜리 집을 못 받는 형편입니다. 아들은 가정을 지켜서 부부간에 어머니를 혼자 놔두지 못해 영주귀국을 하지 못하고 있는 것입니다. 이번에 사단법인 사할린주 일본학자의 조선인 강제연행사 책에서 23명의 이름이 나왔는데 그들은 아요시도요히다 탄광에서 일하다가 또 일본 이바라기 탄광에서 일을 하였다는 증거가 나왔습니다. 그들 중 저의 남편 이봉석씨도 찾아냈습니다. 우리가 일본정부에게 요구하는 것은 2001년 2월14일 6개항을 사할린주 이중징용으로 인한 피의자 유가족 총회에서 채택한 그 실현을 위하여 추진할 것을 결의하고 2개항(즉, 고국인 한국으로 영주 귀국을 희망하는 자들에게 귀국자가 요구하는 개인 소유권이 보장된 주택을 2003년까지 제공하며, 부양자들을 동반하는 귀국을 보장할 것)을 들어줄 것을 요구하는 바입니다. 나는 출생지인 고향땅 논산시에 귀국하여 마지막 여생을 가족들과 같이 살기를 희망합니다. 나는 연금생활을 하면서 한달에 20달러를 받고 아들은 40달러, 며느리는 35달러를 받고 생활하고 있으니 생활수준이 나쁜 편입니다. 나는 하루빨리 일본정부가 나의 부탁을 들어주어 영주 귀국할 날을 희망으로 손꼽아 기다리는 바입니다.



2001년 8월 12일 여점순  
아들 이 근화가 어머니의 말씀을 대필하였음

## 손해배상을 보다 강경히 요구하자



사할린주 이증징용광부유가족회는 일본 외무성·적십자사에 지난 2001년 7월 10일, 10월 1일자로 요청서를 보냈는데 일전에 그 회답을 통달하여 왔다. 일본의외무성은 이 문제를 전체 사할린 한인문제로 보고 있으며 따로 취급할 문제가 아니라고 한다. 사할린한인 문제는 점차적 해결중에 있으니 이해해 줄 것을 부탁한다고 하고 문건조사는 계속하여 본다고 회답했다. 일본 적십자사에서 보내온 편지의 내용을 번역하여 독자들에게 공개한다:

"2001년 11월 21일자 러시아 사할린주 한인이증징용광부유가족회 서정길 귀하. 일본적십자사 가무국 국제부장 카부라기 신이치. 적십자사는 제네바조약을 기초로 하여 인도적 지원입장에서 분쟁과 재해로 산산히 흩어진 사람들에 대하여서는 가족들의 의뢰에 따라 안부조사(운명조사 역자)는 실시하고 있습니다. 그러나 러시아 사할린주한인이증징용광부에 관한 조사에 대하여서는 일련의 전후처리문제의 하나임으로 또 조사에 필요하다고 본 정보는 모든 것이 일본정부가 가지고 있기 때문에 현 단계에서 일본적십자사가 이 문제에 직접 관여할 실질적 의미가 있다고는 생각하지 않습니다. 아무쪼록 잘 이해하여 주시기를 부탁드립니다.

일본 적십자사는 한국과 소베트연방간의 정식국교가 없었던 1989년에 일본정부의 요청을 받아 대한적십자사와 "사할린 한인지원 공동사업체"를 발족시켰으며 그 이래 일본정부의 위탁사업으로 모국방문사업, 영주귀국지원사업, 사할린잔류자지원사업을 순차 실시하여 왔습니다. 금후에도 대한적십자사, 재사할린한인단체와 연락을 취하면서 본 사업의 진전을 향하여 노력을 할 것입니다."

이상과 같은 내용의 편지가 입수됐다. 우리는 앞으로도 계속 일본정부에 이 문제를 조사·연구할 것을 요청할 것이며 특히 고문서 재료를 연구하며 사할린한인들·조선사람들의 정당한 요구가 완전히 실현될때까지 모든 한인단체들과 손을 잡고 노력을 경주할 것이다.

일본정부가 사할린 한인문제해결을 위하여 공식조사를 여러번 했다는 사실은 이미 잘 알고 있는 것이다. 그런데 현 일본정부의 자세는 우리 사할린 한인문제를 해결함에 성의있는 태도가 아니라고 볼 수 있다. 그들은 한때는 국회의원 간담회원들의 성의있고 꾸준한 노력과 충고에 귀를 기울이고 32억 7500만엔을 국가예산에서 내놓았으나 지금에 와서는 예산이 어렵고 곤란하다보니 <양해하고 이해하여 주시오> 또는 <계속할 예정입니다>등으로 우리를 안심시키는 쪽으로 방향을 변경시키고 있다. 우리에게서 여생이 얼마 남지 않았다. 6000명 이상의 늙은이들이 사할린에 잔류·생활하고 있다는 것을 잊어서는 안될 것이다. 일본정부는 한인들 68%가 살고 있던 곳을 조사대상에 넣지 않았다는 것을 필자는 말하고 싶다. 현재 우글레고르스크 이북을 조사해야 한다.

일본정부가 진심으로 보상할 마음이 있다면 이 문제를 더는 지연시키지 않을 것이다. 자료에 의하면 일본은 원조한다는 구실로 연 100억달러를 전세계에 내던지고 있다. 이런 경제대국이 몇사람 되지 않는 사할린 한인 1세들을 위하여서는 예산상 곤란하다니 또는 이해하여주기를 부탁한다느니 하면서 혈값으로 문제에 종지부를 찍자는 자세로 나오고 있는 것이 아주 의심스럽다고 볼 수 있다. 우리는 이해할 것이 아니라, 우리는 피해자들이니까 가해자에게 손해배상을 보다 강경히 요구하고 국제사회에 지지·성원을 받을 방도를 찾아야 할 것이다. 이것은 전체 한인단체지도자들이 보다 적극적인 노력과 보상청구연구에 몰두해야 함을 깊이 인식해야 된다는 것은 말하고도 남음이 있다.



사할린주한인 이증징용광부유가족회 위원 정 태식

## 꿈에라도 보고싶은 오빠



日本(일본)에 계신 여러분들 안녕들하십니까?

저는 사할린에 사는 李圭淑(이규숙)이올시다.

고향은 忠清北道(충청북도) 中原郡(중원군) 城面(성면) 丹岩里(단암리)에서 아버지, 어머니, 오빠, 두 여동생, 나와 여섯 식구가 살다가 아버지께서는 그때 연세가 몇이었던지 기억 못하지만은 오빠께서는 16살 되던 해 두 분이 즉 1937년에 카라후도 미쓰비시광업소(화태삼릉광업소) 北小澤炭院(북소택탄원)에 모집오셔서 그 후로 아버지께서는 굴안에서 16살먹은 오빠 圭容(규용)이는 전차 운전수를 하였으며, 우리는 그때 어머니와 두 동생하고 조선에 살고 다달이 돈을 우리에게 부쳐주셔서 받아쓰다가 그 후 6년만에 어머니와 우리를 화태로 데려와 한칸짜리 나가야집에서 6식구가 살다가 1944년에 아버지께서는 이바라기젠 다가군 이소하라마지 오쓰까 야마구치탄광으로 징용가시고 오빠께서는 쿠슈 미쓰비시 타카시만탄광으로 가셨다가 아버지께서는 1945년도에 집에 돌아오셨으나 오빠께서는 그 후 돌아오시지 못하고, 인편에 소식을 들으니 야매배(밀선)을 타고 오시다가 파도가 심하게 쳐서 못오시고 일본 오다루에서 능금장사를 하고 다니신다는 소식을 들은 후에도 몇 년이 지나가도 아무 소식이 없어서 아버지, 어머니께서는 늘 눈물로 세월을 보내시며, 아버지께서는 하시는 말씀이 "우리는 화태 들어와서 망했구나!" 그리하시며, 눈물로 세월을 보내시다가 환갑을 지내시고 세상을 버리셨으며, 어머니께서는 73살에 사망하시었습니다.

아버지와 오빠께서는 근 8~9년을 두 분이 탄광에서 일하셨으며 알뜰살뜰 아끼시어 저금만 하시고, 자기머리도 민경을 보시고 자기손으로 깎으시었고, 그 많은 돈이 미쓰비시탄광 우편국에 저금 다 하시고 한번도 내려쓰지 않았으니 그 돈의 수치는 말할 수 없이 많았겠지요.

돈은 둘째 문제고 하나있는 아들하고 이별하고 얼마나 애가 탔으며, 가슴이 아프셨으면 심장병으로 고생하시다가 1957년에 사망하시었습니다.

옷갈피에 싸서 놓아둔 저금통장도 난리바람에 다 잊어버리고 피난을 갔다오니 집에 있던 살림살이는 옷이고 그릇이고 아무것도 없이 다 누가 가져갔는지 없었고, 만약에 저금통장이라도 있어서 내가 찾아서 쓰게 되면 돌아가신 혼이라도 기뻐하시겠는데 하고 생각하다가도 그 돈이 무엇인가? 하나있는 오빠도 돌아가시는 것을 보지못하였는데! 참 우리 오빠는 남과같이 장가도 못가고 세상버리시었으니 참 안타까운 생각을 어디다가 말할 수 없습니다.

1991년도에 막내딸을 데리고 한국에 나가서 충청도 아저씨집에 가니 아저씨께서 자세히 다 말씀하시어 알았으며, 일본 오다루에서 고생하시다가 서울에 나가서 고모네집에 계시며, 약국에 들어가서 일하시다가 병환이 나서서 충청도 아저씨께서 충청도의 아저씨집으로 데려가시어 구원하셨으나 그때만해도 폐병을 고치지 못하여 그만 보고싶은 어머니, 아버지, 동생들을 만나보지 못하고 세상을 버리셨으니 그 목숨 떨어지기 전, 그 순간에 얼마나 마음이 아팠겠는가? 참 불쌍하기 짝이없고 꿈에라도 보고싶으나 한 번도 아니보이니 참 어찌 그리 냉정한가 혼자서 이런 생각을 해보지만 아무 소용이 없겠지요.

그리하여 오빠하고 이별한지 46년만에 오빠의 사실을 잘 알고 왔어요.

지금 저는 69살이며, 출가하여 자녀 4명과 살다가 근 21년째 남편하고 이별하고, 그 후 혼자서 자식들 다 출가시키고 지금 아이들이 방 한칸을 사주어 아파트집에서 혼자 살고 있는데 올 1월에 큰 아들이 병으로 고생하다가 세상을 버리게되니 모든 것이 꿈만같고 생활이 복잡하게 되니 한국에 나갈까하고 신청하였는데 언제나 나가게 될런지요?

나의 밑에 동생 圭植(규식)이도 아이들 5형제가 다 사방으로 헤어져서 살고 남편도 사망한지 오래되어 혼자 살고 있으며 저 사는 곳에서 6시간 가는 곳에 살고 있어 만나기가 드뭅니다. 그리고 그 다음 동생은 세상버린지 18년째되며 형제라고는 圭植(규식) 동생 하나 뿐입니다.

그리고 저의 이름이 동생 이름과 같이 되어 여권에 李圭植(이규식)으로 동생과 같이 할 수 없이 그대로 쓰고 있으나 저의 이름은 李圭淑(이규숙)이올시다.

그러면 여러분들 안녕히 계세요!

아버지의 성함은 이만영, 어머니의 성함은 남정남

## 우리 가족의 이런 운명은 비극이 아니겠습니까?

천명남 (여) 1938년생

나의 이름은 천명남입니다. 아버지 이름은 신학일, 일본 이름은 히라야마 입니다. 고향은 충청남도 논산입니다. 나의 아버지는 1941년에 식솔들과 함께 일본의 강제 징용으로 사할린에 끌려왔습니다.

그리고 1944년 전쟁시작전에 일본 초유로 데리고 갔습니다. 그 이후 우리들은 1990년까지 아버지에 대한 소식을 전혀 모르고 살아왔습니다. 아버지가 일본 징용으로 갔을 때 나의 오빠는 9살, 나는 7살, 여동생은 4살, 막내 남동생은 기어 다녔을때입니다. 어머니는 자녀들을 먹여 살리기 위하여 일하기 시작하였습니다. 그 당시 나는 기어다니는 남동생에게 젖을 먹이려 어머니가 일하시던 현장으로 데리고 다녔습니다. 그당시 어머니는 탄광에서 석탄을 구루마에 싣고 다니던 일을 하셨습니다.

그렇게 힘든 노동을 해도 자녀들을 먹여 살리기에는 부족하였습니다. 그러던 중에 어머니가 정신병을 앓게 되면서 자녀들은 남의 집에 뿔뿔이 흩어지게 되었습니다. 제일 먼저 내가 어머니의 품에서 떠나게 되었습니다. 하루는 나도 모르는 언니 한분이 찾아와 말하기를 먹을 것을 주며 이것 먹고 오늘밤 늦게까지 숨어있어라. 오늘 다른 사람들이 너를 데리고 갈것이다.

나는 그 언니가 시키는대로 했습니다. 그날밤 늦게 집에 들어가니 정말 아주머니와 아저씨가 앉아 계셨습니다. 결국엔 나는 그분들을 따라 남의 집에서 살게 되었습니다. 나의 동생들도 여러사람의 손에서 흩어져 자라났습니다. 오빠는 살기가 너무 어려워 자기 발로 남의 집에 들어가게 되었습니다.

우리가족의 이런 운명은 비극이 아니겠습니까? 이와 같은 비참한 운명에 처한 사람들은 우리형제들 뿐만 아닙니다. 우리와 같은 사람들이 많습니다. 그런데 유감스러운 것은 일본사람들이 말하기를 일본의 강제징용으로 사할린에 끌려와 고생하는 것은 모두가 똑같다고 말합니다.

나는 그렇게 생각하지 않습니다. 만일 우리 아버지가 우리들과 함께 계셨더라면 우리 형제들이 흩어져서 제각기 남의 성을 가지고 고생하면서 살았겠습니까? 그러나 이곳에 아버지와 함께 살고 남아있던 자녀들은 아무리 어려운 환경에서도 아버지 품에서 자라나지 않습니까?

사할린 우리동포의 비극은 일본 군국주의의 결과이기 때문에 일본은 끝까지 책임을 져 보상을 해야한다고 보며 또 그것을 요구합니다.

## 나의 지나간 역사

김논주 (여) 1921년생

나의 지나간 역사를 여러분께 이야기하고 싶습니다. 나의 나이 열아홉살에 화태(현 사할린)로 시집을 왔습니다. 시집 온 6년만에 (44년도 8월달) 일본사람이 남편을 강제모집으로 구주로 데리고 갔습니다. 그런데 어린 나에게는 이미 두명의 아이가 있었고 셋째는 임신 5개월 중이었습니다. 남편이 돌아가시고 6달만인 1945년 삼월 초하룻날 유복녀가 태어났습니다.

그 해는 눈도 많이 오고 날씨도 매우 추웠습니다. 산모가 출산하자마자 눈 치우고 찬물로 일을 해서 온몸이 아파 죽도록 고생한 것을 누구한테 하소연 다하겠습니까?

일본 사람들을 생각하면 분하기가 말할 수가 없습니다. 남편이 가고 일년까지는 회사에서 배급 타먹을 만큼 돈이 나왔습니다. 해방이 된 후에는 돈 한푼 안주고 모질게 추운 땅에서 어린여자가 어린아이들을 데리고 어떻게 살아가라고...

일본 사람들 양심을 생각하면 분한 말을 어떻게 다하겠습니까?

해방되는 해 나는 26세의 어린 나이였습니다. 그런데 일본 말도 모르고, 러시아 말도 모르고, 어린 아이 셋을 데리고 남편이 올때만 기다리면서 울면서 살았습니다. 남편의 소식은 멀어지고 한해, 두해 지나가니 일본 사람들은 자기 사람들을 하나도 빠짐없이 데리고 가면서 조선사람은 몰라라 해서 얼마나 분했는지 모릅니다. 우리 아이들은 옷이 없어서 추운 곳에서 동상까지 걸리면서 컸습니다. 너무 추운 곳에서 자라서 그런지 온 몸이 아프다 하니 어미 가슴에는 피가 맺칩니다. 나도 지난 세월동안 모진 고생을 한 덕택에 온 전신이 다 아픕니다. 허리도 몇년 전부터 아파서 걸을 걷기가 어렵습니다.

지금은 내 나이 81살입니다. 일본국에서 내 남편을 데려가 고된 노동을 시켜서 일본국을 많이 도와 주었으니 이 추운 땅에서 그 사람들의 가족이 어린 아이들을 데리고 모진 고생을 하고 살았으니 손해 배상을 당연히 해주어야 될 것입니다.

꽃같은 청춘에 남편 잃고 어린 자식을 데리고 서러움에 살아왔습니다. 나의 나이 81살, 내가 죽기 전에 빨리 손해배상을 해주라고 강력하게 요구합니다.

부끄럽습니다. 붓대를 안들다가 쓰러하니 쓸수가 없습니다. 나의 이름은 김논주

## 생명은 제일 중한 것이다.

전세계 인류사회에서 나치독일이 큰 악행을 저질러 놓은 것은 사실이다. 그러나 일본제국주의도 우리 한인 동포들에게 적지 않은 악행을 오늘까지도 남겨 놓은데 대해서 말하고 싶다.

첫째로, 제2차 세계대전때에 조선에서 젊은 청년들을 강제징용으로, 강제모집으로 화태(현 사할린주)에 끌어들였으며 그것도 모자라 일본 정부는 제 2차 세계대전이 끝날 무렵에 우리 동포들을 큐슈로 이송징용으로 끌고와 지금에 와서 그분들의 간곳 뿐만 아니라 흔적마저 없애버리고 모른단 말이 무엇이냐.

둘째로, "나이브찌"(비코프)탄광에 자리잡았던 탄부합숙 "신와료"에 대한 사실이다.

새벽 일찍이 깨어난 탄부들은 조반이라고 한술 얻어먹고, 굴안에 들어가 온종일 힘겨운 일을 하고 저녁에 탄광에서 나오면 옷은 다 젖었고 갈아입을려해도 갈아입을 옷도 없거니와 배가죽이 등에 붙은 채로 빨리 합숙에가 콩밥에다 파리가 쉬도 쓸지 못할 정도로 찢고 찢 칭어 삶은 국을 마시곤 하였으며 그것마저 양대로 먹지 못하였고 이부자리란 것은 쌀포대를 뜯은 거적이었다.

탄광에서 일을 하다가 부상을 당하여 병원치료를 받아야 할 경우, 돈이 문제인데 돈 말만 하면 "조선에 있는 너의 부모에게 다 부쳐 주었다" 하였는데 사실은 한푼도 부쳐주지 않았던 것이다. 약이라도 구해먹어야 될 형편인데 약이란 것은 굶는 것이 약이었으며 날이 갈수록 상처는 커지고 극도로 쇠약해 몸은 깔고 자던 거적에 뿔뿔 썩여 갈 곳은 하나인, 패묵하나 없이 사시사철 얼고 있는 "미호"골짜기에 묻힌 조선 탄부들의 숫자는 손가락이 모자라 헤아릴 수 없었던 것이다. 이렇게 일본제국주의는 조선사람을 착취, 압박속에서 생각도 인식도 못 할 고생 결과 생명까지 빼앗아간 것이다.

셋째로, 유즈노사할린스크-홉스크간 철도부설에서 일본 사람들은 조선 노동자들을 부려먹었으며 그것을 "호신센"이라 불렀다. 이 "호신센" 침묵마다에는 조선노동자의 시체가 누워있다는 것도 사실이다.

이 사실을 말해 주신 분은 내가 아는 아저씨인 전라남도 출신의 김씨이다. 며칠동안 계속하여 비가 내려 강물이 불어나 흙탕물이 되어 내려갈 때 그는 두관잡고 높은 다리건설장에서 떨어졌던 것이다. 명이 길어



▶ 냉정한 일본총영사관에서는 아무런 반응이 없었다. 그러나 노인들은 보다 더 적극적으로 일본에 책임을 추궁할 것을 결의하였다. 대모에서 발언하는 노인들의 모습 (이예식기자 촬영) 생명은 제일 중한 것이다.

살아났다. 결국 고향 찾아갈 욕심으로 시도하다가 구소련 정부에 반역자로 몰려 이르쿠츠크 추나 감옥에서 세상을 떠났다. 이것이 다 누구 탓인가? 이렇게 조선사람의 생명을 빼앗아 일본은 강국의 토대를 닦은 것이다. 오늘에 와서 일본정부는 사할린에 남은 조선 사람에게 하루속히 배상을 해주어야 한다. 생명을 빼앗긴 분들은 우리의 조상이다.

루고워에  
연금자 정택홍



# 내가 살아있는 동안 일본에 손해배상을 요구하겠다.

마카로브시 한인회장 김태용



50세의 김상호씨

이미 보도된 바와 같이 2001년 11월 유즈노사할린스크주재 일본 총영사관앞에서 일제 시대 강제징용 보상에 대한 일본정부의 무성의한 태도에 항의하여 사할린한인동포들이 데모를 벌였었다. 이 데모에 마카로브 한인동포들도 참가했는데 그들 중 이전 일본 국적을 갖고 있던 1세노인 김상호(카네타 쇼코)씨도 있었다. 김상호 노인은 먼 45년 16살되던 해에 일본이 어머니·형제들과 강제로 생이별시킨 그 비극에 대해, 수십년이 지난 후 다른나라에서 어머니 동생들과 재회한데 대해 심장에 아픔을 갖고 그날 데모 참가자들에게 이야기했다.

“어머니”- 이 말마디는 가장 귀중한 말마디이다. 어린애가 제일 먼저 배우는 말마디가 “어머니”이다. 어머니는 이 세상에서 제일 귀중한 분이다. 어머니는 생이며 행복이며 기둥이다. 각자는 자기 어머니가 제일 선하시고 세상에서 둘도 없는 어머니라고 여긴다. 1945년에 어머니와 생이별시킨 일본에 대해 생각할 땐 김상호씨의 가슴은 찢어지듯 아파한다.

역사적 사변에 따라 김상호씨의 부모는 남부 사할린에 이주해왔으며 1930년 마카로브(시리토리)에서 멀지 않는 포레치예(엔코탄)촌에서 쇼코(상호)가 태어났다. 상호가 7개월 됐을 때 부모들은 자녀들을 데리고 포로나이스크(시즈카)시로 이사했다. 김상호씨의 부친은 돈벌이 하러 일본인 고용주가 시키는 대로 여러 도시들에 출장나가 일을 했다. 때문에 가사·자녀교육은 어머니의 어깨에 올려 있었다.

일본인들은 한인들을 업신여겼으며 한인들을 하층계급으로 취급했다. 혹시 시 행정부가 일본인과 한인들에게 같은 대우를 해주면 일본인들이 가만 있지 않았다. 행정부가 1945년에 한번은 포로나이스크 시민들 모두에게 채소를 똑같이 나누어 주었다. 심술궂은 일본 사나이가 채소를 많이 안아쥐고 있는 상호의 어머니를 갑자기 힘껏 밀쳐버렸다. 상호의 어머니는 흉탕에 앉어졌다. 그 후 어머니는 유산까지 했다. 1945년 8월 전쟁에 지게 된 일본은 총을 쥐고 싸울 수 있는 남자와 젊음만 남겨놓고 여자·어린이·노인들을 섬의 남쪽으로 수송했으며 다음 일본으로 급히 실어보내기 시작했다. 붉은 군대를 이겨내지 못한 일본인들은 모든 것을 태워버렸다. 상호가 어린시절에 살던 집도 타버렸다.

일본에 의해 사할린에 남은 상호(16세)는 어머니의 예쁜 얼굴, 생이별하면서 눈물 흘리던 어머니의 모습을 잊어본 적이 없다. 전쟁이 끝난 후 어머니, 형제들을 찾아 끌어안고 싶을 마음 간절했다.

김상호씨의 어머니는 1945년 말아들과 갈라지고 일본에 갔다가 한국 강원도로 귀국했다. 활동력이 강한 어머니는 말아들을 찾으려고 많은 공식기관들에 편지를 써보내곤 했다. 1974년에 일본을 경유하여 포로나이스크시에 어머니의 편지가 와 있었다. 그러나 수신인(받을 사람)을 찾지 못해 그 편지가 포로나이스크시에 오래 있었다 한다. 전쟁후 김상호는 마카로브시에 살게 됐다. 포로나이스크 한 시민이 김상호가 마카로브에 산다는 걸 알고 거기로 편지를 보내주었다. 한없이 기뻐했다. 그러나 그 당시 한국을 방문한다는 것 불가능했다. 가슴이 불타오르듯 했다. 그 당시 그는 울기도 많이 했고 잠도 이루지 못했다. 40년대말에 또 50년대 초기에 사할린을 떠나려고 시도해보았으나 성공하지 못했던 것이다. 단지 구소련 페레스트로이카에 의해 1990년에 김상호씨는 한국을 방문하고 친척들을 만나보았다. 근 반세기동안 지니고 있던 그 어머니 모습을 보려던 김상호씨는 고령하신 어머니와 재회했다. 그런데 어머니는 아들을 알아보지 못했다. 사라져가는 어머니의 몸에는 “상호”이름만이 남아 있었다. 정신 잃고 누워 계시는 어머니는 “상호”이름만 불렀다 한다. 상호씨가 강원도를 갔다온 뒤 1991년 8월에 어머니는 세상을 떠났다.

형제들은 자녀·손자들을 보고 잘 지내고 있다. 어머니가 준 생이 이어지고 있었던 것이다. 전사할린 한인동포들에게, 김상호 노인에게 정신적 및 물질적 손해를 입힌 일본은 오랜 세월이 흘렀으나 책임을 지고 배상해야 한다. “내가 살아있는 동안에는, 맥박이 치는 동안에는 일본으로부터 손해배상을 받아내기 위해 적극 투쟁하겠습니다.”라고 마카로브시민 김상호씨가 확언하고 있다.

“여러분들 어떤일이 있더라도 이별하지 말고 친절하게 행복하게 사십시오”라고 괴로움과 어려움을 겪은 1세 노인 대표인 김상호씨가 말하였다.  
우리는 그분의 말씀을 공경하는 마음으로 들어야 할 것이다.

# 우리는 언제 영주귀국할 수 있는가?

사할린 한인 동포들의 요구는 무엇인가? 일본·한국·러시아·미국등 세계에서 잘 알고 있다.

일본은 더 말할 것도 없다. 사할린에 1세 한인 동포들은 강제로 끌려온 장본인은 누구인가? 군국주의 일본이다. 왜 이것을 일본이 인정하지 않는가? 전세계에서 잘 알고 있는데, 일본은 사할린 1세 한인 노인들앞에서 큰 죄를 짓고 있다는 것을 인정하고 노인들에게 정신적 및 물질적 보상을 해야 한다. 그런데 일본이 사할린 한인들의 요구를 실행하도록 사할린주 한인노인회·주한인회는 무엇을 하는가? 어째서 주한인사회단체위원들의 목소리가 잠잠해졌는가? 사할린 한인들의 일시모국방문도 계속하도록 계속 추진해 나가야 한다.

일시모국방문 횟수를 줄인다는 것은 옳지 못하다. 1945년 출신까지 사할린 한인 동포들이 매해 한국을 무료 방문하도록 일본이 책임을 져야 한다.

영주귀국문제도 해결해야 한다. 아직 수많은 동포들이 영주 귀국하려고 주 이산가족회에 등록해놓고 기다리고 있다. 언제까지 기다려야 하겠는가?

우리 한인들의 요구를 강하게 과시하기 위해 주중앙도시주재 일본 총영사관 앞에서 또 집회를 소집하자고 나는 제기하고 싶다.

유즈노사할린스크시에서 연금자 김순자.

# 일본은 손해배상을 꼭 해야 한다.

아버지 하인준씨는 1915년 음력 6월 30일생, 삼촌 하인도, 하해도 세명이 일본 강제징용으로 사할린으로 왔습니다. 토로(샤호초르스크)탄산 미쯔비시 회사에서 일했습니다. 토로에서 일하다가 일본 큐슈로 이종징용돼 왔습니다. 1944년도 10월달이



었습니다. 사할린에 어머니, 할머니, 고모 세명이 남아 고생하고 있었습니다. 아버지가 나가시고 1945년 4월달에 어머니는 딸을 낳았습니다. 어린아이를 먹이지 못해 생살을 씹어 물에 타서 먹이곤 했습니다.

그러다가 1개월반만에 죽었습니다. 해방 후 1945년 10월에 아버지는 어머니와 할머니, 고모를 찾으려고, 사할린으로 왔습니다. 아버지, 야수다상(안갑덕), 오까다상과 에노모도상 4명이 밀선을 타고 왔습니다.

그날부터 가족을 데리고 나가신다고 하다가 돌아가시는 날까지 못 갔습니다.

1988년 한국으로 오라는 초청을 받고 그 이틀후 9월 29일에 사망하셨습니다. 아버지는 “한국, 한국”하다가 원통하게 돌아가셨습니다.

이 역사가 참 길고 긴 역사입니다. 삼촌 두분은 해방된 다음에 일본에서 헤어져 지금까지 소식이 없습니다.

어머니 하옥수씨는 1925년 음력 12월 28일생이며, 고향은 경상남도 양산군면 남부동이고 아버지 하인준씨의 고향은 경상남도 김해 진영입니다.

큐슈 탄광에서 몇 십리 되는 곳에서 석탄을 파서 울리고 했답니다.

이렇게 정신적 및 육체적 손해를 본 우리 아버지를 비롯한 전체 사할린 1세 노인들에게 일본은 꼭 손해배상을 해야 할 것입니다.

장남 하경수 올림  
 (“한인이종징용광부유가족 회보”에서)

## 오세욱(남) 1929년생



오세욱씨 어머니

아버지와 함께 연행되었고 지금도 사흐쵸르스크에서 거주하고 있습니다.

그 때 그 무렵 일본시대때는 이곳을 도로마찌라 했습니다. 이곳에는 3탄광이 있었고 하나는 현재 우글레고르스카이사흐라는 일본시대때는 미쓰비시탄광이라 했습니다. 또 하나는 가네보 탄광 또 하나는 하꾸조자와 탄광인데 1944년도 우리 아버지들이 구주로 징용갈 무렵에는 다이니타이헤이 탄광으로 개명되었습니다. 우리 아버지는 1941년 경에 하꾸조자와 탄광으로 모집되었고 우리는 어머니와 함께 1942년 7월경에 아버지를 따라 아버지가 근무하시는 하꾸조자와 탄광으로 연행되었습니다. 이 무렵 우리식구는 아버지를 비롯하여 모두 7명의 식솔이었습니다. 그 때는 우리나라가 없었고 일본 제국주의자들의 식민지 통치하에 있었습니다. 그 때 우리 조선인들을 내선 일체라 하면서 곧 (내선일체는 일본본국을 내지라 해서 내라 하고 조선을 선이라 해서 내선일체라 했고 일체는 한 몸이라 해서 일본과 조선은 한몸이다-한 덩어리다 란 뜻입니다.) 우리들의 이름도 다 일본식으로 개명되었습니다. 그 뿐만 아니라 우리 학생들은 혹 조선말을 쓰게 되면 국어인 일본어 시험에서 일점을 잃게 됩니다.

이렇게 온갖 허물과 멸시를 받은 중에 고국에서 살지 못하고 이 차고 찬 곳으로 연행되었던 것입니다. 우리가 이곳으로 오고자 할 그 무렵 사람들은 말했습니다. "가지말라. 그 곳은 살지 못할 곳이다. 꿈들이 산에 나오는 무서운 곳이다. 한때 굶더라도 이

나도 일본 제국주의자들의 만행으로 이 사할린에 잔류된 한 사람으로 이 글을 쓰게 된 기회가 되어서 반갑습니다. 나의 고향은 경남 거창이고 이름은 오세욱입니다. 거주는 사흐쵸르스크 31입니다. 나는 1942년도에 사흐쵸르스크 하꾸조자와 탄광으로

곳에 사는 것이 낫다" 했습니다. 그러나 우리는 이곳으로 왔습니다. 이 곳에 온 지 3년이 되는 해 1944년에는 또 우리에게 큰 풍파가 밀려왔습니다. 그러나 우리 아버지들은 이름있는 후방 생산 전사의 명예로 운전상을 받았습니다. 우리 집에서는 그해 1944년 12월 22일 더 큰 불행으로 산이 무너지고 하늘이 집위에 떨어진 지경이 되었습니다. 직장 책임자들이 직장안전장치를 잘못하여 낙반으로 우리 아버지께서는 이 세상을 떠나시고 말았습니다. 참으로 앞이 캄캄하고 정신이 혼미된 지경이었습니다. 그 때 당한 슬픔과 애통은 무엇으로 표현하겠습니까. 참으로 가련하고 신세가 막막한 우리 식솔이 되어 버렸습니다. 그 때는 대동아 전쟁 중 최고 시점이었습니다. 보통이 아닌 비상시였습니다. 그래서 탄산에 남은 높은 관계자들이 여러가지로 권한에 따라 우리 가족 일동은 다 남게 되었습니다. 그러자 일년이 채 되지 못해 1945년에는 소련군이 사할린을 점령하게 되었던 것입니다. 그 후 우리는 오늘날과 같이 사할린에 잔류자가 되어 아직까지 고국도 가지 못한채 이 지경에 빠진 것은 일본인들의 잘못된 줄 믿습니다.

나라도 빼앗고 식민지 관할에 있던 내선일체 조선인은 아비마져 빼앗아 또 이 곳에 남긴 우리 어머니들과 어린 아이들은 아비없는 고아를 만들어 무국자의 신세가 되게 한 자는 일본인이 아니고 누구인가?

실로 우리 잔류된 한인들은 소련 공산정치로부터도 많은 고통과 멸시를 받아왔습니다. 때때로 고르바초프 전 소련 수상님이 고맙게 여겨줍니다. 그분의 빼레스토포이카가 없었더라면 우리 한인들의 대부분의 신세는 우물 안에 든 개구리 신세로 남아 있을 것입니다. 쓸 것은 아직 태산이나 괴로워서 쓰기도 싫습니다. 일본인 천만민에게 호소합니다. 일본시대때 우리가족이 8명이었는데 이제 남은 것은 나 혼자 뿐일세.

나도 나이 70이 넘어 80에 접어든 나의 여생이야말로 얼마나 되리요. 바라건데 그리움던 우리 조국에서 근심없이 보내게 하고 우리자녀 5남매가 다시는 이산가족이 되지 않게 도와달라.

2002년 1월 오세욱 씀

## 김종택 1934년생

고향 경북 경상군 진양면 신문동



어머니 리봉식

리가 이산가족이 되어 살아야 되는가? 어쩌서 가족이 행복하고 화목하게 살지 못하는가? 이러한 인권을 누가 우리에게서 빼앗아갔는가? 우리들은 오늘날까지 이산가족입니다. 나

는 이산가족이라는 말만 들으면 머리카락이 하늘로 치솟습니다. 그리고 근 47년간 아버지 소식을 모르는데 1989년에 KBC라디오 방송을 통해 소식을 알게 되었습니다. 아버지, 형님과 작별할 때에는 10살이었는데 이제는 늙은 노인이 되었습니다. 이렇게 된 우리의 운명에 대해서 누가 책임을 지어야 합니까? 존경하는 여러분. 이것은 꼭 일본 정부에서 책임져야 하며 우리같은 운명에 대해서는 일본 정부가 정신적, 물질적 손해 배상을 주어야 하며 사할린에 잔류된 한인들 1945년 15일생까지는 일본정부에서 보상을 해 줄것을 나는 요구합니다.

존경하는 한인 이중징용 광부 유가족 회장 서정길 씨를 비롯하여 회원 정태식씨, 기타 회원 여러분! 불쌍하고 비극적인 사할린 잔류 한인들의 문제를 하루빨리 성과 있게 해결해 주시기를 바랍니다.

사흐쵸르스크에서 연금자 김종택

존경하는 여러분 나도 이중징용된 피해자의 한 자손입니다. 나는 아버지가 1939년에 어떻게 모 집되어 나오셨는지 잘 기억할 수 없습니다. 일제시대 그 당시에는 아버지와 두 형님은 하꾸조자와탄광에서 일을 하고 있었습니다. 1944년 8월에 아버지와 두 형님들은 후쿠오카현 가호군 가즈라자와마찌히라야마로 징용 되었습니다. 아버지 연세는 48세, 큰 형님은 20세, 작은 형님은 17세 어린 나이 였습니다. 우리 형제는 모두 다 7남매인데 어린 5남매를 두고 누님 12살 나는 10살 여동생 6살 남동생 3살 막내동생은 아버지 징용간 후 두달지나 태어났습니다. 아버지와 형님 다 같이 있을때에는 배고픈줄 모르고 학교도 다니며 가정에 웃음소리도 나오고 했는데 전후 1945년부터 시작해 가정이 곤란하게 되어 어머니는 일하기 시작하였습니다. 그러나 어머니 수입으로는 가정 생활이 곤란 하였습니다. 학교를 갔다오면 배고파 슬픈 눈물만 나오고 죽지 못해 생명만 붙여나갔습니다. 우리들의 고생은 말할 수도 없습니다. 그리고 어머니는 아버지 형님들 나오시는 날 짜만 기다렸으나 결국 돌아오지를 못하고 말았습니다. 세월이 흘러 아버지 형님 소식도 못듣고 1984년에 어머니는 이 세상을 불쌍하게 떠났습니다. 이렇게 고생한 비극을 누구에게 다 말할 수 있는가? 일본 국민들도 알아야 합니다. 어쩌서 우

## 강정순(여) 1933년생

전라남도 승주군 황전면 월산리 성암  
오빠 미혼 강군옥 24년생

철필을 들고 보니 가슴이 떨려서 무슨 말을 먼저 써야 하는지 이해가 되지 않습니다. 저는 아버지가 안계시는 바람에 공부도 못했습니다. 그래서 제가 지내온 역사를 쓰는 것에 대해서 부족함이 많습니다. 이 글을 읽으시는 분들은 양해해 주십시오.

우리 아버지와 오빠는 이중 징용으로 일본 큐슈 탄광으로 가셨습니다. 해방전에는 돈이 좀 왔습니다. 석탄도 좀 주었습니다. 그러다가 해방후에는 그 누구도 우리들을 도와주는 사람이 없었습니다. 우리 식구는 어머니, 저 12살(여) 동생 8살(남)과 동생 5살(남) 4명이었습니다. 그 때는 일자리도 없었습니다. 우리에게서 적은 밥 한때기 밖에는 없었습니다. 그래서 우리들은 감자하고 산에 풀을 뜯어 먹거나 때로는 러시아 사람들이 검정콩 반덩어리씩을 주었는데 러시아 사람 5명을 준 다음에 한인 1명에게 주었습니다. 그 빵도 밤에 자지 않고 줄을 서야 하는데 그래도 차례가 안될 때가 많았습니다. 그러던 어느날 우리 어머니가 청소부에 들어가서 일을 하시게 되었습니다. 그래서 조금 타는 금액으로 우리 생명을



강정순이 어머니와 함께

이어나왔습니다. 저는 하나님 아버지에게 항상 감사드립니다. 우리들을 지켜주시고 보호해주시고 우리들의 생명주심을 감사드립니다. 우리들은 옷도 헐벗었으며 신발도 없어서 동상에도 불구하고 일본 계다라는 신발을 신었고 고무장화도 없었습니다. 계다를 신고 학교에 갔다오다가 저는 계다 끈이 떨어져서 집에 벗은 발로 뛰어왔습니다. 지내온 역사를 쓰라하니 눈물이 앞을 가려 글을 잘 쓰지 못하겠습니다. 제가 거짓말인지 그 때 생활해온 분들은 그때 일이 다 기억될 것입니다. 우리집은 도로 하꾸쯔사와에 있었습니다. 거기는 산위기 때문에 바람이 너무도 심해 겨울에는 영하 40도 35도였을 때가 많았습니다. 일본 나가야 집에 살아 보신분은 아실 것입니다. 우리집에서는 항상 탄도 쪼터다가 해야 했습니다. 룩크사쿠로 쪼터오는 어린이의 힘으로나마 어머니를 돕기 위해서 같이 하였습니다. 겨울에는 항상 집이 추웠습니다. 그때는 우리집만 그런 것이 아니라 아

버지나 오빠들께서 이중징용가신 가족들은 다 매한가지였습니다. 저는 공부도 못했고 기술도 없었기 때문에 일은 17년을 하였어도 월급은 220원밖에 못받았습니다. 그것 가지고 지금 생활에서 사용하자니 정말 바쁩니다. 아버지가 안계시는 바람에 우리들은 오늘날까지 이렇게 고생이 많습니다. 그것이 다 누구 탓일까요. 일본사람 탓입니다. 1945년 전쟁이 났을때 도로 하꾸쯔사와 우리집에서 길을 떠났습니다. 일본 사람들이 말하기를 빨리 가는 사람들이 배를 타고 일본으로 나간다고 하였기 때문에 우리들은 힘을 다하여 밤이나 낮이나 걸었습니다. 우리들은 어

머니를 의지하고 저는 12살(여), 동생 8살(남) 이렇게 네 식구가 가는데 가다가 폭탄 떨어지는 소리가 나 우리들은 네명이 다 같이 목을 끌어안고 우리 죽어도 같이 죽자며 울며 불며 밤이나 낮이나 걸을 때 굶을 때도 많았고 아픈 데도 많았습니다. 그래도 참고 견뎌가며 구신나이 일인쓰크까지 갔습니다. 일본 사람들이 말하였습니다. 오도마리 꼬르싸 꼬부 거기까지 가야만 배를 탄다고 하였습니다. 그러나 우리들은 때가 늦었습니다. 그 때는 일본 사람들이 항복하고 러시아 군대들이 일인쓰크 해변가에 꼭 차 있었습니다. 우리들은 또 다시 우리가 살던 곳 도로 하꾸쯔사와로 돌아와야 하였습니다. 왜냐 하면 일본 사람들이 말하였습니다. 다들 자기집으로 돌아가라고 하였습니다. 할말은 태산 같으나 눈물이 앞을 가려 이만 줄이겠습니다.

### 이중징용사회분들에게

#### 친애하는 여러분들

서면으로서 여러분들에게 인사드리게 된 것을 저는 기쁘게 생각합니다. 여러분들께서 우리 이중징용유가족분들을 위하여 수고해주심을 감사드립니다. 우리들은 힘을 합해서 끝까지 투쟁해 나갈시다. 여러분들 중에서 어떤 이들은 자기 금일봉까지 사용하시고 우리 이중 가족들에게 봉사해 주심을 감사드립니다. 언제나 건강하시고 이 일이 성공될 때까지 힘써 주시기를 감사합니다.

## 아버지의 생사와 행방을 확인할 것을 요구함

황기연(여) 1935년생

저는 1935년 9월 3일날 태어난 황기연입니다. 아버지가 대구에 불일 보러 가셨다가 불들려 화재란 곳에 끌려갔습니다. 1943년도에 집에도 오시지 못하시고 징용으로 끌려 갔습니다. 제가 2살때 어머니는 아버지의 증명을 받고 화재(지금의 사할린)란 이 곳에 1943년도에 왔습니다.

일년 후에 다시 1944년 9월에 징용으로 큐슈로 끌려갔습니다. 아버님을 전송하실 때 일본 반장이 큐슈 초요로 징용가신다고 하였습니다. 저는 조선 고향땅에서 와 일본말을 모르고 해서 일년 동안 학교도 못가고 아버님을 매 주일 아침에 사무실까지 전송하였습니다. 어머니는 새탄 발전소에서 일하였습니다. 1956년 8월 초에 전쟁이 심하다 하면서 미쯔비시에 사는 주민들을 모두 다 더러 피한 사람들도 있었지만 대부분 모두가 저녁 때 미쯔비시 탄광에 피했습니다. 그때 저는 처음으로 아버님이 탄광에서 주무시던 자리를 제 눈으로 보았습니다. 아침에 모두 다른 곳으로 피해야 한다면 나오니 탄광문 앞에 다이내마이트를 문의 절반 이상 쌓아 놓고 있었습니다. 그것을 누가 하였는가 하면 미쯔부시 광장이 전쟁에 졌다 하면서 주민들을 다 몰살시키고 자기 처도 우리들과 같이 있었는데 부인은 집에 데리고 가고 우리들을 폭파시킨 후 자기도 자살하겠다고 했답니다.

그것을 누가 발견하였는가 하면 반장입니다.

그분이 에스로르지청에 알려서 우리들을 살렸습니다. 그 후 세월이 흘러 1959년도에 이북에서와 선전하기를 일본에서 제일 동포들이 많이 귀국하였다 하면서 소련에 사는 동포들도 귀국했다는 선전이었습니다. 그 때 어머니가 말씀하시기를 아버지는 돈이 없어 우리를 못 찾는다라고 하였고 우리가 가서 아버님을 찾아서 고향땅에 가신다고 하시면서 저 하나를 두고 1962년 2월 25일 이북으로 떠났습니다.

세월은 흘러 아버님도 못 찾으시고 나머지 동생들은 다 죽고 유복자 동생 한명이 살자 어머니는 1999년 2월 10일에 세상을 떠났습니다. 저의 원은 다름이 아니라 일본 큐슈, 아버님이 계시는 곳을 찾아보는 것입니다.

일본 정부 수상님께 부탁을 올립니다. 부친 성명은 황덕부입니다. 아버지의 생사 여부를 모릅니다. 일본 정부는 반드시 아버지의 행방여하에 대하여 조사하여 주시면 감사하겠습니다.

(“한인 이중징용광부 피해자 유가족 회보” 책에서)



# 김 순기 (여) 1935년생

## 二重強制徴用連行者の子 金順起 (1935年生)

「わたしは、もう二度と逢えぬだろう!!」と道片のホフウの木の下に裸足で座ったまゝ、両手で地面を打ちながら泣いて居たお祖父さま、故郷に後にて、母の手を取り、一年前に樺太へ行った父を留める爲に旅路に立った当時の私は、うれしくてたまふ無かつた。

釜山港では綿の様な雪が舞いながら何かに触ると溶けてしまふ頃で、汽車に乗り下りながら続く遠い旅路で、ホームのスピーカーで「東京ー、トウキョウー!」と聞える言葉が不思議に思えて、真似て言う度お母さまは、乗り物酔いで病人同様に横たえて居たお祖父さまに「子供で早ね、もう日本語を覚えなれ!」と言っていた。

何日過ぎたのか、到着した樺太鬼須取の港は遠い沖に大型船を停止せし、早朝から船(ヨリ)で港へと上陸させる様に居た。12月31日大晦日は、1941年度の余りにも寒い冬だった。

船から船に下りられた時吹雪の潮風に力づくで「(チマ) 被い包みながら、」寒いや!」と泣く私を力だめて下れた時の母もたどろろと震えて居た翌朝は1942年1月1日、客馬車に乗り、(鈴を鳴ら)ながら馬が引く早朝の中湯温泉に入つた。客と乗せた上から布団が掛けられた様になつた)父に逢えよう!と、途中で客馬車が軽やかに、私達は雪の路にホッとして放り出されたのも楽しかつた。初頃は、今日遠い夢の様!

当時父は北小沢の炭鉱で働いて居た。訪ねた飯場は、狭い六畳間に3人が寝泊りして居た。春4月の入学は北小沢の学校だが、日本語が出来ぬ私には、学校は何の楽しみも無かつた。

夏に父からは名好の増田炭鉱へ移住する事になり、学校は増田鷹取国民学校に転校した。入学に見ると大勢の半島人学生達か(当時、いたずらの子達の呼び捨て)居るのが目立つた。

此の学校からは成績も良くなり、先生からも可愛いかうれされた。

お友達も大勢出来ながら学校も楽しくなつて来た。

年が明り1943年の春には可愛く赤ちゃん、妹の明子が生れた。



아버지 정호완 들 정성태—생존 현 대구시 거주

父親(上)と鄭聖時

親を連れ(樺太へ行く前)

家族だけが、急に西樺丹を出発したと書かれていた。その家族たちは、敗戦の二日後に三井田川鉱業所に着いた。弟の手紙には、母親と子供だけで心細いから、九州の炭鉱へ行きたいと書いてあった。父親が労務課に行つて交渉したところ、戦況が悪化して無理だから、しばらく待つようになつた。樺太に返事を書けといわれた。炭鉱が軍需工場に指定されると、憲兵と特高が労務管理にまで口出しをして、家に来では休んでいる者を引きずり出した。労務事務所の前で、意図するなといつて殴る蹴るの暴行を加えた。「肺炎や風邪は病気のうづまきやな

方向を見失わないために、雪穴を開けてロープを渡し、それを伝つて通勤した。親子が出発する時、母親は出産したばかりで産後の肥立ちが悪く、まだ床に伏していた。一九四四年九月十日、夜明け前の五時に西樺丹をトラックで出発して、五時間後に鬼須取港に着いた。港で一日船待ちすると、親子たち百人は貨物船で函館に乘った。函館から青函連絡船に乘船すると、一週間後に福岡県田川市後藤寺にある第一坑朝鮮人寮に落ち着いた。父親は入坑して探炭、鄭聖時は函(炭車)を上げ降ろしする機械方の巻揚げに回された。父親とは勤務に不慣れはあったが、同じ寮といふことで心強かつたといふ。十六歳といふ体は大きくてもまだ子供、家族が恋しい年頃である。そのうち職場を第三坑の平原坑に回された。当然、寮も第三坑平原寮に変わらなければならぬ。「父と一緒にやないと嫌だ。第二坑へ戻してくれ」泣きながら労務係に頼んだ。「男の子がめめするな。お前は何歳だ?」「十六歳です」「お前、それで十六歳か? そう体だけは大きいのう。よし仕方がなかその労務係はぶつおついなから、鄭聖時の頼みを聞いてくれた。八、一五の直前、三坑下の弟から手紙が来た。二人が九州へ出発した後、朝鮮へ帰国を希望した十

時期は、何でもお国の為”と配給制度で何でもキツ”無”では買えぬ、食料は勿論、何も自由には買え無かつた。

父は夏になると山の荒地をおこして、じゃが芋”を植える頃は何時も私を一諸に連れ行つた。

朝5時から出勤する父は、よにれた作業服に着替へり、道具と弁当を入れたリュックを背負い、重”い”つ”は”を肩に負ひながら出掛りのなつた夕方の5時に帰つて来る父は何時見ても煙突から振り出た人の様に、真黒！笑うと白歯だけが見えた父は、玄関で出迎える私に、その日の受け取り書（3月60疋、3月70疋と示されて有つた）を手渡すと、早”ま”お風呂道具と着替の包みを持ち、共同風呂場へと出かけた。

休日には父は何時も私の手を取り映画に連れて行つた。お酒もタバコも知らぬ父を、近所の人々は皆、”手抱金山さん”とニツク”ネム”も。父が働いたお金も勿体無”い”からと、母は頭痛で”悩”みながら、時々家で内職もして居た（夕刈りを洗つて締め直す）

一家団らん”の”楽”い”生活は長く続か無かつた。

1944年の夏の日、仕事から帰つた父は何時もの様に風呂から帰つて来た家は入らずに出かけたので、私はず”う”から付いて行つた。

村の講堂館には大勢の大人達も、何やら不安にさむかしく話し合つた。演壇には長刀を下がた、背に警察官も座つて居た。

家に帰つた父は夕飯を囲みながら”九州へ徴用に行く事”に方々”事を話して下れた。

母は翌朝から父の出発準備に没中なつた；ご飯を乾燥したり、炒り豆を作つたり、衣料を包みたりして居る母は時々一人で泣いて居るとお父さんは”余り沢山包んで無”い！”2ヶ月過ぎたら帰つて来るのに、何も気落する！”と慰める言葉を私も信じて居た。

夜になると隣の金田萬吉さん（若い青年が飯場で”ひま”い”思”ひながら住人”3”りの”気の毒だ”と、父を仲人に立ち結婚させた人で1945年死”した”目で、父とは兄貴と呼んでた）が訪ねて来て、

”兄貴！逃げ”ま”い”は、一時身を引いて居たら徴用は免”れ”る”の”に”、”何”を”た”わ”け”て”！馬鹿な事言つた、日本人も、朝鮮人も皆片”端”に連れて行くんだぞ”、捕つたら”9”1”部屋か、監獄だぞ”！”憲兵や、警察か”昼夜見張つて居る”お前”には見えぬのか！”ほ”う”見”る、窓から”部屋の中”迄”覗”いて居る”無”い”か！”と、金田のお”い”さん”を叱る”ひま”い”話を、私は寝”て”居”る”川”を”向”いて”居”た。

名好には名好川沿いに一路線長く東から西の海へと伸びて居る鉄道は、此の川越しに増田と豊畑の2箇所の炭鉱からの石炭の運搬用だつた。鉄道終点の名好町も有り、土、日曜には、此の列車の後に付いて来れる箱型の”客車”も有つた。乗客の乗り下り場所の村の神社の前を”つ”た”ので、土、日曜には此の”客車”で名好町へ遊びに行つた。

お父さん達を連行する日は、神社の前も祭の様に賑やかだつた。手に日丸の小旗を持って走り廻つた子供達も、大勢の人々の話声も入り混つた処だつた。その中に私も、オ”ブ”た”妹”に日丸を持たせて当時、出征兵を見送つた時と同じく”天皇陛下萬歳！”と萬歳三唱を叫びながら見送つたお父さんの永遠の別れになるとは夢にも思わ無かつた！

増田炭鉱第4区8号舎も私達の住家”で”有る”一棟の長屋だつた。一棟長屋には5軒も住居様になつて居た；3軒は日本人、2軒は朝鮮人の金田さんと私の家で、今日からは”ど”の”家”も、お父さんとお兄さん達は居無”く、”只”女”子”供”、老”人”達”だ”け”の”住”居”に”な”つ”て”居”た。

その年はお正月に、九州のお父さんや兄さん達へ送る慰問小包を作”る”為”に隣組”で”（5軒）集”つ”て、一諸に撮”つ”た家族写真も同付た。食料難の”廠””時”だ”つ”た”け”れ”ど、な”る”べ”く食品を送つた。

翌年の春になつてもお父さんは帰らず、誰も帰つて来無”い”の”に”金田のお”い”さんは一人で帰るなり”に”、村から遠い”黒”川”村”の山奥の農家へと移住して農作業者になつた。

\*（私達の住んでた第4区には8棟の長屋が4棟づつ2列に並んでた）

その頃の学校は、学生達も；クギ拾い、空カ拾い、又は山菜取り  
やらで授業時間も少くなり、希に有った防空演習も、時には  
防空壕の中で夜を明かす様になった。

その頃の母は、男女の区別も(仕事)無く働きました。  
選炭場で働く日は、石炭を家に、農家で働く日は食べ物を、  
と、もう直に夫は帰って来る！の信念一つか、二人の子供には  
此の思いをさぞ教えた。

8月に入りなから、急に、名好町からは人々が増田村を  
通過したから山の方へ、奥地へと避難する様になったを見て、  
炭鉱村からも子供と老人だけは山へ避難！と命令が下り、  
お母さん達は村に残って焼夷弾で火災にならう消火作業が有る  
から子供達とは同行出来ぬ事になった  
間もなく金田のおじさんが遠い山奥から私達を連れ来て下れたか  
お母さんと離れては行かぬ！と、余りにも泣き喚くのにあきれた  
組長の本田のおじさんは、金田さんは子供達と一緒に行きな！  
と許しを得た。到馬車に乗せられて  
又時間も掛けて到着したおじさんの家は、その時初めて見た。  
此の農家に何人もの家族達が集った共同生活を始めたのだ。

ある朝、夜明けの空も暗いのに西の空が赤く見えた事が  
有ったから大人達は、何と不安な表情で、夜も寝ずに  
明かした事だった。その日の昼になつて日本は戦争で降伏した！  
あれほど一心に日本の勝利を信じた国民の前には敗戦の日本も有った。  
だがロシア人は人間では無い、恐ろしい残酷な事を平気で行うんだ！  
と言う噂に震えながら戻ってきた炭鉱村は、ロシア兵が周り放り  
下れたから、幾らでも自由に持って行け！と言われた倉庫には、米が  
山の様に所狭しと積んで有った！どれだけの鉱夫達は腹を減らさせられたから  
石炭を掘ったやら、母も力限りに一俵の米を背負って、頭を地面に  
付くほどになりながら泣いて居るのを私は見た、悔し涙か？、うれい涙か！

此の様には、又、元の家に戻って住む頃には、晩秋を迎える頃で、時には  
早くも時折、白い物が舞い降り始めた。

母は何時も昼間は家に居る時は無くなり、私は妹と二人で留守を  
する事が多くなり、時々学校も妹をオソグしたり、手をつないで  
学校へ行く事が多くなりなから学校の楽しみも無くなって来た。

その日も夕食の準備をして居る時、姉や一人、誰かのおばあちゃん  
来た！と叫ばれて玄関に出た私は、自分の目を疑った！  
内川炭鉱に住んで居るはずのお祖母さん(母の実家)の余りにもやめた  
見られる程に変わった容で、泣きながら入って来て妹を抱き上げた。  
その日から母と祖母と親子が涙で夜を明かす話を続けた；

敗戦の知らせと共に、ロシア人には手渡すな！皆、焼き捨てる！と  
警官や、青年団、軍服穿たの人達が、家々から住民を追い出した後から  
放火するの、或る人は何の大事な物を取ろうと家に向って走る後を  
追う長刀は、容赦無く斬り下された事、見て居る前で無惨に焼ける家！  
追い出された人々は我々もと汽車に乗り東本線を南へと、大泊港  
へ走ったとの状況が、悲惨な村から逃げながら、家族にはぐれた祖母を  
内川村と境が一番近い上敷岩村での虐殺事件などへの(朝鮮人川)  
残酷さを余りにも聞かされて目撃して歩いた祖母の目付は、以前の  
優しい目では無くなって居た。すっかり変わったお祖母さんになつて居た。  
11月になり又、お祖父さんが、家族とはぐれてさまよっていたあけ、  
私達の処へ戻ってきた。

父の父母両親を含め5人家族になった。戦後からの此の家は、母一人が  
働き手、母が背負う事になったのだ！

その後の炭鉱は閉鎖になり、日本人はボクし引き揚げが始り、  
なから私達一家は町へ移住する事になった。  
学校も鷹取で無いので、いやけを止めた。  
或る日、先生は、貴方達は昨日から別の学校で勉強する事にな  
りなした！と特に呼ばれて変わった学生達に言った。

その時、初めて「あゝ！ あつち朝鮮人だつたの？」と知った  
なつちも居た。

明日から通学する 学校は名好川を渡り向う側の豊畑炭鉱村に有った  
毎日の新しい学校生活は；「今日からは絶対に日本語使用は  
禁物だぞ！」と言われても、大勢の子供達は唾も同様に有った  
昨日迄、日本語が出来無かつた人達なのだ！ 先生に見付いたら  
自分の座の腰掛を持ち上げて教室の角に立たされるのだ！  
私はそんな子供達を見る度に、子供心ながら心の内に何度も母に  
感謝した；母の厳しい躰は「何時でも家族だけの居る間は、  
必ず母国語だけで話さず！」だつたの。彼女自身は日本語は  
とても話せ無かつた。隣組の会も有る度に、子供が私を通つた  
お陰で、朝鮮学校へ急に通学になつても、私にはハングルの文字  
だけ覚えれば良かつたのだ。

その後は徐々に引き揚げる日本人達を見ながら母は、「日本人の  
引き揚げの次は朝鮮人も必らず此の島から出さなう！  
他人より早く故郷へ帰るには港町で住みながら待とう！」と  
想出深い名好を後にしてのち1947年度は(旧大泊)コルサコフ市へ  
移住した。当時の私は朝鮮人国民学校4年生のおどけ鬘の  
少女だつた。

初めて来て見た(大泊)コルサコフ市には、その年は恐ろしい  
伝染病「腸チフス」で、一日に二人の子供を死の道へと奪はれる家も  
有った。毎日が葬儀の日だつたぞうだ！

恐ろしい病魔は可憐な家庭に限って奪つた。私もその病気に  
掛つたのだ！ 40日間を高熱で失態して居る枕元で母は「この恨を  
てくしては故郷へは帰れぬ。夫に逢う顔も無い！先祖に面目無い！」  
と狂おしい程懸命に看病した母は、病気が目覚めた時、  
気付いて見たら半白髪に変わった39歳の細くて若い美女だつた。  
母は貧困と戦つたから、娘の命を助けた為、有る物等、売つて貰つた。

当時のコルサコフ市は、サハリの各地から引き揚げを目的に、  
私も一と集まつた港町には、数知れぬ独身者達が、今日か？  
明日か？と待ちながら住む町になつて居た。(九州への徴用は  
樺太の西北部の幾つかり炭鉱だつたの？) 東西南北の林業、鉱業で  
働いて居た若い独身者達は、家も無く、処々に集つて居た。  
夜になると、私達の家にも大勢のおじさん達を集めては、お祖父さんの昔  
話(古代歴史)など聞いて居た。  
我家の苦しい状況を見抜いて居る独身者達は、母への求婚者も希に  
現われたのを、少女の私も気付く様になつたから、気荒い反抗心に  
充ちた、見苦しい女子に変つて行つた。東窓の男性靴を見ると怒つて  
足でけとはいたから「お父さんは生て居るのに！……」と喚き立てた事も有った

待つても、暮らしても引き揚げの望みはだんごと薄れたから  
老いた祖父母達は自分の娘の再婚を、密かに望む様になつたか  
荒れ物孫娘には今の付け様も無かつた様だ(後で解つた)  
大人達だけで話を決めた或る日、仲人役の人を訪ねて来た；  
「とても良い青年で、珍しい程感心な青年です、見逃さ無いで下さ」  
等々と語り並べてる前に向つて、「そんな立派な人を、おばさんは  
何故、お宅の婿にしないんですか？ おばさん処にも私と同い歳の  
娘が居るのに、家はお父さんが居ないと馬鹿にして、又学生の  
私に嫁に行けと言ふの！」と泣き騒ぐのには、誰も口も手も  
付けられずに7年迄卒業する事か出来た(当時のソビエトは  
7年義務教育制度だつた)

戦後のサハリに市内では朝鮮人国民学校は成立したか、講師  
教師が不足だつたので、夏休3箇中の1箇月間は教師講習会が  
有り講習実力試験に合格した人には卒業状として、証明書も  
渡され、その証明書も有ると初等課(料)小学生は受け持てる  
規則だつた。

「父に逢う迄には絶対に嫁にふんか 行くもんか！」と密かに心に決めてた私は、何か何でも此の講習会を卒業して見せろ！と母と祖母の助言を求めたが、誰も見知らぬ振りで聞いても下れぬ！(此の年1950年度は大泊から約80キロ近く離れた(落合)ドリンスク市で行われて居た、当時汽車では3~4時間掛った、車賃は；130~150ルブルだった)

仕方無く、知り合の床屋に駄々を込み掃除婦として臨時就職する事になった(学校を2日出たばかりの小娘は必要とされた)半個月分の前払いに150ルブルを受け取り、ドリンスクへと、汽車に乗った。到着したドリンスク市では、もうすでに授業中で「受け付け人」の事。試験だけは必ず合格して恥入る事は絶対に「他人から...！」と強情に根張り付いて、残り日数で講習を終えられ、不事に卒業状を受け取り幸福いばかり、自身巧々と嬉び湧んで帰った家には「9月には結婚式を上げろ」と訓えられた仕度か私の帰りを待つて居た!!!

「私は働きます！お母さんと二人で働けば一家族は生きて行けます！もう少し辛抱すればお父さんにも逢えますのに！」と祖父の前に聞いて見せながら哀願した卒業証書は「それ以来、私の生涯では二度見た事は出来無くなった」

「親に従わす、勝手な事をす、不孝者に何の成功も有る物か？！不礼者！」と怒鳴るお祖父さん、昼夜構わず泣き騒ぐ孫娘、おろろと慰めるお祖母さんに向つて叫ぶ祖父の高い怒鳴声、自分の運命を願ったから泣き崩れる母、家の内は；一週間と言う長い日々続いた。

誰を見てもお母さんが一番可哀相でならなかった！何日待っても同じ「光景のくり返し」！少りの変化も望めぬ、それは一週間で終る事に決め、親孝行する事に決めた！大人達も望んで了15才の花嫁になり9月25日に式を上げ、4人兄弟末弟22才の豊晋永の妻になった

兄達3家族全員は20名近く、一諸に住み方から勿論、引を揚がを一家に集めて待つて居る所へ、私が4人目の嫁に入つて来た。

決めた職場も無く、その日暮して居た嚴家では一番末弟「消晋永、更には私の夫が始めた写真師で暮しを支えて居た。

私が嫁いで行った、次の年1951年度には、祖父母の望み通りの、何時も母の再婚を反対して居た孫娘の私には、何人の知らせも無しに、祖父母は自分の娘を再婚させたのだった。1952年度の春、お祖母さんが訪ねて来て、近きながら知らせて下れた。

此の年、サハリに初めての朝鮮人師範学校成立された。その年は、夫の兄達を心配しながら待つて居た私達夫婦の間に長男「柱完」が誕生したのが8月25日！その時初めて百日を過ぎた後分家になったが私の実家とは遠く離れたレオニドフオ村(旧上敷番)だった。

再婚した私の母は又も無情な運命に置かれた事になった夫に向えた人は1944年度強制徴用で連行されて樺太に渡った故郷が慶尚南道の人で、お酒も飲まぬ真面目な人と信じたのに、不幸にも彼は「センソク」と言う持病人だった。老いて行く老人達に病人を養うための生活は、人に言えぬ心の苦勞が且に見えて来た妹の明子も、まだ入学前の幼子なのに義父を「お父さん」と言わず「おいさん」扱いにだけて「懐いて」下れぬのが義父との間を日増しに冷たくなって行くを見ながら胸の中で後悔始めた。

妹は高校卒業後(当時は十年義務教育制に変わった)お父さんをさかに行くと出た。(故郷の江原道江陵は38度線の近くの南に有ったので)6.25戦時で「若」か北へ行ったかも知らぬとの望みは有った)当時のサハリには北朝鮮の領事館がナホトカから毎月、サハリの朝鮮人青年を呼び掛けて居た頃だった1963年の春妹明子は国境を越えて旅立った。



その後の母は日増しにやつれて行きながら真白の白髪に なる  
しまった、可憐い姿に変わって行った。1961年度には

私達が4人の子供を連れて、移住して来たユジサハリニスク市  
(旧豊原)はユジサコフ市とは40キロ距離なので、工場で勤めながらも  
土、日曜は実家で宿つて来る事が多くなった。

私に来ると嬉れその余り、想出話で夜を明かす時は、運命の道で  
はぐれて | いた 夫との束の間で有った幸福を 想い浮べては 泣き笑んだ  
心理的疲れが 肉体もおさげりなから、母は心臓病から 脳出血病で  
倒れられた。病気で 悩んで 居た時の母は 私を側に 居て下れるの  
何より薬だったのに、近くに 居んで 居ながらも 知らせを受けて 駆け  
付いた時は、すでに 息を引き取った 後だった。 特におぼろ!

安らかに 固く閉じた 目と口は、愛する夫を どれほど、逢ったら、どれほど  
話したかったらうか! どの位の 胸の痛み 人間を 死の道へと 追いやるのか!  
此の世の 恨み、つらみを 胸に 密めた まゝ 永遠の 眠りに 入って | いた!  
時は 1968年 8月29日 59才の 短い 生涯を 悲く 終えた! 二重徴用  
被害者 達の 内の一女性が 私のお母です。

特別に 制定された 新国際法津を (記憶、責任、正義、と称する会)  
知る 様になり 遺族会 会員の 一人として 参加する 事になったのです。  
此の度を 期回 (戦争被害者 補償問題に 関する) に 語る、私達  
二重徴用連行者 遺族会には 有り触れた 内層です! 今日迄 行方不明  
者の 遺族達も 居ります、又 惨い 運命に 置かされて 生き抜いた 人も  
居ります

今日に 到って 振り返って 見ますと、何の 成功も 出来無かつた、ただ  
生きる 爲に だけ 馳せ 回つた 私達 | いた!  
夫の 嚴晋永も あれ程 故郷への 帰りを 望んだが、1988年の ソウル  
オリンピック<sup>7</sup>が 間近に 有る 事にも 気付かず 7月に 喉頭ガんで  
60才の 生涯を 終えた。(その頃迄も、海外での 見聴は 難 | かつた  
ので、オリンピックの前 知らせは 無かつた、閉会直前に 右の  
怪病は 解る 様になった)

樺太、ソビエツト 社会主義、改革ロシア、祖国へ 永住帰へ と...  
今日、振り返って 見ますと、わずかな 60年の 月日を かけぬぐつた。  
この 半生での、私の 生涯は、激烈な 波乱な 歴史の 運命を  
持つて 半生に 島と 一生懸命に 生き抜いて いる内に、何時 | かの  
世紀を 踏み越えた、年金者 會祖母の 一人になり、消すに 消せぬ  
深い 想出を 語り 続けるから 自信を 失つた

学識も 無い 愚念さに、実用語辞典を めくり | 書きまわした、  
此の文には 違つた 文章が 多し事は 覚悟の上で、礼なから 書  
きまわしたのは、今は 他界の 人の 霊前に 捧げる 文として、又  
新世紀の 日本は、何時かの 幼い 私達に 教育して 居られた 頃の 様な  
本当に 正義の 美しい 国で 有ります 事を 心より 祈りなから、  
不平等な 時代の 犠牲に なる、悲 | しい 生涯を 抱いた まゝ。

此の世を 去つた、有川 昭、二重徴用被害者 連中の 一人で 有つた、私の 母を  
遺族の 一員として、綴りまわした 此の文は、  
新世紀法律 ; 記憶、責任、正義の 法廷に 訴える 次第で  
有ります !

2001年、7月2日

ユジサハリニスク市にて  
二重徴用被害者 遺族会 会員

年金者 金愼起 66才



### 오 세욱 (남) 1929년생

- 아버지가 큐슈탄광에서 사고로 순직하였으며, 종전 후 가족보상을 받지 못한 사람입니다. -

氏名	吳康述	本名	私本康述
生年月日	明治38年 12月1日	西歴	1905年
本籍	慶尚道居昌郡 北上面韓井里 介三		
募集	昭和16年度	西歴	1941年
家族連行	昭和17年度		1942年
勤務	樺太惠須郡塔路町白鳥沢炭石		
徴用	昭和19年度	西歴	1944年
行先	九州福岡県嘉穂郡桂川町		
	明治炭業株式会社 平山炭石		

私は故私本康述 韓名 吳世康述 の長男 私本世煥 と申す  
 1944年 昭和19年 お父様の九州徴用の時高等小學校 2年生に在  
 今私に浄いのは其の時のお父様の服装です国防色の国防服  
 を着たお父様は塔路所中央の山の下に在る役場集合され其  
 処で塔路所の偉才會社の偉才隊にこれる家族連中より後防産業戦  
 士の名譽の勲章に呼んで見送りましたとすお父様が9月15日  
 其れが3月後其の年1944年12月22日軍です私達の家庭は大変  
 です私達のお父様が現場事故の落盤で死亡されたので私の  
 お母さんは日本語一言知らずの田舎育ちで私は何物にも知らぬ一  
 つの子です其処で私達6人兄弟連れの手一人でお母様の苦勞  
 は何と云へば云へない思ひました実に苦しい哀れでした  
 翌年1945年2月22日に お父さんの骸骨が職邊の手で届き白鳥沢  
 職員俱樂部で葬儀と上げました私達は後防産業戦士の職着の被  
 害者として障害金でも待つて居りましたが国家からは1銭も無った  
 様ですお母さんが聞いた話です私か20才に成る迄で私達  
 全家族を教養するとの話であつたが其の8月に1連軍 樺太点領  
 の結果と成りました戦後の事情皆様の法存知のばすです  
 歸朝未だ事一通の便りも取らぬ事が出来ぬ状態が十数年續き  
 半世紀が過ぎた今 1連首相 行方不明の旧大統領様のお蔭で  
 さんで国際が開け任民往來等実に有難く感謝します  
 政治上も法律上も何れも判りぬ私です一言日本全國民  
 皆様に放送します 1930年末-1940年代私達が郷に居た時

## 殉職

昭和十九年十二月三日

於

福岡県嘉穂郡桂川町

明治炭業株式会社

平山炭業所

## 葬儀

樺太惠須郡塔路所

第2大平炭業所管理部長葬

昭和二十年二月二十日 十四時

於職員俱樂部

葬儀委員長 管理部長 保利啓吉

大日本政府は朝鮮國を植民地の制度に於き内鮮一體だと唱へた"ム"す朝鮮人の代名を改名し學生連には朝鮮語一言使へば"國言語式"と教訓を引きます朝鮮人半島におも蔑視の下に韓国人を奴隷使ひする爲め韓太今のサハリリンに連行したんです其れ所は無い又1944年は韓太から私達のお父様達を九州や本州へ徴用に引けつて行つて私達其家族は其の儘吹っ飛ばし置かれて本當に人情でもない人倫でもない無情野蠻的ではないほうか日本時代の私達朝鮮人は父母の無い子供と同一立場であつたんですね国の王も大系統領も無いとすると日本は父母の無い子供を態と人も誰にも無い荒野に連れ行つて投げ捨てるのだと同一事に成ります私が13才で1才か園を離れ又外地で父親と離れたのも60年近も成りました又此の世と別れる時其れも近か付き80年代の老人と成りました私は故國歸りたい余りに子供達を残してでも歸國する積りでいたが内の家内で巨むのて歸國も出来ず今待つのはだんだん貴方が實際に此のサハリリンに残さされて行く事を歸る事も出来なく成つた人々の立場を顧み見て下さる事です内の家内の人には言つて居ます子供と離れ暮しは何の意味の無い事ですと日本の皆様ト馬太弁護ですが失礼します戦後韓太に残留された韓人に興へた事情をもう一度考へて見て下さい其の時は國の爲めに必要とした戦争の勝利の爲に必要とした何んでも韓太の徴用が必要だ必要だだんすね其れで戦争に負けるとそれ韓国人は必要無い例真い吹っ飛ばしてしまえ自分らの国士は一人残らず歸國させて下さいサハリリンに残つた日本人は本當に何れも居ません内鮮一體で在つた植民地の奴隷は吹飛ばしては實に情無いです野蠻です今もう一度私の父さん事を繰り返しますが父さんの血汗の染つた積立金も一銭貰う事も出来なくて其の儘で腐るんです哀いそうでは有りませんが哀いそうだと笑つて下さい今残されて居る人達の歸國問題から二重徴用者達の問題等色々韓国人達の問題は日本政府で必ず責任を負う事ですわ語りたい事はふえですが失礼しますさびふ 2001年7月4日

吳世煜 謹啓

## 서 정길 (남) 1944년생 - 아버지의 생사확인을 요구합니다 -

二重強制徴用連行朝鮮人協會 御中

ユジノサハリンスク市

2001年7月4日

SO DIN GIR — 1944年10月28日  
サハリン州・ウグレゴルスク (UGLEGORSK) 地区  
シャフチョルスク (SHAKHTERSK) 生まれ

父 SO DYA GYN (徐 自片) は、私が生後2ヶ月の時に九州へ二重強制徴用連行されました。

兄弟は全部で8人もおり、生活は困窮していました。

戦中・戦後の生活は、父のいない子供に深く苦い傷を刻み付け、私は今でもひもじく寒い子供時代の恐ろしい夢で目がさめることがあります。

15歳までは義父の姓を名乗っていました。姉から家族の悲しい歴史を聞いた後は、父の姓を名乗ることにしました。母も早くに亡くなり、育ててくれたのは親戚達です。母の死後はさらに生活が苦しくなりました。父の写真すら残っていないことは腹立たしく大変つらいことです。50年以上父の本名を知らず、今年になって初めて、炭鉱で働いた炭鉱夫達のリストをくまなく探した結果、父の名前を見出しました。

今さらながらではありますが、そしてこうなってしまった責任は私自身にはないのですが、子供として親に対する義務を果たしたいと強く願っています。父の記憶と、強制連行され家族・親族を失った父数千人の同胞達の記憶を取り戻したいのです。少しでも何とかしたいのですが、今までほとんどこの問題が進展していないことは大変残念です。

1961年に学校を卒業した私はネベリスクの水産学校へ入りました。卒業後はポロナイスクの漁業コルホーズ・ドルージュバに配属になり、25年間の間、陸と洋上で様々な仕事をしてきました。主任技師としては10年働きました。コルホーズで働きながら、通信教育でウラジオストックの極東水産技術大学を修了しました。

現在は、コルホーズ・ドルージュバの子会社である OOO "PORONAY" 社の専務として働いています。朝鮮人社会の社会活動にも積極的に参加しています。

SO DIN GIR *Bisung*

## 지난 삶을 돌이켜보면서...

### 정 태식(남) 1930년생



현재 주한인회 고문으로서 활동하고 있는 정태식씨는 한인계에서 널리 알려진 분이다. 더군다나 50~60년대 조선학교 교사·교장직에 있으면서 동포들의 계몽 사업에 노력을 아끼지 않았으며 우리 민족지 투고 및 보급 사업에 남다른 열성을 보였기 때문이다. 뿐만 아니라 가내(家內)에서도 부모를 존중하는 아들로써, 잘 보살펴 주는 형님, 오빠로서, 지애로운 아버지로서, 언제나 알아주고 곁에서 힘이 되어주는 남편으로서 자기에게 맡겨진 의무를 성심껏 지켜온 정태식씨. 정태식씨를 이번호의 지상에 모시고자 한 필자는 그의 지난 삶의 회고담을 들어보았다.

▷선생님이 한국에서 태어나셨다죠. 거기서 보낸 아동시절이 기억되세요?  
▶그럼요. 유년시절과 반수의 아동시절을 한국 농촌에서 보냈습니다. 당시 농촌의 생활은 아주 빈궁했는데 전기불·목욕탕·시계도 없는 그런 생활을 해야 하

었던 것을 언제나 잊을 수 없습니다.

정태식 학생은 8살에 보통학교에 입학, 그가 다니는 동안 이 학교는 보통학교로부터 소학교·국민학교로 세번이나 이름이 개칭되었다. 이것은 일본이 우리나라를 침략한 산물이며 전쟁수행정책에 기인돼 있다고 정선생은 간주하고 있다.

▷어떻게 하여 사할린, '그 당시 화태라는 섬에 들어오시게 되었습니까?'

▶내가 2학년애 올라가는 해-1939년에 아버지가 화태모집에 끌려갔는데 1943년까지 한번도 집에 돌아오지 못했죠. 그는 계속 소일국경에서 멀지 않은 현 보슈나코워탄광에서 굴진공으로 일하고 있었습니다. 태평양 전쟁개시와 더불어 농촌생활은 더욱 힘들었다. 아버지 없는 생활은 더는 참을 수 없었다. 그래서 가족모집으로 정태식 학생은 어머니·형·여동생과 함께 1943년 가을에 아버지가 있는 화태를 찾아오게 되었다.

형님은 합숙생활을 하면서 직장을 다녔다. 1년후 17살된 형님이 아버지와 함께 또 여러 사람들과 함께 일본 최남단섬 "큐슈"의 야마노 탄광으로 연행되었다. 이것이 오늘날까지 부모·형제들을 이산가족으로 만든것이다. 형님은 1944년에 가족과 생이별한채 차후 한국에 나가 살게 되었으며 종전후 아버지는 다행히도 가족을 찾아 화태로 돌아왔으나 탄산의 고된 노동 끝에 직업병으로 일찍 세상을 떠나고 말았다. 그러므로 어머니와 동생들의 모든 무거운 책임을 정태식씨가 져야 했다.

▷전쟁후 전문지식이 없이도 교편을 잡을 수 있었습니까?

▶저는 계속 학교에서 우수한 성적으로 공부하였으니까 선생님들의 총애를 받았죠. 최우등 성적으로 학교를 졸업했길래 교원집단이 저에게 소학반 교사직을 맡긴 것 같습니다.

그는 교편을 잡으면서 계속 지식을 연마하기 위해 노동청년야간학교 10학년을 졸업하고, 유즈노 사할린스크 사범학교의 전과정을 속성 마쳤다.

현재 정태식선생의 많은 제자들이 대학을 나와 사회·경제·문화 여러 분야 높은 직에서 열심히 활동하고 있다. 정선생은 특히 제자들이 그를 만날때마다 "선생님"하고 반갑게 인사하는 것이 "나의 마음을 흐뭇하게 하여주고 그를 더 젊게 하여준다"고 토로했다.

▷탄광으로 전임된 원인은 조선학교들이 문을 닫게 되어서이죠?

▶사실이죠. 구소련때 조선학교 개편정책으로 조선학교를 일반 교육학교로 만들었던 것이죠. 그래서 할 수 없이 탄광으로 넘어가 탄부생활을 하게 되었습니다.

8시간 노동제였으나 광부들은 예나 마찬가지로 직장에 직접 종사하는 시간 외에 또 4시간이나 전부 허비해야 했다. 이런 생활을 정태식씨는 31년동안 계속하여 왔다. 이같은 힘겨운 직업에서 얻은 것이라고는 다만 노동노병의 칭호와 승용차를 순서를 밟지 않고 구입한 것 뿐이다. 1980년도부터는 탄부들의 노임을 직접 손에 지불치 않고 국가저금저축으로 넘겼다. 결과 상당한 자금이 "재"로 되고 말았다. 이분은 탄부생활에서 얻은 큰 경제적 타격이며 건강을 훼손시킨 것이다.

▷생이별한 형님과 언제 만나보았습니까?

▶우리 형제는 1986년에 제일 화태귀환한국회 고 박노학회장 그리고 타카키 켄이찌 변호사의 도움으로 일본 동경에서 처음 만나보았습니다. 헤어지지 42년만의 극적 상봉이었죠. 서로 안고 가슴속에 수많은 사연들을 통곡의 눈물로 풀어야 했으며 그동안의 생활이야기, 친척들, 고향의 학우들에 대한 이

야기로 밤잠을 이루지 못했으며 장래 모두가 한국에서 한데 모여 살 계획도 잡아보았습니다. 2주일이 꿈같이 빨리도 지나갔다. 그 후 몇년이 지나서 이윽고 그들은 수많은 친척들이 환성을 받으면서 조상의 땅을 밟았다. 그 때의 감격적인 심정을 이루 다 말로 표현할 수 없다고 정태식씨는 말했다.

한국에서 정태식씨의 형님은 부모를 두고 "고아"생활을 하지 않으면 안되었다. 그러므로 정규학교를 수료치 못하였으나 한국의 새마을 운동의 선구자로서 고향마을 사람들의 존경을 받았으며 현재 대구에서 생활하고 있는 그는 자식 5남매를 모두 자립적 생활을 하도록 도왔다. 그는 대한 예수교 장로이다.

▷선생님이 여지껏 어머님을 모시고 같이 살아오시느라 수고가 많았습니다. 특히 부인의 노고를 지적하지 않을 수 없습니다.

▶우리 어머님은 아주 인자한 분이었어요. 그는 우리들에게 언제나 정직하게 살아야 된다고 훈시 하시면서 근면하고 존경심 많은 그런 사람들로 육성하려고 노력했어요. 아버지 없이 우리 6남매가 모두 몇몇한 자립적 길에 나선데는 어머니의 노고가 많았다고 생각합니다. 결과 형제들이 모두 고등 및 중등교육을 마쳤죠. 그 중 남동생 덕식은 치타의대를 마치고 현재 사할린주 포로나이스크 구역 중앙병원 외과과장으로... (중략) 막내동생 옥순이는 하바롭스크재판소에 근무하고 있습니다. 자녀들은 어머니가 100살까지 생존할 것을 기원하였다. 그러나 한국에 있는 큰 아들을 다시 만나 보지 못하고 애석하게도 만 90세를 일기로 재작년에 별세하였다.

정태식선생님은 "동생들 많아 나는 장가도 늦어서 들었다"고 실토했다. 이윽고 맞은 배필은 황순녀양(1933년)이었다. "그는 43년동안 시어머님의 곁에 있으면서 많은 시동생들의 결혼식, 시부모들의 회갑을 비롯하여 수차례 걸친 가정대사를 아무 불평없이 양심껏 치르었으며 일가정의 주부로서 남부끄럽지 않게 살아온 것이 우리 가정의 자랑거리로 되고 있다"면서 "시동생들도 모두 자기의 형수님을 어머니처럼 존대하여 감사하게 생각하고 나 역시 내가 선택한 사람이기에 상호존경을 잊지 않고 서로 의지하면서 생활하고 있다"고 정태식씨는 만족한 어조로 말했다. 정태식씨의 자녀들도 고등지식을 받았다. 아들은 광산기사, 큰 딸은 건축기사이고, 둘째는 기상학전공, 막내딸은 모피 전문과를 전공했다. 우크라이나 하리코브시에서 상급기사로 일하고 있는 큰 딸외에 나머지 자녀들은 유즈노 사할린스크에서 자기들의 기호에 맞게 일을 하고 있지만 말말과는 소련이 "이산가족"으로 만든 것과 다름이 없다.

▷형님이 한국에 계신다는데 선생님이 영주귀국하지 않은 이유는 어디에 있는지 궁금합니다.

▶사람마다 영주귀국에 대한 생각이 서로 다르죠. 저는 일평생을 이산가족의 한을 풀지 못하고 있습니다. 이것은 일본 제국의 조선침략과 전쟁정책의 산물이라고 생각하죠. 자유 왕래가 있었던 때는 다르지마는 전쟁으로 말미암아 생긴 생이별이 이산입니다. 그러므로 나의 가슴속에는 이산가족의 깊은 뿌리가 박혀있죠. 또 다시 자식까지 이 비극적인 이산가족을 만들 수 없습니다.

계속 정태식씨의 말에 따르면 "누가 고향을 그리워하지 않겠는가?" 그러므로 완전한 영주귀국을 위하여 투쟁하며 그 결과를 달성할때까지 투쟁할 것을 염두에 두고 있으며 공명정당한 해결 방도와 방침을 찾기 위하여 영주귀국을 하지 않은 것이다.

사실 부모로서 자식들을 두고 영주귀국하지 못하겠다는 정태식씨의 말이 당연한 것 같다.

(이복순기자)

#### 정태식씨

1930년 한국 경북출생.  
일본국민학교 고등과 수료.  
조선 7년제 및 사범과 수료.  
알렉산드롭스크-사할린스키광산전문학교 수료.  
첼리놉스크 조선소학교 교사·교장직 근무.  
첼리놉스카야 탄광 기술원 종사.  
1996년부터 연금생활.  
기혼아들 1명 딸 3명

사할린주 한인 이증징용광부유가족회  
대표단의 방일 일정 및  
일본 “혹카이도” 신문에 발표된  
1944년 사할린 징용의 진상 자료



● 동경 일본 외무성에서

2001년 7월 10일  
사할린주 이증징용광부 유가족회대표단과  
일본 외무성 북동아시아과 과장 히타마쓰 겐지  
가운데 왼쪽은 사무관 니시무라 아즈코  
오른편은 외무성  
북동아 외무사무관 오카와 소-이찌로



● 동경 일본 외무성에서

사할린주 이증징용 유가족회 대표단  
오른쪽에서 일본 변호사 타카기 켄이찌  
안명복(전) 회장 / 정태식 사무장  
/서정길 (현)회장



● 동경 일본 외무성에서

왼쪽편에서(외무성 대표단)과  
1. 니시무리 아즈코 (사무관)  
2. 히라마쓰 겐지 (외무성 북동아시아 과장)  
3. 오카와 소이찌 북동아 구 외무사무관  
  
흰 옷차림 왼쪽에서부터(유가족 대표단)  
1.일본변호사 타카기 켄이찌  
2.안명복 (전)회장  
3.정태식 사무장  
4.서정길 (현)회장



● 동경 일본 미쓰이광산 주식회사에서

오른쪽에서(미쓰이 광산 주식회사 대표단)  
1. 미쓰이광산 주식회사 총무부장 카지야 카즈히로  
2. 업무과장 사루타니 토모노리

보이는쪽 오른쪽에서(유가족 대표단)  
1. 타카기 일본변호사  
2. 안명복 (전)회장  
3. 정태식 사무장  
4. 서정길 회장  
5. 야수이 일본 타카기켄이찌 서기



● 일본 동경에서

2001년 7월 10일

미쓰이(三井) 광산 주식회사에서의  
책임자들과 면담광경



● 동경 미쓰비시 마테리알 주식회사에서

2001년 7월 10일

서정길 회장은 선천에 대하여 설명하고는  
마음을 진정시키지 못하였다.



● 동경 미쓰비시 마테리알 주식회사에서

사할린주 이중징용 유가족대표단과 면담장면

1. 니타 후지오 총무담당 과장
2. 요시쿠라 가즈유리 법무관
3. 다이고 슈이치 총무담당 부장
4. 야마다 도시아끼 총무센터 그룹총무



● 동경 미쓰비시 마테리알 주식회사

오른쪽에서부터(유가족 대표단)

1. 타카키 일본변호사
2. 안명복 (전)회장
3. 서정길 회장
4. 정태식 사무장
5. 야수이 일본 타카키변호사의 서기



● 동경-면담을 마치고

각 대표들은 자기들의 생각에 잠겨 헤어진다.



● 동경, 일본 외무성앞에서 면담을 마치고

오른쪽에서

1. 야수이 서기관
2. 타카키 변호사
3. 안명복
4. 서정길
5. 정태식
6. 마에다 서기



● 동경, 일본 외무성 청사앞

사할린 이중징용 광부 유가족회 대표단과 일본  
타카키 변호사와 서기와 함께



● 동경 미쓰이 광산 주식회사 입구에서  
회담직전



미쓰이광산 주식회사 청사앞에서  
면담을 마치고



미쓰이 광산 주식회사 청사앞에서  
1. 서기 마에다  
2. 사할린 한인 이증정용 광부 유가족회  
사무장 정태식



동경에서  
고적 이바리기현 야마이찌 탄광고적지를  
향하여 질주하고 있다.  
운전대에는 타카키 변호사, 안명복씨



옛 야마이찌 탄광  
옛 야마이찌 탄광이 있던 곳은 현재 탄광의  
찾을 수 없었다.  
현지인들과 담화를 나눈 후 안명복씨가 선친  
의 사진을 보여주고 있다.



탄광이 있던 자리는 현대적인 이와끼시  
가 건설되었다.  
태평양 연안에 놓인 아름다운 경치속에  
깨끗이 정돈된 도시로 변화했다.



지도에서 보는 바와같이 "야마이찌"  
탄광이 있던 곳은 훌륭한 현대적 도시  
로 변화하였으며 당시에 탄광에서 일하  
던 광부는 한사람도 생존하지 않았다.



우리 대표단원들은 지방의 열성자들과  
담화를 하였으나 그들 역시 당시 2세~3세  
들로 현재는 60~70세인데 당시의 사태는  
잘 알수 없다는 것이었다.



안명복씨는 선친의 사진을 보이면서  
1944년 9월에 사할린에서 야마이로  
징용되어 와서 탄부로 일한 선친에  
대하여 지방주민들에게 이야기 하고  
있다. -가운데 설명하고 있는 사람-



● 안명복씨가 선친의 사진을 지방주민들에게 소개하고 있는 장면  
안철봉-야수다라는 일본성을 가지고 있었다.



● 새집들이 꼭 들어 섰으며 깨끗한 도시로 변한 옛 탄광마을의 일부  
“앞으로 우리는 무엇을 찾아야 할것인가?”



● 현대도시 교차점에서 사할린 대표단들  
1. 서정길- 왼쪽에서 두번째  
2. 정태식- 오른쪽에서 첫번째  
3. 안명복- 가운데  
4. 타카키 켄이치 일본 변호사- 왼쪽에서 세번째



● 옛 탄부들의 마을은 깨끗한 도시로 변하였다.  
마을은 좋았으나 아무런 흔적이 없으니 유감이다.



● 이와기시의 발전에 대하여 지방의회 사람의 설명을 듣고 있는 사할린 대표들



● 1944년 징용연행에 대하여 설명하는 안명복씨 - 그는 선친의 사진과 안철봉 (야수다)의 사진을 보이면서 지방시민들에게 이야기 하고있다.



● 지난날 “야마이치” 탄광 마을은 새로 편입하였다.





◀ 이와기시의 한모퉁이 출입구의 광경



◀ 이와기시의 한모퉁이 길가의 장면



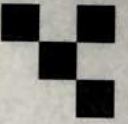
◀ 태평양 연안에 있는 이와기시의 좌편 경치를 배경으로

서정길 회장, 정태식 사무장, 안명복 현고문  
무엇부터 시작해야 하는지 각기 자기 생각에  
잠겨있다.



◀ 태평양 연안에 있는 이와기시의 좌편 경치를 배경으로

오른쪽에서:  
정태식 사무장  
서정길 회장  
타카키 켄이치 변호사  
안명복 현고문



◀ 잠깐 휴식을 가지고 커피를 마신후  
다시 행길을 계속할 것을 의논한다.



◀ 태평양 연안을 끼고 있는 크지 않은  
아담한 레스토랑에서 휴식시간에  
지방주민들과 담화하고 있다.



◀ 사할린 대표단

오른쪽에서:  
정태식 사무장  
서정길 (현)회장  
타카키 켄이치 일본 변호사



이중징용광부 유가족회

회장 서정길(왼편)  
야수이(타카키 변호사의 서기)



태평양을 끼고 있는 레스토랑에서

잠시 휴식하고 여행을 계속할 것이다.  
멀리 태평양 수평선을 볼수 있었다.



이마기시에서 서정길 회장

일본 변호사 타카키 켄이치씨와 함께



옛날의 세끼모도탄광

옛날에 세끼모도 탄광이 자리잡고 있던  
곳인데 지금은 아무런 흔적을 찾아볼수  
없었다. 무성한 산림으로 덮여 있다.  
그밑에 작으마한 논이 있고 벼가  
자라고 있다.



소나무와 활엽수로 무성한 옛탄광  
-세끼모도

자동차를 세우고 탐사하려고 지면을 이야기  
하는 지방주민과 사할린 대표들



아무런 자취도 없다.

석탄덩어리 하나도 찾지 못하였다.  
탄광들이 벌써 60년대에 문을 닫았기  
때문이다.



옛 탄광자리

이 자리는 탄광이 있었을 것이다.  
그러나 그 누구도 이 지방에 대하여 아는 분  
이 없었다.  
이곳은 후쿠시마현과 경계로 되어 있다.



새로운 분류의 이산가족이 생겼으며 그들은 이산의 상처로 인한 극심한 고통을 겪고 있다. 1944년 8~9월에 사할린에서 3,190명의 광부들이 징용되었는데 145명은 조반탄전으로, 3,045명은 큐슈 지쿠로탄전과 나가사키현으로 각각 징용배치되었다. 이것은 다만 현재 찾아낸 문서에 의한 것이지만 실제로는 더 많은 사람들이 연행되었을 것이다. 아직까지 이렇다 할 조사와 연구가 없으므로 사할린 한인 젊은이들 중 누군가가 상기 문제를 전문적으로 연구를 해주었으면... 그리고 일본정부는 이중징용광부들의 유가족 및 자손들에게 완전한 보상을 해야 된다는 것을 전세계와 일본에 널리 알려줄 것을 지원하는 바입니다.



# 一家離散 いえぬ傷

サハリン韓国・朝鮮人「二重徴用」

遺族「父の命日も知らず」

【ユジノサハリンスク】スクで家族離散の悲劇を 12日藤盛一朗「父の行 方が半世紀以上分からな い」―日本政府や企業に 「二重徴用」された韓国 ・朝鮮人のサハリン残留 遺族は、ユジノサハリン

スクで家族離散の悲劇を 鮎に向かった。「お国の ためにと笑顔で送り出し

た。それっきりです。父は翌年十一月、旧 戦後、新たに引かれたサハ 境の壁に隔てられ、家族 リンへ戻ってきた。奇跡 のつなかりは絶たれた。 同年夏、韓国慶尚北道 出身の鄭泰植さん(在日) は、西柵丹(ホシニヤコ ホ)で、福岡県の炭鉱に 向かう父と兄を見送っ

た。父は翌年十一月、旧 戦後、新たに引かれたサハ 境の壁に隔てられ、家族 リンへ戻ってきた。奇跡 のつなかりは絶たれた。 同年夏、韓国慶尚北道 出身の鄭泰植さん(在日) は、西柵丹(ホシニヤコ ホ)で、福岡県の炭鉱に 向かう父と兄を見送っ

사할린 한인 이중징용 유가족회가 피해보상을 청구하기 위하여 앞으로 재판을 제송할 것을 토의하고 있다.



「二重徴用」について話し合う遺族会の安明福 会長(左端)、鄭泰植さん(左から3人目)、 徐正吉さん(同4人目) ュジノサハリンスク

## サハリン残留韓国・朝鮮人

連行後、本州の炭鉱に移送

# 「二重徴用」で遺族提訴へ

【ユジノサハリンスク11日藤盛一朗】日本統治下の樺太に連行され、その後本州や九州の 炭鉱に「二重徴用」された韓国・朝鮮人炭鉱労働者の妻や子供が、十一日まで日本政府や 企業に補償を求めることを決めた。日本の市民団体の支援を受け、近訴を起す。

補償を求めているのは遺族会(安明福会長) ュジノサハリンスクに本 シヤフチョルスク(塔路 部を離れ「二重徴用」されたサハリン西部の出身 者二百八十八人(百二十歳が、二重徴用された 八家族)が、昨年四月に 人々の消息探しや、サハ リンでの慰霊碑建設の要 求内容をこのほど、在ユ ジノサハリンスク日本総 領事館に文書で伝えた。 東京の市民団体「サハ 同会の調べによると、 このうち韓国・朝鮮人は 約三千人。一割が家族を 樺太に残したままだっ た。終戦後、樺太が旧ソ 連軍に占領され、約三千 人が密航などで樺太に戻 ったが、大半の人々が消 息不明となった。 同会は、日本政府と三 菱マテリアルなど当時の 鉱山の所有企業を相手取 り、家族の苦痛の補償や 韓国への永住帰国推進な どを求め、近訴を起す。

1944년 전황이 급속히 변하면서 일본군은 퇴진하기 시작하였으며 제공권 뿐만 아니라 제해권까지 미국군에 빼앗기었으며 사할린의 석탄을 더는 배로 운송할 수 없게 되었다. 때문에 12개의 탄광을 닫고 노동력과 자재들을 일본 군수공장 지도로 징용연행하였다. 9,000명의 광부들이 연행되었는데 도시 사람들이 3,190명이 있었다. 그들 중 많은 광부들이 가족과 처자들을 사할린에 남겨두고 단독으로 연행 배치되었다. 이로 인해 수없이 많은 새로운 이산가족이 생겼다. 이 모든 조치는 1944년 일본제국내각의 결정에 의하여 취해진 긴급조치이며 비밀국에서 실천했다.

リン残留朝鮮・韓国人を―を決めたのは当時の政府 支援する会(会長の高木)であり、「二重徴用」へ 備二井澤士は、「樺太の責任は免れない」と指 石炭生産を縮小する方針一摘している。

문진들을 참조할 것

2001年(平成13年)8月22日(水曜日)

韓国 朝鮮人ら  
樺太から徴用

# 「もうひとつの棄民」



徴用前に撮影された安藤一家の記念写真。右端が父親の安藤七郎さん、左端が安藤福三さん。(矢野友氏提供)

## 補償なく生死も不明

「家族は長男のおまえに任せろ。勉学に励めよ。一九四四年(昭和十九年)九月、樺太西海岸の樺太探検隊の探検隊員として、たな七郎さん(当時)は、十三歳だった。長男の安藤福三さん(二重徴用連行遺族会長)に言いつけ、家を出てきた。これからの遺言を父の安藤さんが送りだされたのは、茨城県の常磐山一炭鉱。同僚で、戦時徴用された金沢斗斗は「食料は大食がすや、コリンばかり。死んだ方がまだ。日給、米軍糧撃、よ、多くなると思った」と生前語った。

▶ 写真は満鉄樺太が徴用された朝鮮人(1944年9月) "ホトカイ道新聞"が報道した。 "ホトカイ道新聞"が報道した。 "ホトカイ道新聞"が報道した。

ずっと家族を待ち、酒を飲んで男泣き

「家族は長男のおまえに任せろ。勉学に励めよ。一九四四年(昭和十九年)九月、樺太西海岸の樺太探検隊の探検隊員として、たな七郎さん(当時)は、十三歳だった。長男の安藤福三さん(二重徴用連行遺族会長)に言いつけ、家を出てきた。これからの遺言を父の安藤さんが送りだされたのは、茨城県の常磐山一炭鉱。同僚で、戦時徴用された金沢斗斗は「食料は大食がすや、コリンばかり。死んだ方がまだ。日給、米軍糧撃、よ、多くなると思った」と生前語った。

本集会参加者である私たちは全サハリン残留韓国・朝鮮人の総意と名義に依り我々の要求について再度日本政府に想起させる。

- 1・サハリン残留韓国・朝鮮人一世が第二次世界大戦中に南部サハリン強制連行された結果、戦後も帰還できずサハリン残留状態のまま今日に至った。日本は該のサハリン韓国・朝鮮人一世徴用連行者を日本国籍所有者として日本経由にて韓国に帰還させる義務と責任を負っていたが、その義務と責任を履行しなかった。サハリン韓国・朝鮮人一世が受けた物質的・精神的被害に対する賠償要求。
  - 日本はサハリン残留韓国・朝鮮人一世の中永住帰国希望者には韓国に住宅を建設して全員永住帰還実現させる要求。
  - 1・ロシア サハリンを自己の故郷と選択した永住帰国を望まぬサハリン残留韓国・朝鮮人一世にはロシア・サハリンに住宅を建設する要求。
  - 1・サハリン残留韓国・朝鮮人に対する長期支援のために特別基金創設要求。基金造成は、サハリン残留韓国・朝鮮人の一世徴用連行者の戦時貯金原簿通帳等貯金文件紛失に依り払い戻し不可能分を基金造成の一部に含めるのも有利である。
  - 1・サハリン残留韓国・朝鮮人二重徴用鉱夫問題解決の要求。
  - 1・第二次世界大戦後56年が経過し、三十年代に至ったがこの対戦に依り起こったサハリン残留韓国・朝鮮人の悲劇は未だに継続している。本問題解決には時効期間を問わず物質的・精神的被害補償は私たちの直接参加に基づき解決すべきである。
- 私たちは、共同的な協力と努力、日本政府の誠意ある問題解決の姿勢に基づきロシア政府、韓国政府の協力を依って早期解決が出来ると思じます。
- 私たちは、今後も本集会同様の行事をユジノサハリンスクだけで無く日本、韓国内でも振興する権利を保有する旨を伝える。
- 以上の決議文は、本集会参加者一同の総意により一致同意で採択した。

## 결의문

오늘 이 집회에 참가한 우리들은 사할린 잔류 전체 한국·조선인들의 명의로 일본 정부에 우리의 요청을 재삼 상기시키는 바이다.

- 가. 제 2차 세계전쟁과정에서 사할린잔류 한국·조선인 1세들의 강제징용 연행이주시킨 결과, 전후에 이 강제연행 1세들을 조국으로 귀환시키는 것은 일본정부의 의무이며 책임이었다. 그들은 일본국적을 소지한 1세 사할린 잔류 한인·조선인들-징용연행자들이었다. 그러나 일본은 그 의무와 책임을 이행치 않았다. 그러므로 그들에게 끼친 물질적·정신적 피해보상을 해야 한다.
- 나. 사할린 잔류 한국·조선인 1세징용 연행자들 중 영주귀국 희망자들을 위하여 한국에 주택건설을 계속해야 한다. 러시아와 사할린을 자기들의 고향으로 인정하면서 영주귀국을 하지 않고 러, 사할린에 영주정착생활을 희망하는 1세들을 위하여 러시아와 사할린에 주택을 건설해야 한다.
- 라. 사할린 한인·조선인들의 물질적 원조를 위한 특별기금 펀드를 조성해야 한다. 특별기금펀드에는 1세 강제연행자들의 전신 저금 중 문건 분실로 지불불가능액을 포함할 수도 있을 것이다.
- 마. 사할린 잔류 한국·조선인 이중징용광부 문제를 해결해 줄 것을 요구한다.
- 바. 제2차 세계대전이 끝난 후 56년이 경과하였고 세번째 천년기에 들어섰으나 이 대전이 기존 사할린 잔류 한국·조선인들의 비극은 계속되고 있으며 상기 문제해결은 시효기간이 없다고 믿으며 직접 우리들이 참가하는 가운데서 물질양면의 손해보상을 해야 한다.

이제는 일본과 사할린 잔류 한국·조선인들의 사이에 패인 깊은 골을 메울 때가 되었다고 생각합니다. 우리는 일본정부가 성의와 상기 문제해결에 대한 옳은 자세를 보이고, 한·러·일정부의 공동적 협력과 노력에 의하여 이 문제가 조기해결되리라고 믿습니다. 상기문제 해결이 종결될때까지 우리는 앞으로도 이와같은 행사를 유즈노 사할린스크에서만 아니라 일본, 한국에서도 진행할 권리를 가지고 있음을 상기시키는 바입니다. 본 결의문은 집회 참가자 전원의 일치 동의로 채택되었습니다.

## РЕЗОЛЮЦИЯ

Мы, участники настоящего митинга, от лица всех сахалинских корейцев, еще раз напоминаем наши требования к Японскому правительству:

- возмещение морального и материального ущерба, нанесенного сахалинским корейцам 1-го поколения, в результате насильственного переселения на юг Сахалина во время 2-й мировой войны и оставленным на Сахалине после окончания 2-й мировой войны, хотя Япония обязана была вывести через Японию в Корею своих подданных - сахалинских корейцев 1-го поколения;
- или строительства жилья в Р.Корея для сахалинских корейцев 1-го поколения, желающих выехать на постоянное место жительства в Р.Корея;
- или строительства жилья в России, на Сахалине для сахалинских корейцев 1-го поколения, считающих своей Родиной Россию, Сахалин и не желающих выехать в Р. Корея на постоянное место жительства;
- создания специального фонда сахалинских корейцев, существенная составляющая которого могла бы быть та часть банковских сбережений сахалинских корейцев, которая не может быть востребована из-за потери соответствующих документов;
- решение проблем сахалинских корейцев, дважды подвергшихся принудительной мобилизации.

По истечении 55 лет после окончания 2-й мировой войны, в начале 3-го тысячелетия драма сахалинских корейцев, одна из многих, разыгравшихся в годы 2-й мировой войны, продолжается и хочется верить, что данная проблема, которая не имеет срока давности и обращена к моральной и материальной ответственности при нашем непосредственном участии будет решена.

Пора подвести черту под трагическое взаимоотношение между японским народом и сахалинскими корейцами.

Мы надеемся, что общими согласованными усилиями, при доброй воле правительства Японии, при помощи правительства России и Р.Корея наша проблема будет решена в ближайшее время.

Мы оставляем за собой право и в будущем проводить подобные мероприятия не только в г. Южно-Сахалинске, но и в Японии, Р.Корея.

Резолюция принята единогласно всеми участниками настоящего митинга.

- ▶ 2001년 11월 30일 유즈노사할린스크시 일본 영사관앞에서 진행된 사할린 한국-조선인들의 집회 결의문을 한·일·러어로 작성하여 각국 정부에 전달하였다.

## 在日朝鮮人史研究

재일 조선인사 연구 第16号

1986年10月

抜粹:

### ④ 「樺太転換」政策による九州、常磐への再連行とその影響

敗戦一年前の1944年8月11日の閣議決定「樺太及釧路に於ける炭鉱勤労者、資材等の急速転換に関する件」は南樺太の朝鮮人炭坑夫に大きな影響を与えた。その「実施要綱」によれば南樺太の稼行26炭鉱のうち恵須取以北(西海岸炭田北部地区)の14炭鉱全部を整理し(24)、これにより生じた余剰労働力9000名(日本人6000名、朝鮮人3000名)と生産資材を本土の九州(25)と常磐の各炭鉱に緊急配置しようとする大規模なものであった(表9)。まず労働者(樺太転換労働者)が、次に生産資材(26)が緊急輸送されることになり、この時朝鮮人炭坑夫は全員が現員徴用を受けてから8月25日より9月末までに船舶、鉄道を乗り継いで大急ぎで九州と常磐の各炭鉱に再連行されたのであった(表10)。この結果、44年7月末に南樺太の各炭鉱に在籍した6120名の朝鮮人炭坑夫数(表8)は9月末には3000名前後に半減したと考えられる(尚、整理炭鉱に在籍していた請負夫、臨時夫の多くは恵須取以南の11の維持炭鉱に移動したものと思われる)。

戦争末期のこの「樺太転換」政策実施が直接の原因で、今日まだ未解決のままの一つの重大な問題が戦後に生じた。即ちこの時、石炭資本は朝鮮人労働者は本土に輸送したが朝鮮人家族は一部を除いてほぼ全員を南樺太の炭鉱住宅に置き去りしたため、敗戦後、日本人は南樺太から引揚げる事ができたし(27)、また日ソ共同宣言の調印(1956年10月19日)以降は日本人妻を持つ一部の朝鮮人も日本に帰還できたのだが(28)朝鮮人のみの家族は日本や韓国に引揚げる機会が全く与えられず、その結果、家族が離散したまま今日に至っている事実である。

その具体例として常磐炭田に再連行された朝鮮人炭坑夫の場合を考えてみたい。常磐炭田には1944年9月に南樺太の四つの炭鉱から343名の朝鮮人が再連行されて来たが、このうち家族を伴ったのは一炭鉱だけだった(表11)。このため日本の敗戦後、GHQ(連合軍最高司令部)が介在して常磐炭田から朝鮮人が集団帰国する際、南樺太に家族を置いて再連行された朝鮮人(29)の中から、すぐに朝鮮に帰らず南樺太にいる家族が常磐炭田に来るのを待って合流しようとする者が出て来たのは当然であった(表12)。しかし前述の様に南樺太の残留朝鮮人が朝鮮人家族だけで日本や韓国に帰還することは今日までできなかったことから、これらの常磐炭田に再連行された朝鮮人達がその後韓国に帰国したとしても、日本に残留したとしても、彼らの家族とは今日まで再会できずにいると考えられる。

### 在日朝鮮人運動史研究会

- ▶ 이상은 일본에 있는 재일 조선인 운동사 연구회 회원 나가사와 시게루씨의 연구자료의 일부이다. 그는 조선인 강제 연행사를 연구하고 있으며 자료 수집을 하였다.  
연락처: 일본도쿄 Tel:(03)3353-1885 Fax:(03)3357-3688 나가사와 시게루